

梶山女学園大学・大学院 FD 委員会活動報告書
(平成28年度)

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第4号 (通巻 第17号)

平成 28 年度

梶山女学園大学・大学院FD委員会活動報告書

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第4号（通巻 第17号）

相山女学園大学・大学院FD委員会活動報告書（平成28年度）

目 次

I	はじめに	全学FD委員会委員長・大学院FD委員会委員長 後藤 宗理
II	大学FD委員会の活動	
1	全学FD委員会の活動記録（平成28年度）	3
2	小委員会活動報告	13
2-1	授業アンケート・シラバス調査等小委員会	13
2-2	授業改善小委員会	16
3	各種研修	23
III	大学院FD委員会の活動	
1	大学院FD委員会の活動記録（平成28年度）	27
IV	学部FD活動報告	
1	生活科学部	57
2	国際コミュニケーション学部	63
3	人間関係学部	66
4	文化情報学部	81
5	現代マネジメント学部	82
6	教育学部	86
7	看護学部	89
V	研究科FD活動報告	
1	生活科学研究科	101
2	人間関係学研究科	103
3	現代マネジメント研究科	107
4	教育学研究科	108
VI	FD委員会名簿	

I はじめに

はじめに

相山女学園大学全学FD委員会委員長
相山女学園大学大学院FD委員会委員長

後 藤 宗 理

大学教育の質保証が中央教育審議会答申などで話題になってからかなりの年月がたつが、どの大学も試行錯誤の状態にある。焦点が定めにくく、具体的な活動を計画してはみたものの、その成果を客観的に示すことが難しいのが現状である。教員の自助努力には限界があることを認識したうえで、全学FD委員会は大学全体の組織的活動を企画してきた。

大学教育の質保証を担っているのは大学教員の教育能力の質保証であるという指摘もある（佐藤浩章（2017）「大学教育の質保証を担う大学教員の教育能力の質保証」、早田幸政（編）大学の質保証とは何か、エイデル研究所、p.106－117）。大学など高等教育機関に籍を置く大学教員が増大した。教員の採用に際しては研究業績を中心に審査され、教育上の能力が問われることはあまり多くない。その結果、教員自身教育上の能力については不安を抱えている人も多いといわれている。

こうした状況を背景にして、本学全学FD委員会も毎年FD活動を計画している。

学部学科では「教育内容検討会議」と学部FD委員会を中心に、カリキュラムの検討や学生の授業評価アンケートの実施と分析を行っているが、国内外の動向を視野に入れたFD活動を計画するためには、全学FD委員会の組織的活動が重要になってくると思われる。

平成28年度の全学FD委員会は、平成27年度に策定した活動計画を見直して、教員のFD活動として適切な活動に限定することとした。そのため、研究倫理教育など他の全学委員会に移行したものと実現可能性の低い活動については削除した。

一方、学生の授業評価アンケートの実施時期を前期後期のいずれかとしていたものを、前期後期とも実施することとした。また、授業評価アンケートの項目数などについては検討の余地があるのではないかという考えの下、分析を行ったが、次年度への課題とした。

年齢の高い教員からすれば、現代の教育技術や教育機器の進歩は、隔世の感がある。現代の大学生がごく自然になじんでいるそれらの機器利用に教員が知識レベルで追いつくことは難しい。そのような問題意識を持って、平成28年度は「ICT利用教育の実例」として相山女学園大学附属小学校の実情を報告していただいた。学校法人相山女学園の各学校の協力関係を促進する意味もあったが、さまざまな学校段階での実情を知ることが最終段階の大学での教育活動に生かされることが期待される。

現代的なテーマとして話題になることの多いアクティブラーニング、ルーブリック評価、ティーチング・ポートフォリオ等は、今後教職員の間で共有したい事項であり、これらについて平成29年度のテーマとして取り上げたいと考えている。

Ⅱ 大学FD委員会の活動

- 1 全学FD委員会の活動記録（平成28年度）
- 2 小委員会活動報告
 - 2-1 授業アンケート・シラバス調査等小委員会
 - 2-2 授業改善小委員会
- 3 各種研修

Ⅱ. 1 全学FD委員会の活動記録（平成28年度）

① 全学FD委員会の活動記録

（第1回） 平成28年4月26日（火） 17：00～18：10 ※平成27年度第10回 委員会と合同開催	1. 報告 (1) 平成27年度全学FD委員会活動状況について (2) 平成27年度全学FD委員会予算の執行状況について (3) 平成28年度新任教員研修プログラムについて (4) 平成28年度新任教員研修（学外）について (5) 改革アクションプラン2016について (6) 平成27年度FD活動報告書について (7) その他 2. 議題 (1) 平成28年度全学FD委員会活動について (2) 平成28年度全学FD小委員会について (3) 平成28年度全学FD委員会の開催予定について (4) 平成28年度授業アンケートについて (5) その他
（第2回） 平成28年5月24日（火） 15：30～16：50	1. 報告 (1) 平成27年度FD活動報告書について (2) 新任教員研修（学外）について (3) 平成28年度授業アンケート 前期前半終了実施希望科目について (4) その他 2. 議題 (1) 平成28年度全学FD委員会活動について (2) 平成28年度全学FD委員会小委員会活動について (3) 平成28年度授業アンケート実施要領（案）について (4) 平成28年度後期学生FDスタッフ募集要項（案）について (5) その他
（第3回） 平成28年6月28日（火） 15：30～17：00	1. 報告 (1) 新任教員研修（学外）参加者について (2) 前期科目における学生FDスタッフの活用について (3) 学部でのFD活動について (4) その他 2. 議題 (1) 平成28年度FD研修会について (2) 平成28年度e-learning システム活用に向けての講習会開催について (3) 平成28年度学生FDスタッフ募集要項（案）について (4) 平成28年度FD小委員会について (5) その他
（第4回） 平成28年7月26日（火） 15：30～17：05	1. 報告 (1) 前期学生FDスタッフ成果報告書について (2) 平成27年度後期授業アンケートへの意見書について (3) 全学でのFD研修会実施時期について (4) その他 2. 議題 (1) 授業アンケート リフレクションペーパーの依頼について (2) 平成28年度FD活動予算について (3) 小委員会 活動検討について (4) その他 ・平成28年度後期授業アンケートについて

(第5回) 平成28年9月27日(火) 15:30～17:05	1. 報告 (1) 平成28年度FD研修会実施状況について (2) 平成28年度前期授業アンケート実施状況について (3) その他 2. 議題 (1) 平成28年度後期授業アンケートスケジュール・実施要領について (2) 平成28年度後期学生FDスタッフ申請について (3) 平成28年度『シラバス』作成に関する件 (4) 平成29年度予算に関する件 (5) その他
(第6回) 平成28年10月25日(火) 15:30～16:35	1. 報告 (1) 平成28年度後期授業アンケートについて (2) その他 2. 議題 (1) 平成29年度シラバス作成に関する件 (2) その他 ・授業アンケートのWeb化について
(第7回) 平成28年11月29日(火) 15:30～15:55	1. 報告 (1) 平成28年度後期授業アンケート科目について (2) その他 2. 議題 (1) 平成28年度教育・学修環境及び学生の学修時間等に関するアンケート調査に関する件 (2) 平成28年度「今年度の振り返りと来年度の目標アンケート」に関する件 (3) 小委員会活動について (4) その他
(第8回) 平成29年1月24日(火) 15:30～16:55	1. 報告 (1) 平成28年度全学FD委員会予算執行状況について (2) 平成29年度新任教員研修プログラムについて (3) その他 2. 議題 (1) 平成28年度FD委員会活動報告書に関する件 (2) 平成28年度授業アンケートリフレクションに関する件 (3) 平成28年度FD小委員会活動に関する件 (4) その他
(第9回) 平成29年2月28日(火) 15:30～16:00	1. 報告 (1) 大学院FD委員会授業アンケート実施状況について (2) 平成28年度後期授業アンケート実施状況について (3) 平成28年度 今年度の振り返り & 来年度の目標について (4) FDスタッフ活動報告書について (5) その他 2. 議題 (1) 平成29年度授業アンケート設問内容に関する件 (2) 平成29年度学生FDスタッフの募集について (3) 平成29年度FD委員会への引き継ぎ事項整理について (4) その他
(第10回) 平成29年3月17日(金) 15:30～15:50	1. 報告 (1) 「今年度の振り返り」と「来年度の目標」のアンケート結果について (2) その他 2. 議題 (1) 平成29年度前期授業アンケート実施について (2) 平成29年度新任教員研修(学外)について (3) その他

② 平成28年度 全学FD活動報告

1. 授業アンケート

- ・実施時期：【前期】平成28年7月18日（月）～22日（金） ※前2週間は予備期間
【後期】平成29年1月6日（金）～24日（火） ※前2週間は予備期間
- ・授業アンケート対象科目
科目選定：卒業研究、集中講義及び受講者数が10名未満の科目を除くすべての後期開講科目の中から1
教員につき2科目を選択

授業アンケート実施率（前・後期合計）

学 部	対 象 科目数	実 施 科目数	実施率	未実施 科目数
生 活 科 学 部	187	183	97.9%	4
国際コミュニケーション学部	223	215	96.4%	8
人 間 関 係 学 部	200	196	98.0%	4
文 化 情 報 学 部	178	171	96.1%	7
現 代 マ ネ ジ メ ン ト 学 部	130	122	93.8%	8
教 育 学 部	178	173	97.2%	5
看 護 学 部	72	70	97.2%	2
計	1,168	1,130	96.7%	38

◎リフレクション提出 913科目/1,130科目（80.8%）

2. 研修会

①FD研修（ハラスメント研修と同時開催）

- ・日時：平成28年9月15日（木）10：30～12：00
13：30～15：00
- ・場所：文化情報学部 メディア棟001教室
- ・テーマ：「ICT活用教育の理論と実践」
- ・講師：向 直人氏（相山女学園大学文化情報学部 准教授）
永田義彦氏（相山女学園大学附属小学校 教諭）
- ・参加者数：152名

②Glexa講習会

- ・日時：平成28年9月15日（木）15：30～17：00
- ・場所：文化情報学部メディア棟124室・125室
- ・テーマ：Glexaの活用のための実技講習
- ・講師：Version2（開発業者）講師
- ・参加者数：20名

③科研費取得のための研修会

- ・日時：平成28年9月20日（火）13：30～14：30
- ・場所：国際コミュニケーション学部棟206講義室
- ・テーマ：「採択されるための科研費申請書」

- ・ 講師：児島 将康氏（久留米大学分子生命科学研究所 教授）
- ・ 参加者数：50名

④教職員勉強会（FD・SD研修）

- ・ 日時：平成29年3月14日（火）10：00～11：30
- ・ 場所：国際コミュニケーション学部棟206講義室
日進キャンパス5号棟205講義室（双方向システムで中継）
- ・ テーマ：「本学の現状と課題―これまでの改革の総括及びIRレポートの結果を中心に―」
- ・ 講師：米田公則学長補佐
竹田浩康企画広報部長（大学IR室室長補佐）
- ・ 参加者数：80名

3. 学修時間アンケート

S*mapのアンケート機能を使い、「学修時間アンケート」を次の通り実施した。

【アンケート本文】

みなさんの1/16（月）から1/22（日）の学修時間について伺います。

この1週間、大学での授業時間以外で「準備学習（予習）」「課題・復習」「授業以外に関心がある学習（資格取得・就職準備等）」について、それぞれの勉強した時間数を教えてください。

勉強の場所は、自宅、図書館、自習室、電車の中、などどこでも構いません。

次の項目にそれぞれ実績を回答してください。

（このアンケートは皆さんの学修スタイルを把握し、本学がより価値の高い授業を提供するために行います。個人が特定されることはありません。）

以下結果を掲載

学修時間等に関するアンケート

みなさんの1/16（月）から1/22（日）の学修時間について伺います。

この1週間、大学での授業時間以外で「準備学習（予習）」「課題・復習」「授業以外で関心がある学習（資格取得・就職準備等）」について、それぞれの勉強した時間数を教えてください。

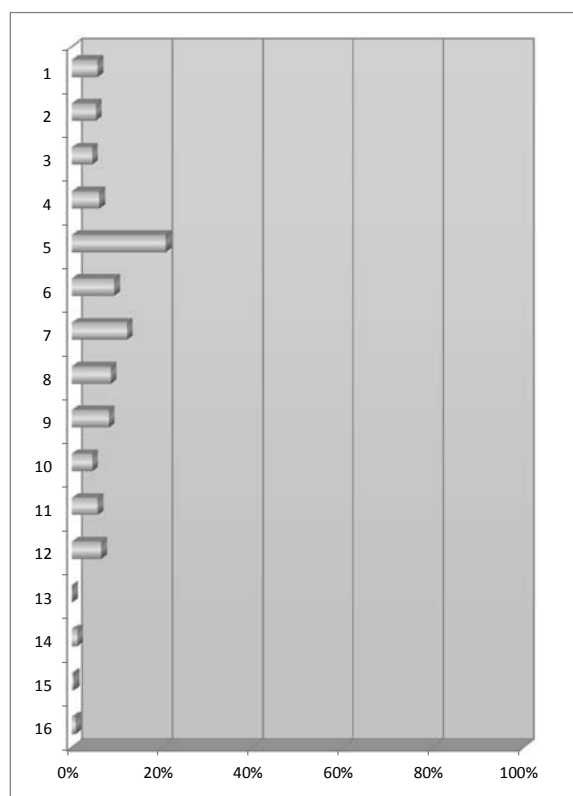
勉強の場所は、自宅、図書館、自習室、電車の中、などどこでも構いません。

次の項目にそれぞれ実績を回答してください。

（このアンケートは皆さんの学修スタイルを把握し、本学がより価値の高い授業を提供するために行います。個人が特定されることはありません。）

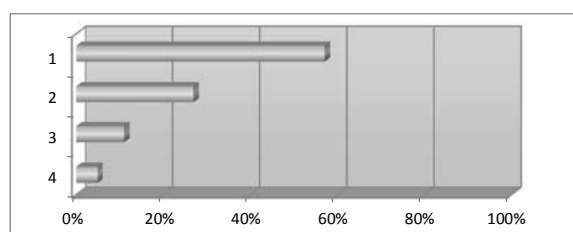
1 所属学科（専修・研究科）を選んでください。（必須）

No	回答	回答数	
1	管理栄養学科	14	5.7%
2	生活環境デザイン学科	13	5.3%
3	国際言語コミュニケーション学科	11	
4	表現文化学科	15	4.5%
5	人間関係学科	51	6.1%
6	心理学科	23	20.8%
7	文化情報学科	30	9.4%
8	メディア情報学科	21	12.2%
9	現代マネジメント学科	20	8.6%
10	保育・初等教育専修	11	8.2%
11	初等中等教育専修	14	4.5%
12	看護学科	16	5.7%
13	生活科学研究科	0	6.5%
14	人間関係学研究科	3	0.0%
15	現代マネジメント研究科	1	1.2%
16	教育学研究科	2	0.4%
有効回答数：		245	0.8%



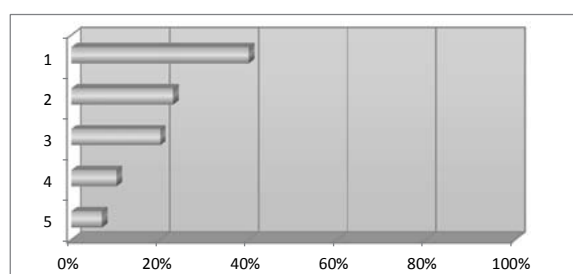
2 学年を選んでください。（必須）

No	回答	回答数	
1	1 年	140	57.1%
2	2 年	66	26.9%
3	3 年	27	11.0%
4	4 年	12	4.9%
有効回答数：		245	



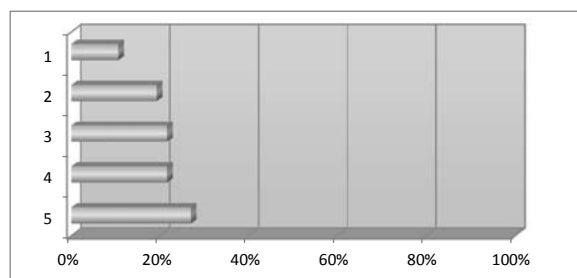
3 あなたは、1/16（月）から1/20（金）の5日間、「準備学習（予習）」で一日あたり平均何時間勉強しましたか。（必須）

No	回答	回答数	
1	0分	98	40.0%
2	30分程度	56	22.9%
3	1時間程度	49	20.0%
4	2時間程度	25	10.2%
5	3時間程度またはそれ以上	17	6.9%
有効回答数：		245	



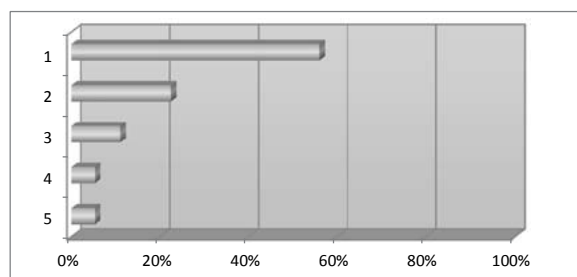
4 あなたは、1/16（月）から1/20（金）の5日間、「課題・復習」で一日あたり平均何時間勉強しましたか。（必須）

No	回答	回答数	
1	0分	26	10.6%
2	30分程度	47	19.2%
3	1時間程度	53	21.6%
4	2時間程度	53	21.6%
5	3時間程度またはそれ以上	66	26.9%
		有効回答数：	245



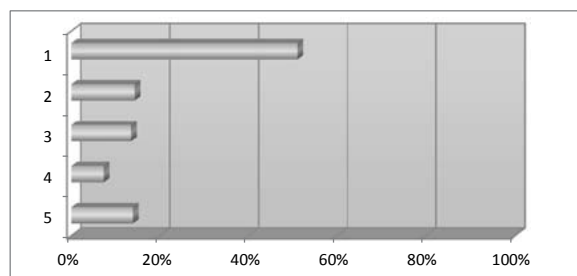
5 あなたは、1/16（月）から1/20（金）の5日間、「授業以外で関心がある勉強（資格取得、就職準備等）」で一日あたり平均何時間勉強しましたか。（必須）

No	回答	回答数	
1	0分	137	55.9%
2	30分程度	55	22.4%
3	1時間程度	27	11.0%
4	2時間程度	13	5.3%
5	3時間程度またはそれ以上	13	5.3%
		有効回答数：	245



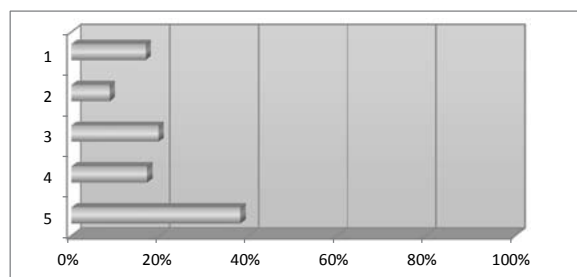
6 あなたは、1/21（土）、1/22（日）の二日間、「準備学習（予習）」で一日あたり平均何時間勉強しましたか。（必須）

No	回答	回答数	
1	0分	125	51.0%
2	30分程度	35	14.3%
3	1時間程度	33	13.5%
4	2時間程度	18	7.3%
5	3時間程度またはそれ以上	34	13.9%
		有効回答数：	245



7 あなたは、1/21（土）、1/22（日）の二日間、「課題・復習」で一日あたり平均何時間勉強しましたか。（必須）

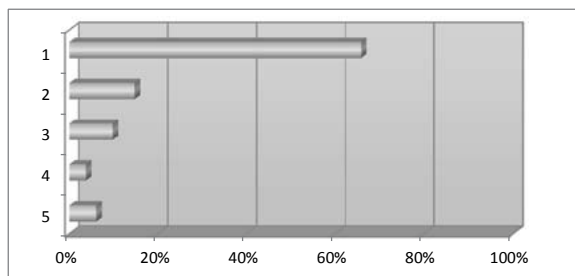
No	回答	回答数	
1	0分	41	16.7%
2	30分程度	21	8.6%
3	1時間程度	48	19.6%
4	2時間程度	42	17.1%
5	3時間程度またはそれ以上	93	38.0%
		有効回答数：	245



8 あなたは、1/21（土）、1/22（日）の二日間、「授業以外で関心がある勉強（資格取得、就職準備等）」で一日あたり平均何時間勉強しましたか。（必須）

No	回答	回答数
1	0分	161
2	30分程度	36
3	1時間程度	24
4	2時間程度	9
5	3時間程度またはそれ以上	15
有効回答数：		245

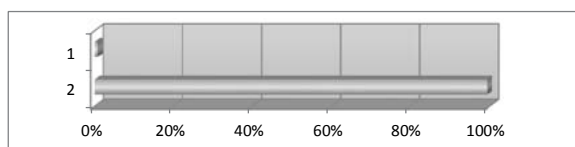
65.7%
14.7%
9.8%
3.7%
6.1%



9 あなたの学習時間に関して、思っていることを自由に記入してください。（大変と感じていること、やりたいこと、等）

No	回答	回答数
1	回答あり	39
2	回答なし	5834
回答対象者数：		5873

0.7%
99.3%



設 問 文

あなたの学修時間に関して、思っていることを自由に書いてください。(例：大変と感じていること、やりたいこと、工夫 等)

学 科	学年	回 答
子ども発達学科	1年	どう勉強したら適当なのかが分からない。勉強の仕方が分からない。
メディア情報学科	1年	まとまった時間がなかなか作れないので、ちょっとずつやるしかないのが大変。
生活環境デザイン学科	2年	やりたいことが多すぎる
看護学科	1年	やる気が出ないことが多い やらなくてはいけないと思ってはいるができない
心理学科	2年	スケジュールがすでに決まっている状態で、いきなり中間課題などがあった場合、自らの組んだ予定とはいえ無理に(深夜まで起きたりいつもより早い時間に起きたりすることで)課題を終わらせ、体調を崩すことやあるいは他の授業に出れない、遅刻するなど影響があることが多い。授業ごとにいつごろどの程度の学習時間を定めればいいのかかわかるくらいの、たとえばシラバスや先生からのお言葉があればより学習計画が立てやすい。
人間関係学科	1年	ダンス
看護学科	1年	テスト前に問題出すのが遅すぎるし授業も一週間前になっても終わらないという事実について真剣に考えてほしい。学生側のテスト準備や勉強時間、もはや意欲までも失われる。
心理学科	1年	レポート
心理学科	1年	レポートの作成が大変だった。
心理学科	1年	レポートの書き方にまだ慣れない。
人間関係学科	2年	一気に同じ時期、タイミングでテスト範囲やレポートの内容を知るの、時間が無い。 時間が無いどうしても考える時間も減ってきて質の良いもの、成績が取れないので大変。
人間関係学科	1年	予習を毎回しないでテストの前に全部やっています。これだと単位はとれても頭の中に入っていない気がして不安です。
子ども発達学科	4年	卒業研究等により、学習時間があまりとれなかったため、学生最後の春休みは、社会人に備えての勉強をしっかりとやりたいと感じました。
心理学科	4年	学習したいと思う授業がない。
子ども発達学科	2年	実技の練習時間がなかなか取れなくて大変だと感じている。基礎ピアノの授業で練習室が使われているため、自分の授業前に練習する時間もとりづらい。早く教員採用試験対策がしたい。
人間関係学科	2年	家事が忙しく、通学も時間がかかるので家で勉強は難しい。
文化情報学科	3年	平日はあまりできないので週末に予習復習をするようにしている。もっと平日でもやりたい。
表現文化学科	3年	平日は大学で土日はバイト(授業料を稼ぐため)なので時間が足りない。1月中に提出するレポートやテストが沢山あり非常に大変。課題のために授業後に大学に残ってやるしか勉強時間が確保できないため大変と感じている。取りたい資格や趣味もあるが、なにより時間がないのがつらい。
国際言語コミュニケーション学科	1年	授業の課題や準備(特にプロジェクト)が多くて、それだけに時間が費やされてしまった。バランスよく勉強をしたい。

学 科	学年	回 答
生活環境デザイン学科	1年	授業はとても楽しく充実したものが多いが、課題が多い時期が重なったり、様々な教科で課題が継続してだされることもあり大変だった。そのため、普段の生活の中で自分の興味ある分野を深めたり広げたりすることは難しかった。1/16から1/22はほとんどの課題も終わり、講演会に出向くなどの時間も持つことができた。そのため非常に有意義な時間をすごすことができたと感じられた。課題が多いことで、計画性やオン・オフの切り替えなどが身につくので決して悪いことではないが、大学生なので将来のために自ら考えて、よいと思ったことに取り組んでいく時間も大切だと思う。そのような時間が作られるよう課題提出のタイミングや量がすべての教科で打ち合わせされているとなお良いと思う。
人間関係学研究科	2年	日進図書館は、勉強しやすいです。
文化情報学科	1年	昼間より夜中に中心的に勉強をするが、朝早く起きてても眠さで二度寝してしまい時間が有効活用できていないので、朝型に変えてしっかり勉学に励めるよう努力したいと思う。
現代マネジメント学科	1年	時間が長ければ長いほど成績につながるというわけではない
管理栄養学科	3年	時間割によって課題が大変なときとそうでないときの差が大きい
国際言語コミュニケーション学科	3年	毎日少しずつ大学でも自宅でも勉強することが大切であると思います。
文化情報学科	2年	毎日親の仕事の手伝いかバイトのどちらかをしているので時間に追われています。テスト前は唯一家の手伝いとバイトを勉強を理由に控えて時間をもらっているので時間のある時に勉強をして知識を詰め込んでいます。普段は授業中に「ここを復習しよう」と思っても仕事が終わってからだと夜中なのでなかなか思うように取り組めません。しかしどちらも怠ることは出来ない所以日々授業が回数を重ねるごとに焦ってしまいます。今回のテストでは常に焦りを感じていたので、次からは日頃から予定を立てそれを実行しやりたいことにもチャレンジしていこうと思います。
現代マネジメント学科	2年	簿記やFPの資格を取得するために、春休みから勉強したいと思います。
生活環境デザイン学科	2年	製作・設計課題との両立が難しい。講評会がある週には講義の復習ができない時もしばしばあり、講義を受けてもらえる単位の方が実習を受けてもらえる単位よりも多い事がたまに疑問に思う。
管理栄養学科	2年	試験が迫っているので試験勉強に費やしているが、国家試験や一般教養、英語の勉強をしたいと思っている。でも普段は学校やアルバイトで忙しく、手をつけられない。
人間関係学科	1年	語学をみにつけたいので、登下校の時間に単語をやったり文法をやったりしている。ハングルと英語をマスターしたい。
メディア情報学科	2年	課題が後半になって多い。量を減らしてほしい。資格取得しやすいようITパス、情報処理技術者のような無料講義の開講を増やしてほしい。
人間関係学科	1年	課題が成績の点になるのなら科目ごとにずらしてほしい。ない時には自分のために使える時間がありすぎる気がする。本当はもう少し取り組みたいけど単位のための科目はどこかでいいやと思わないとすべてに取り組めない。
表現文化学科	1年	資格にあてる勉強の時間の取り方を、工夫したいと思った。

学 科	学年	回 答
メディア情報学科	1年	資格の勉強をもう少ししたいと思う。
現代マネジメント学科	1年	資格勉強に力を入れたいと考えている。大学生になり、レポートが沢山あるけど、いまいち正しい書き方がわからない。
人間関係学科	1年	関係ないことなのですが、人間関係学部の2-402の電気が切れそうでピカピカしてます。
子ども発達学科	2年	集中力が短いため、こまめに休憩をとるようにしている。
子ども発達学科	4年	集中力が続かないため、学習時間を長くは確保できない。

Ⅱ. 2 小委員会活動報告

2-1 授業アンケート・シラバス調査等小委員会

平成27年度 学習時間アンケート集計結果の検討

WG① 石井 圭介（現代マネジメント学部）
堀田あけみ（国際コミュニケーション学部）
谷口 俊治（文化情報学部）
杉浦美佐子（看護学部）

1. アンケートの概要

在学生を対象とし、学生の学修スタイルを把握し、大学がより価値の高い授業を提供するために実施するものであり、平成28年1月16日（土）より18日（月）までの3日間、授業以外での「準備学習」、「課題、復習」、「授業に関するその他の学習」、「授業以外に関心がある勉強」について、何時間勉強したのかを問う。有効回答数は185名分であった。

2. アンケート結果

下表は、平成28年11月29日に本委員会で配布された「平成27年度 学修時間アンケート集計結果」を基に一覧にまとめたものである。

	回答	1月16日（土）				1月17日（日）				1月18日（月）				3日計	%
		①	②	③	④	①	②	③	④	①	②	③	④		
1	0分	112	55	114	114	118	61	123	127	113	60	115	117	1,229	55.4
2	15分前後	13	3	16	14	17	12	12	15	22	11	19	15	169	7.6
3	30分前後	23	25	16	19	15	17	12	12	17	16	13	14	199	9.0
4	45分前後	3	5	6	1	5	6	6	2	4	5	3	2	48	2.2
5	60分前後	18	24	10	18	20	23	9	13	19	32	14	18	218	9.8
6	90分前後	3	6	2	5	2	5	2	3	2	12	2	6	50	2.3
7	120分前後	5	24	4	4	1	16	5	4	2	19	6	4	95	4.3
8	150分前後	0	5	4	1	2	5	2	1	0	3	2	2	27	1.2
9	180分前後	3	15	4	2	1	12	2	3	0	13	1	1	57	2.6
10	210分前後～	5	23	9	7	4	28	12	5	5	14	10	6	128	5.5

※①準備学習、②課題、復習、③授業に関するその他の学習、④授業以外に関心がある勉強

ある程度予想された結果ではあるが、後期の定期試験開始のわずか1週間前にもかかわらず、3日間の学修時間がゼロの学生が過半数を超えている。平均1時間程度以上学修している学生であっても2割にも満たない。同時にアルバイトに従事した時間を問うてみたならば、おそらく数時間以上にはなることであろう。コメント欄にも「バイトとの両立が難しい」、「バイトが忙しい」なども散見される。やる気がないことを記載している学生も多い。

もはや個々人の教員や学部での検討範囲を超えており、ここで述べるまでもなく重要な課題であることから早々にも全学的な取組み、対応が求められる。

以 上

授業アンケート調査票の設問項目の因子分析

FD 委員 谷口俊治

1. 目的

授業アンケートの項目の評価要因を抽出し、授業評価に有用な項目を選定することを目的とする。

2. 方法

分析対象は、2015（平成27）年度後期の全学部の授業アンケートの結果で、総データ数は25,639件である。因子分析を行い、評価を規定する背景要因を抽出する。

3. 結果

表1に設問項目1～16の基礎統計を示す。項目「17 この授業を受けてあなたが獲得あるいは向上したと思う項目を選択してください。」は、名義尺度のため除外した。 $M-SD$ が1.0を下回る項目がありフロア効果が見られるが、許容の範囲とみなしてすべての項目を当初の分析対象とした。なお、 $M+SD$ が4.0を超えるシーリング効果を示す項目はない。

表1 設問項目の基礎統計

設問項目	M	SD	n	$M-SD$	$M+SD$
1 受講にあたって、この科目のシラバスを読んだ。	1.76	0.790	17,949	0.969	2.549
2 この科目を履修登録する上で、シラバスの内容は役立った。	1.92	0.774	17,949	1.151	2.698
3 このシラバスの主な内容を覚えている。あるいは、毎回・時々シラバスの内容を確認し受講している。	2.64	0.923	17,949	1.720	3.566
4 この授業は概ねシラバスの内容に沿った授業が行われた。	1.86	0.652	17,949	1.207	2.510
5 シラバスに書かれている到達目標が達成されるような授業が行われた。	1.81	0.645	17,949	1.164	2.454
6 この授業は理解しやすかった。	1.75	0.757	17,949	0.989	2.503
7 この授業の進度は適切であった。	1.64	0.677	17,949	0.960	2.314
8 教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた。	1.68	0.725	17,949	0.957	2.406
9 板書や資料（配布資料。映像など）の提示方法は適切であった。	1.66	0.717	17,949	0.946	2.379
10 教員の話し方（声の大きさ・話す速さ・マイクの使い方など）は適切であった。	1.55	0.672	17,949	0.883	2.226
11 私語など、不真面目な学生に対する教員の対応は適切であった。	1.67	0.694	17,949	0.977	2.366
12 授業の開始時刻や終了時刻は適切であった。	1.53	0.646	17,949	0.887	2.180
13 予習や復習など、自主的な学習を行った。	2.43	0.950	17,949	1.480	3.380
14 あなたから見て受講者は真面目に参加していた。	1.82	0.748	17,949	1.068	2.564
15 この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。	1.73	0.708	17,949	1.021	2.436
16 総合的にみて、この授業は充実していた。	1.64	0.686	17,949	0.956	2.328

はじめに、設問項目1～16の相関係数を求め、項目間の相関係数が0.7以上あるものについて、平均値がより回答選択肢の中心値（2.5）に近い項目を残し、小さい項目を因子分析の対象から除外した。

「1 受講にあたって、この科目のシラバスを読んだ。」と「2 この科目を履修登録する上で、シラバスの内

容は役立った。」間の相関係数は $r = .720$ であり、項目1を除外した。

「4 この授業は概ねシラバスの内容に沿った授業が行われた。」と「5 シラバスに書かれている到達目標が達成されるような授業が行われた。」間の相関係数は $r = .775$ であり、項目5を除外した。

「6 この授業は理解しやすかった。」と「7 この授業の進度は適切であった。」間の相関係数は $r = .732$ 、上記項目7と「8 教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた。」間の相関係数は $r = .719$ 、上記項目6と8の相関係数は $r = .764$ 、上記項目8と「9 板書や資料（配布資料。映像など）の提示方法は適切であった。」の相関係数は $r = .721$ であり、項目7と8を除外した。

「16 総合的にみて、この授業は充実していた。」は、項目6、8及び「15 この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。」との間の相関係数がそれぞれ $r = .712$ 、 $r = .706$ 、 $r = .756$ であり、項目16を除外した。

最終的に11項目で主成分分析を行い、バリマックス法によって直交回転を行った。その結果2因子解が導出された（表2）。

表2 設問項目の因子分析結果

設問項目	因子	
	1	2
10 教員の話し方（声の大きさ・話す速さ・マイクの使い方など）は適切であった。	0.814	0.141
9 板書や資料（配布資料。映像など）の提示方法は適切であった。	0.774	0.227
6 この授業は理解しやすかった。	0.737	0.305
11 私語など、不真面目な字生に対する教員の対応は適切であった。	0.731	0.165
12 授業の開始時刻や終了時刻は適切であった。	0.717	0.082
15 この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。	0.680	0.356
14 あなたから見て受講者は真面目に参加していた。	0.643	0.291
3 このシラバスの主な内容を覚えている。あるいは、毎回・時々シラバスの内容を確認し受講している。	0.013	0.853
2 この科目を履修登録する上で、シラバスの内容は役立った。	0.229	0.737
4 この授業は概ねシラバスの内容に沿った授業が行われた。	0.339	0.685
13 予習や復習など、自主的な学習を行った。	0.257	0.553

第1因子は、主として授業方法の適切性に関する評価であり、第2因子は、授業内容の適切性に関する評価だと考えられる。

4. 結論

授業アンケートの目的が、①授業方法の適切性、および、②授業内容の適切性の測定であるならば、それらに対応する設問項目を2～3用いることで十分である。

以上

2-2 授業改善小委員会

授業改善小委員会（Working Group②）報告 2016年度

授業改善小委員会 委員長 石井雅治

2016年度全学FD委員会は、2016年6月28日（火）、委員会内に授業改善小委員会（以下、WG②という）を設置した。構成委員は、石井雅治（現代マネジメント学部）、梶本雅好（生活科学部）、田村雅夫（人間関係学部）、朴信永（教育学部）の4名である。

第1回WG②は、2016年7月26日（火）学園センター4F第一会議室で開催され、互選によって石井雅治が小委員会委員長に選任された。また、業務内容が確認され、業務の各部の担当者が定められ、各担当者が次回までに担当部分を検討してくることとされた。

WG②に対し全学FD委員会より委託された業務は、授業改善に関し2015年度から継続する次の2つの「達成ビジョン」の検討である。

1. 授業改善のための授業参観及び先進的授業方法の情報共有。
2. 授業アンケートの実施。

具体的に事項1では次の①～③を、事項2では次の④を対象とするよう委託された。

- ① 先進的授業方法の情報共有の手段について検討する。
- ② 授業評価結果を開示し、授業改善に活用する。（ベストティーチャーによる授業公開等）
- ③ 成績評価（GPA）、ルーブリック評価の活用方法等について検討する。
- ④ リフレクションペーパーによる自己点検方法について検討する。リフレクションペーパーの内容検討、提出率向上策について検討する。

WG②はそれぞれについて担当者を決定した。

第2回WG②は、2016年9月27日（火）学園センター4F第一会議室で開催され、各担当者が検討してきた①～④の事項につき、委員間で協議した。より具体的な案を作成し10月18日までに委員全員にeメールで送信し、次回までに検討しておくこととした。

第3回WG②（2016年10月25日（火）学園センター4F第一会議室）および第4回WG②（2016年11月29日（火）学園センター4F第一会議室）においても、第2回と同様な作業が行なわれた。

以上によって、WG②は、提言を含む形で①～④の報告書をまとめた。これを2017年1月17日（火）までに全学FD委員会に提出し、業務を完了した。以下、①～④の順にこの報告書を掲載する。

①先進的授業方法の共有手段

現代マネジメント学部 石井雅治

1. 先進的授業方法とは

授業が先進的方法を取っているか否かには、難しい価値判断が含まれる。内容によって定義することは容易ではない。しかしその形式によって、一般的な授業方法から、先進的授業方法を含む授業方法を区別することができる。共有手段は技術的な課題であるから、内容の先進性については明確化を避けつつ、この手段を検討することには有効性があると考えられる。

このような先進的とされる授業方法の事例として次のようなものが挙げられる。

- A. グループで学生の自主性を活用するもの
- B. 特殊な一方向性表現機材を使うもの
- C. 特殊な双方向機材を使うもの
- D. 機材そのものに学習進展能力を持たせるもの
- E. その他

これらについて、共有手段において基本となるものと、特殊な機材を使うものに分けて以下検討する。

2. 共有の基本

第一の基本的な点として、いずれの方法であれ、共有しようとする教員がその授業を、その準備段階から体験することである。従って準備の一部をも含んだ体験機会を多く設ける手段、例えば、参加を模擬する支援スタッフや施設を置くことが有効である。特に先進的とされる授業は、その科目内容の特殊性を活かして、実施手順が大きく異なることが多いので、多数の科目についての体験機会が必要である。

このような体験機会を補う手段として、ビデオや文書等による記録のアーカイブが有効であろう。準備の段階から整理され開示され様々な条件で検索可能なアーカイブが構築されれば、授業の特殊性を加味した比較検討も容易となり、共有、活用が実質化されるであろう。

第二の基本的な点として、新しい方法による学習の効果を、従来の方法と比べて数値的に示すという手段が、共有しようという意欲を高めるために有効である。客観的効果がなければ、手間をかけてその方法を取り入れる動機が、教員の側に存在しないからである。特に、これからこのような評価は学生の満足度ではなく、学生の能力の増大の客観的評価であることが望ましい。先進的といわれる授業は、ときに学生の主観的満足度の増大のみを目的としているようにみうけられる。それと学習の効果の相関は高くないという報告も少なくないことに注意しなければならない。加えて、異なる方法同士の有効性の比較も可能になる。

これら二つの基本的点が共有を成功させる本質的部分であるにもかかわらず、これまであまり議論されてこなかったように思われるので、強調しておきたい。

3. 特殊な機材（コンピュータソフトを含む）を使うもの

機材が一般でないでない場合、その利用法の習得、効果の知識が重要となる。講習会等が必要であるが、それ以上に授業準備を支援する、幅広い知識を持った技術スタッフや機材の拡充が必要な手段となる。これがないと実質的には共有は不可能であろう。

しかしながら機材の種類は無数にあり、その技術を共有化することは極めて難しい。実際には幅広い知識を持つように技術スタッフを養成することも困難である。アーカイブ化も容易ではない。

4. 文書化の問題

先進的とされる授業方法の文書化も、無意味ではないにせよ、そのみでは手間の割に有効性は大きくない。上記2の補完手段としての役割しか果たさないからである。既に様々な報告書やテキストが出ているが、

いずれも上記2の基本的な2点がいずれも不十分であるため、実際には普及が進んでいないのではないかと考えられる。

5. 提言

以上の検討の結果、先進的とされる授業方法の共有手段として、予算等のコストと有効性を鑑みて、以下を提言したい。

1. 新しい授業方法による学習の効果を、従来の方法と比べて数値的に示すこと。
2. 上で効果の高い授業方法について、準備段階から一連の段階全体に別の教員が関与できるような形態での研修を行ない、また必要最低限の文書化やアーカイブ化を行なう。
3. 特殊な機材（ソフト）を使う授業方法についても、機材やソフトが広い汎用性を持つもののみに制限した上で、上で効果の高い授業方法について、共有のためのハードウェア環境や技術支援体勢を整える。

以上。

②授業アンケート結果を開示し、授業改善に活用する（ベストティチャーによる授業公開等）について

生活科学部 橋本雅好

- 1) 授業アンケート結果の集計結果を開示するだけでなく、設問別で「その通りである」の数値が高かった授業を類型化するなどして、設問ごとに参考にできるような工夫をする。
- 2) 教員が改善したいポイントと設問との関連性を精査して、アンケート設問を再構築する。
- 3) ベストティチャーを選定するだけでなく、ベストティチャーによる授業の工夫点やポイントなどをA4版1枚程度のリーフレットにして、配布する。リーフレットはできるだけ視覚的情報（パワーポイント・配付資料など）を入れて、参考にできるよう工夫する。
- 4) FD 講習会で、ベストティチャーによる講義のポイント解説を取り入れる。

③成績評価（GPA）・ルーブリック評価の活用方策等について

教育学部 朴信永

○GPA（Grade Point Average、成績平均点数）とは、各科目の成績評価と単位数から成績点数GP（Grade Point）を換算し、その成績点数の合計を総履修単位数で割った数値。最高は5.0、最低は0.0である。

・他大学のGPA活用例

- 成績評価が決定した時点で、当該セメスターのGPAが2.00未満の場合は、学生本人に通知し、担当教員による面談（学業指導）を行う。
- GPAが2期連続して2.00未満の場合、学生本人と保護者に通知し、学生本人が担当教員との面談（希望する保護者は面談可能）を行う。
- GPAが3期連続または累計で4期2.00未満の場合は、学生本人と保護者に通知し、学生本人が学部長

との面談（希望する保護者は面談可能）の上、退学勧告とする。（連絡がとれない場合や面談に応じない場合も退学勧告）

・本学では

-通算GPAが1.5以下または当該半期のGPAが1.0以下の学生リストを指導対象学生とし、退学勧告を含めた履修指導・進路指導などを行う。4年生で卒業に問題はないものの履修登録単位が少ないために抽出されてしまった学生に関しては、履修状況・成績状況などを確認して卒業に問題がなければ指導は必要ないことにしている。なお、指導スケジュールは学部判断で行うことになっている。現在、指導状況を報告する様式を検討中である。

しかし、GPAを退学勧告の基準とするのはあまり現実的ではなく、あくまでも一つの参考資料として扱うのが望ましい。細川（2012）によれば、全学における同一科目（例えば、初年次ゼミ）の成績評価のばらつきはGPA導入以前の問題であり、クラスサイズ（受講者数）とクラスGPAの間に強い関連性はみられなかった。必修科目が多く、科目選択肢がほとんどない学部では、GPA導入に伴う各種制度がほとんど意味を成さない。学部や教員、科目の種類によって授業の難易度が違うことを考えると、GPAをもとに教育組織の見直しを図り、同目的の科目群の教員間の情報共有によって教育的評価の重要性を再確認し、各教員の授業改善に役立てていくことが望ましい。

○ルーブリック（Rubric）とは

ある課題についての達成レベルを観点と尺度からなるマトリクス表で評価したもの。ある課題について達成目的（できるようになってもらいたいこと）を設定し、その達成のレベルを段階的に分けた表である。様々な観点から学習者を評価できるため、従来の評価方法では難しいようなパフォーマンス課題も評価することができ、テストに頼らない総合的能力の評価が可能である。また、学生にルーブリック表を事前提示することで目的が明確になり、ルーブリック表を活用することで講師からの迅速なフィードバックが可能になる等の有効性がある。

・ルーブリック評価のメリット

- 「何が評価されるのか」についての情報を講師と受講生で共有することができる。
- 講師、受講生ともに、達成すべきレベル（水準）が明確になり、受講生の現在のレベルや改善点がわかりやすくなる。迅速なフィードバック、詳細でわかりやすいフィードバックが可能である。
- 評価の見える化（評価の公平性）、過去のルーブリックで成長を把握することができる。
- コミュニケーションツールとして：受講生の学習状態を講師や関係者間で共有することができる。複数の講師で授業を行う場合の評価のブレを無くし、講師同士で指導方法を共有することができる。
- 批評的思考力のトレーニング：受講者はルーブリックを長期的に見ることで、躓きやすい部分や伸びている部分を自覚することができる。
- 学習者の優れた個性を見出す：詳細なルーブリック評価を継続して見ることで、学習者自身も気づかなかった能力が見えてくることがある。外部に自分の能力をアピールする際にわかりやすい根拠として活用することもできる。
- 受講生からの意見の反映：講師が見落としていた「評価されるべき項目」に受講生が気づく場合がある。ルーブリック評価では評価されている項目が明確なので、受講生が「足りない」と感じた項目を指摘することが可能。これらの意見をルーブリック表に反映していくことでより良い評価へとつなげていく。

・本学で導入・活用する前に整備すべき課題

ルーブリック評価基準の作成には多くの時間と労力を要し、沖(2016)が指摘するように、各教員自らの科目の採点に適したルーブリックに落ち着くまでは最低3年間の微調整が必要である。また、受講者の成長を長期的な視野で見ることができるのがルーブリックの長所であるので、様々な科目の膨大なデータを長期保存し、受講生および関係教職員が登録、編集、共有、閲覧可能にするシステムや環境整

備が必要である。ルーブリックは、評価基準を明確化するにはよいが、様々な面で多様な特性をもっている現代の学生たちを総合的に評価するには困難が多く完全ではないため評価内容が単純化されてしまう恐れがあり、評価基準にとられすぎると授業内容も単調で均一化されてしまう可能性があるのでは、あくまで授業改善に役立つ道具の一つとして扱うことを明確にするなどの工夫が必要である。

【引用文献】

細川和仁（2012）大学教育の質保証からみたGPA制度秋田大学教養基礎教育研究年報,14,13-22.

ルーブリック評価のメリット <https://www.bownet.co.jp/solutions/e-learning/rubric/benefits-of%E2%88%92rubric/> (20170117)

ルーブリック評価のデメリット <https://www.bownet.co.jp/solutions/e-learning/rubric/weakness-of-rubric/> (20170117)

沖裕貴（2016）ルーブリックって何？ http://www2.chubu.ac.jp/quest/about/documents/rubric_what.pdf (20170117)

④リフレクションペーパー提出率改善に関する検討結果報告

人間関係学部 田村雅夫

A. リフレクションペーパー提出率改善案作成作業の前提について

まず、リフレクションペーパー提出率改善案の作成作業の前提となる事柄について検討する。それらについて以下、問構成の形で論点提示する。

問1 リフレクションペーパーの作成は各教員にとって職務上の義務であるという立場から考えるべきか？

Yes→教員にいかに関係を履行させるべきかという問題として考える立場

No→教員の自発的なペーパー作成を促す方途という問題として考える立場

#我々としてはNoの立場（FD活動は、本来、教員組織の自主的な教育向上運動であると考えた立場）から検討すべきであると考えた。

問2 このテーマについて教員の自主性を引き出すにはどうしたらよいのか？

イ→やらなければならないという雰囲気・状況を作ることによって

ロ→その有用性や必要性（教員個人や教員組織にとって）を理解してもらうことによって

#我々としてはまずはロの方向で努力すべきであると考えた（イはその結果として成果が出てくると自然に生じる雰囲気とここでは想定しておく）。

問3 ペーパー作成の有用性や必要性を各教員に理解してもらうための可能な方法はあるか？

#この点に関して今回検討した結論は、上記の認識を明確にした上で、授業アンケートの結果を各教員が分析する際の一般的評価基準についてのより解り易いガイド作成という提案であった。次にその概要を記す。

B. リフレクションペーパー改善案について

提案；リフレクションペーパーの作成ガイドを作る

趣旨；リフレクションペーパーを書き易くするとともに、その作成が授業改善につながるという意義を教員に示すような作成ガイドをFD委員会として提示する。具体的には下記の2ステップの作業によって作成する。

作業1；リフレクションペーパー作成のポイントを下記の問いかけから引き出す。

問 教員が授業をおこなう際に踏まえておくべき事項は何か？

作成のポイントとなる事項；

1. 大学教育の目的
→「高等教育にふさわしい知識と技術の伝達」と「主体的学びができる態度や能力の育成」が大学の授業に共通する目的である
2. 授業のカリキュラム上の位置づけ
→個別科目の授業内容は大学や学部学科のカリキュラム上の位置づけを踏まえたものとなっている必要がある
3. 個別授業の目的
→それぞれの科目特性に適合した内容を的確に受講生に伝えることが個別授業の主要な目的である
4. コミュニケーション技術
→授業内容を受講生が理解できるように工夫して授業をおこなう必要がある
5. 学生の質についての判断
→授業内容を理解する能力や学習意欲や学習期待をどの程度、受講生がもっているかを考え、それに応じた授業をおこなう必要がある
#この項目は3.の内容や4.の手法を規定する。あまりにも理解能力が低いと3.のみならず1.の目的達成も困難にする可能性が生じる。この場合、大学教育の水準をどう維持するかという困難な問題に直面する。この問題への対応は個々の教員個人の努力を超えた次元の課題であり、大学組織全体としての検討と対応が必要である。
また、受講生の学習に対する意欲や期待のあり方は、学生の授業評価を規定する。学習に対する意欲や期待が低い場合、学生の授業評価は単に楽しいかどうか、楽かどうか、簡単に単位がとれるかどうかなどの基準で評価が下される可能性がある。この点をどう考慮にいらてアンケート結果を分析するかという課題がある。

作業2；上記の事項に対応させて、下記の問いかけへの応答の形でポイント案を作成する

問 教員が学生の授業アンケート結果をどのように活用すべきか？

1. に関して
大学教育の目的を踏まえて授業をおこなったかどうか、それが具体的に授業内容や授業方法に反映されていたかどうか、受講生がそれを理解できたかどうかを授業アンケート結果から判断する
2. に関して
授業のカリキュラム上の位置づけを踏まえて授業をおこなったかどうか、それが具体的に授業内容や授業方法に反映されていたかどうか、学生がそれを理解して受講したかどうかを授業アンケート結果から判断する
3. に関して
科目の目的を明確にして授業をおこなったかどうか、授業内容がそれに照らして適切であったかどうか、学生がそれを理解して受講したかどうかを授業アンケート結果から判断する
4. に関して
科目の目的や授業内容に応じて適切な情報伝達手法やコミュニケーション手法を用いて授業をおこなったかどうか、それが期待した効果を発揮したかどうかを授業アンケート結果から判断する

5. に関して

受講生の理解能力や学習意欲や期待を想定して授業をおこなったかどうか、それらが適切な想定であったかどうか、その想定を踏まえて適切な期待水準を設定して授業をおこなったかどうかを授業アンケート結果から判断する

〈参考〉

授業設計の基本的プロセス；

授業目的の設定→受講生の理解能力や学習意欲の想定→受講生の学習成果についての期待水準の設定→授業内容の決定

C. リフレクションペーパーに関する検討の前提事項についての確認

問題構成；

1. 授業等による教育活動→2. FD 活動→3. 授業アンケート実施→4. リフレクションペーパー作成

1. 授業等による教育活動について

授業等はカリキュラムという制度的枠組みのもとで各教員がその専門的能力を根拠に主体的におこなう教育業務である

2. FD 活動について

FD 活動は本来、教育活動の質的向上を目指して教員集団が自主的におこなう教育改善運動である。

3. 授業アンケート実施について

FD 活動として行う授業アンケートは、各教員が自らの授業について改善を検討するための資料収集のためにおこなうものである。

4. リフレクションペーパー作成について

リフレクションペーパーは、アンケートに表現された受講学生の授業についての反応や評価を受けて、教員の側から教育活動の向上という観点から学生に向けておこなうメッセージの発信である

以上

Ⅱ. 3 各種研修

教員研修小委員会報告2016

全学FD委員長 後藤宗理

2016年度全学FD委員会の小委員会活動のうち、教員研修小委員会は、委員長の担当とし、委員会メンバーを指名しなかった。

1. 教員研修については、2016年9月15日に「ICT教育の理論と実践」をテーマに、文化情報学部向直人准教授にスマホアプリを利用した授業改善の具体的内容について解説していただいた。また、椋山女学園大学附属小学校永田義彦教諭に「ICT教育の実践」をテーマに、小学校教育におけるICT教育の経緯や設備の状況、そして実践を報告していただいた。
参加者は152名であった。
2. 全学FD委員会主催のGlexa講習会が1と同じ9月15日に開催され、20名の参加者があった。
3. 教員研修会の開催時期について、例年9月中旬に開催されているが、年間行事との関係で参加が難しい学部もあり、他の時期での開催を検討したが、現時点では有力な候補時期が確定できない状況にある。
4. 新任教員研修について、本年度も「公益財団法人大学セミナーハウス主催 第6回新任教員研修セミナー」への参加を募り、5名の対象者のうち2名が参加した。
5. その他の新任教員研修については、各学部にて任されており、FD委員会として実施方法を今後検討する必要がある。

以上

Ⅲ 大学院 FD 委員会の活動

1 大学院FD委員会の活動記録（平成28年度）

Ⅲ. 1 大学院FD委員会の活動記録（平成28年度）

①大学院FD委員会の活動記録

（第1回） 平成28年5月31日（火） 13：30～14：15	報告 (1) 平成27年度活動報告書について・各研究科の現状報告 (2) 平成27年度の本委員会審議経過について (3) その他
（第2回） 平成28年7月1日（金） 10：50～11：40	審議 (1) 平成28年度大学院FD実施計画について (2) 平成28年度大学院授業評価アンケートの実施について (3) その他
（第3回） 平成28年10月18日（火） 9：15～9：55	報告 (1) 平成28年度大学院授業評価アンケート実施状況について 審議 (1) 平成28年度大学院FD実施計画について (2) その他
（第4回） 平成29年2月9日（木） 16：30～17：05	報告 (1) 平成28年度後期大学院授業評価アンケート実施状況について 審議 (1) 平成28年度大学院生への研究倫理教育に関する件 (2) 平成28年度FD活動報告書に関する件 (3) その他 ・今後のe-learningを利用した研究倫理教育の活用方法について ・来年度授業評価アンケートの実施方法について

②平成28年度 大学院FD活動報告

○学生（大学院生）の学修時間アンケート

- a 実施内容：平成29年1月16日（月）～1月22日（日）における学修時間について平日と土日の、授業の時間以外の時間で「準備学修（予習）」、「課題・復習」、「授業以外で関心がある勉強」について何時間学習するか質問した。

実施目的：学生・院生の学習のスタイルを把握し、より価値の高い授業を提供するために実施する。

- b 実施方法：学生支援システムのアンケート機能を利用し、全学生対象に実施した。
c 開催状況：5,873名中245名が回答、大学院生は6名が回答
d 実施結果を踏まえた授業改善への取組状況：結果を集計し、自由記述も含めて、各種委員会で報告した。

○シラバスのチェック

- a 実施内容：各研究科ごとに、シラバス作成要領を作成し、教育目標、CP、DPを明示した上で、各教員にシラバス作成を依頼した。その後、大学運営会議からの求めにより、初校時に、全科目についての第三者チェックを各研究科のFD委員が実施した。必要項目や内容について確認し、必要に応じて、授業担当者に加筆修正を依頼した。

○学生に対する授業評価アンケートの実施状況（詳細は次ページ以降）

- a 実施時期：【前期】平成28年7月13日（水）～30日（土）
【後期】平成29年1月18日（水）～2月3日（金）
b 実施対象科目：大学院での受講科目すべてを対象として記述式で回答
c 実施方法：実施期間中4研究科に在学している院生全員に郵送で返信用封筒同封により送付
d 回答数（前後期合計）

研 究 科	在学数	回答数	回答率
生 活 科 学 研 究 科	17	10	58.8%
人 間 関 係 学 研 究 科	48	20	41.7%
現代マネジメント研究科	6	4	66.7%
教 育 学 研 究 科	4	3	75.0%
計	75	37※	62.7%

※37名中1名は研究科不明

③平成28年度前期大学院授業評価アンケート実施状況

平成28年7月1日

大学院FD委員会

平成28年度前期授業科目 大学院授業評価アンケートの実施について

1. スケジュール

日時	会議等	内容
6/21 (火)	大学院委員会	大学院授業評価アンケート実施について
7/1 (金)	大学院FD委員会	大学院授業評価アンケート内容について
7/12 (火)	研究科委員会	大学院授業評価アンケートについて
7/13(水)～7/30(土)	—	大学院授業評価アンケートの実施 (郵送)
8/31 (水)	各研究科	大学院授業評価アンケート結果の確認・検証

2. 大学院授業評価アンケートの実施について

学部では、従来から全学FD委員会を中心として授業評価アンケートを実施しており、平成28年度は、前期授業科目のうち受講者10名以上の科目を対象に、専任教員は一人2科目以上、非常勤講師は一人1科目以上を選定し実施している。

大学院の授業については、各研究科の取り組みはあるものの大学院全体として授業の質の向上をめざすためのアンケート等の取り組みはなく、実施が求められている。

3. 大学院授業評価アンケート内容について

学部での授業評価アンケートは、授業科目ごとに回答者の匿名性を守るため、原則10名以上の科目を対象として実施している。しかし、大学院においては10名以上の科目は一部の専攻にしかなく、同様の方法での授業評価アンケートは匿名性が確保できないことから別の実施方法が必要である。

そのため、大学院での授業評価アンケートは科目ごとではなく、大学院生ごとに有益であった科目等を記入してもらう様式をもって実施し、結果を各研究科で検討する方式をとってはどうか。

※アンケート形式ではなく、座談会形式の大学院生による授業評価の実施を希望する場合は、結果報告を平成28年8月31日までに教務課に提出する。

4. 授業評価アンケート項目及び実施方法について

アンケート項目は、九州産業大学大学院のアンケートを参考に、加えるべき項目等については大学院FD委員会で検討し、研究科委員会で決定する。

実施方法は大学院生全員に郵送により配布し、回収は返信用封筒による返送または教務課・日進キャンパス事務課窓口への提出とする。

平成28年7月13日

相山女学園大学大学院

院 生 各 位

相山女学園大学大学院FD委員会

委員長 後 藤 宗 理

平成28年度前期 相山女学園大学大学院 授業評価アンケートについて

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

相山女学園大学大学院FD委員会では、大学院各研究科の授業内容の質的向上を図るため、別紙の通りアンケートを実施させていただきます。

このアンケートは、各研究科の授業内容や方法の充実を図るうえでの参考資料とするために実施するものです。目的以外に使用されることはなく、不利益を被ることは一切ありませんので、院生みなさまの率直なご意見をご記入ください。

ご記入後は、平成28年7月30日（土）までに、同封の返信用封筒でご返送いただくか、同封筒に封入し教務課または日進キャンパス事務課窓口にご提出をお願い致します。

なお、このアンケートは科目ごとではなく、大学院生1名につき1回のみ回答するものとなります。

前期末の試験準備等多忙な時期かと思いますが、何とぞご協力をお願い致します。

敬具

(本件お問い合わせ先)

相山女学園大学 学務部教務課 FD担当

TEL 052-781-6466

Email kyoumu@ml.sugiyama-u.ac.jp

平成28年度前期 大学院授業評価アンケート

このアンケートは、各研究科の授業内容や方法の充実を図る上での参考資料とするために実施するものです。目的以外に使用されることはなく、あなたが不利益を被ることは一切ありませんので、素直な気持ちでお答え下さい。

ご提出締切日 平成28年7月30日(土)

以下の質問に対して自由に書いて下さい。

1. 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点などを科目名と共に書いて下さい。

2. 大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点について科目名と共に建設的な意見を書いて下さい。

裏面に続く

3. 教室設備、研究機器、授業環境などについて、お気づきの点があれば具体的（棟、教室、等）に書いて下さい。

ご協力ありがとうございました。ご意見を基に改善するよう努力します。

※記入済みアンケート用紙は、返信用封筒に封入し返送いただくか、同封筒に封入し、教務課または日進キャンパス事務課窓口までご提出ください。

平成28年度大学院 前期授業評価アンケート 実施状況

1. 実施概要

- ・実施期間：平成28年7月13日（水）～7月30日（土）
- ・実施対象科目：大学院での受講科目すべてを対象として記述式で回答
- ・実施方法：7月13日（水）4研究科に在学している受験生全員に郵送で返信用封筒同封により送付。

2. 回答数

研 究 科	前期在学数	回答数	回答率
生 活 科 学 研 究 科	9	6	66.7%
人 間 関 係 学 研 究 科	24	13	54.2%
現代マネジメント研究科	3	2	66.7%
教 育 学 研 究 科	2	2	100%
計	38	24※	63.2%

※回答数計24名のうち1名は研究科不明

④ H28 大学院前期授業評価アンケート回答集計

平成28年度前期大学院授業評価アンケート回答

	設問1	設問2	設問3	回答者所属
1	栄養保健学特論…英語の教科書を用いた授業で、英語論文を読む上で有益な知識を得た。 生化学特論…あまり詳しく学んだことのない「老化」についての講義が非常に興味深かった。授業の終わりに教師への質問の時間があり、生徒を含め皆で議論ができる時間が有益だった。	上記2科目含め全般的に… 英語論文を読む書く上での英語の読み方、書き方の基礎を学びたい。	生活科学部棟216室 ホワイトボード用のペンのインクが少なく、記入できなかった。 どこで補充すればいいのか分からなかった。	食品栄養科学専攻
2	なし	〈栄養保健学特論〉 ・進化論で昔の話すぎて、知っても役に立たないと思った。 最新の医学の情報が学べると思った。 ・大学の4年間で英語の科目が全くなかったのにイギリス英語の訳しにくい英語の教科書をいきなり使うと訳せないから、教科書を変えた方がいいと思った。または日本語でいいと思った。 ・進化論の内容が難かしくて、結局何が言いたいのか分からなかった。最後の授業でまとめをしたら内容が理解できるかもしれない。 〈生化学特論〉 ・スライドが早いからスライドをプリントにして配ってほしい。	なし	食品栄養科学専攻
3			生活棟2Fの院生室（食品専攻が使う部屋）のPCが古く、大変使いづらい。また学校のWiFiが届かないのも不便。 院生室にあるプロジェクターが、自動調節もできない古く、大きく、重たいもので、授業で先生方が示すPPもいつもゆがんでしまうので新しいものにしてほしい。また、プリンターもA4用紙しかセットできず、紙づまりもしやすいので新しいものにしてほしい。	食品栄養科学専攻
4	環境心理学特論 1、2回目は指定図書、3回目は自分の好きな本（ただし環境心理学に関する本）を選んで前期で計3冊の本を読了することが出来た。読んだところまでレジュメとしてまとめあげるので自分で本の評価をすることができた。 課題の質量は多かったが難しい本でも読めるようになったのでとても有益な授業であった。	特になし。全部有益であった。	特になし。	生活環境学専攻
5	アパレル環境調和特論・演習において授業の一貫として日本繊維製品消費科学会に参加させていただいたことは非常に有益であったと思います。発表者として人前で研究報告をしたことは、今後の大学院生活に役立つ経験となりました。	特になし	1時限で使用する教室の空調（今季の場合は冷房）を予め入れておいてもらえると、授業にもっと集中できるかと思います。（B215）教室に着いた時に冷房を入れても効くまでに時間がかかりました。	生活環境学専攻

	設問1	設問2	設問3	回答者所属
6	臨床心理査定演習ⅠとⅡでは、様々な心理検査に触れたり体験したりすることができ、自分のことを理解することに役立ったと思います。また、自分が将来こういう物を使うのだなということを想像することができました。	心理学研究法特講では、グループワークを通して、心理学統計やSPSSの使い方を楽しく学ぶことができましたが、SPSSを使ったことのある人が主導となってしまう、使ったことのない人はその人についていくという形になってしまいました。グループ活動の前に一人一人がSPSSに触れるような先生の講義があればより理解が深まるのかなと思いました。	2号棟1階の教室が湿気が多いためカビのにおいのようなものを感じます。改善できるようでしたらしてほしいです。	人間関係学専攻 臨床心理学領域
7	・最も必要としている知識は、M1の後期に始まる相談室のプレイセラピーの知識と病院実習の知識であったため、[心理療法]の講義全般と特に起用を使った講義が理解しやすかった。[精神医学]では、実習に役立つ知識を与えてくれた。また、ゲストスピーカーの話は、実際の現場の話が聞けて、将来の進路を深く考えるきっかけを与えてくれた。 [学校臨床心理学] SCのやりがいや大変さを深く学べた。本のコピーはとても必要な知識だが、先生が合間に話される学校現場の話のほうが面白く興味深かった。 [比較心理学] 授業を受ける前には、臨床に何が役立つのか疑問を持っていた。しかし、人の進化を淘汰で捉える部分は、現在に通じていることもあり意外に新鮮で興味深かった。また、いつのまにか授業に引き込まれている話術や話の展開・脱線がおもしろかった。 [事例研究：増沢先生][臨床心理学特講Ⅱ：三和先生]の講義は、現場のリアルの話しや経験談は、大変興味深かく、授業に引き込まれた。	[心理査定Ⅱ] ロールシャッハやバウムや風景構成法が学べて有益であるが、駆け足過ぎて残念。また、プレイルームで実際に模擬プレイの様子を見るのは、有益であったが、M2の人にある日のAちゃんとして待合の様子から行ってもらほうが良いと思う。 [研究法] 授業前半の卒論・研究計画についての指摘は、ストレート過ぎてショックを受けることは、事前に先輩方から伝えられ有名な話したが、口頭審問の疑似体験が出来、修論に対する姿勢につながり有益であると思った。また、いろんな研究を概観できて講義の手法はとても良いと思う。しかし、グループワークでの尺度作成経験は、心理分析初心者にとっては、わからないことが多く苦労する。初心者は、前半の授業の間に、データをダウンロードできる小塩のSPSSの本（黄色）を使用して、相関ぐらいまで各自でやっておくように促しておくといいかもしれない。	・相談室で使うスリッパを置いておく下駄箱。机の下においてあるため、スリッパ周辺は掃除ができない。 ・特に問題はなく、環境は十分整っている。	人間関係学専攻 臨床心理学領域
8	〈精神医学特講〉自身が最も関心のある認知行動療法について深く学ぶことができ、修論に生かしたいと改めて思う有益な授業でした。 〈心理療法特講Ⅰ〉先生が1つ1つの症状に対して詳しく説明して下さるため障害の理解がしやすかったこと、実際の事例から読みとれることなどを考察する為非常に勉強になりました。 〈心理学研究法特講〉心理統計について学び、実際に因子分析を授業内で行うという貴重な時間を頂くことができ、少し成長したと感じられました。	特にありません。	特にありません。	人間関係学専攻 臨床心理学領域
9	精神医学特講の授業がとても興味深く、1年の後期から始まる病院実習に向けてとてもためになりました。	特にありません。	院生室の滞在時間を延してほしい。 19時40分までに院生室を出なければいけないので、可能であれば、21時くらいまで院生室で勉強できるとありがたいです。	人間関係学専攻 臨床心理学領域

	設問1	設問2	設問3	回答者所属
10	○精神医学：普段聞くことのできない分野である為もっと精神医学詳細を学ぶ機会があればありがたい。 ○心理療法特講：具体的な事例を交えての授業だったので、カウンセリングのイメージがつかめた。 ○心理査定演習Ⅰ：幅広い心理査定を毎日丁寧にご教示してくれた。			人間関係学専攻 臨床心理学領域
11	実践に富んだ授業で、今後役に立ちそうだと感じた科目は、 ・臨床心理学特講（三和先生） ・精神医学特講（中野先生） ・心理療法特講（李先生） 人をとらえる時の見方を教わったのは、どの先生方の授業でも教えていただき有益でしたが、中でも事例研究（増沢先生）でそう感じました。	私が椋山女学園入学時に期待していた中に、「認知行動療法」について学べるのではないかと、というものがありませんでした。 講師の先生の中にそのスペシャリストである先生がみえたからです。しかし実際にはその認知行動療法を教える科目がないので残念でした。 受験前に通った塾でも認知行動療法に興味をもっている人は何人かいましたので、授業を組んでいただき、それをアピールすれば、椋山女学園入学希望者が増えるのではないかと思います。また、実習でも、この講義があると役立ったのではないかと思いますので、ご検討いただけますと有難いです	院生室のPCが新しくなり大変有難いです。しかし院生室の利用時間が短く（午後7：30）、その点の改善を希望します。 昨年、授業でPC－プロジェクターを使う講義がいくつかありましたが、起動が遅く大変使いにくさを感じました。	人間関係学専攻 臨床心理学領域
12	心理療法特講…セラピーにおいて重要なことや考え方を個人で考えたり小グループで考え、話し合うことで、考え方・応答のしかたの基礎が分かった。	臨床心理査定特講…名大法のスカリングについて、具体例などももう少し詳しく学べるともっとよいかと感じました。	5号棟3階の学部棟と大学院棟の間の扉が大きな音で閉まるため、学部の授業中うるさいかなと感じました。	人間関係学専攻 臨床心理学領域
13	臨床心理学特講は、ケースや実習でクライアントと関わる際にとても役に立ちました。	もう少し1つの検査について、実施、解釈までくわしく勉強できる講義がほしかった。	院生棟にトイレがほしかった。ケース後にバスがないと不便。平日はいいが、土曜日も18時ではなくもう1本だけ遅いのがほしい。	人間関係学専攻 臨床心理学領域
14	実習先が豊富である点、（臨床心理学実習） SVが毎回受けられる点が有益だと思いました。（スーパーヴィジョン）	特にありません。	大学院棟にトイレがなく、少し離れた学部棟まで行かなくてはならないのがやや不便でした。	人間関係学専攻 臨床心理学領域
15	○教育学特講：オムニバス形式だったため、様々な角度からの内容だったため、自分の興味を広げることができた。 ○人間関係論：論文を読む機会が多く、また授業内で読み取りが正しかったか等を丁寧に説明してくださった。 ○教育史：幼児に関してだが今まで着目しなかった内容をとても具体的にほり下げて教えて下さり、新たな視点をもつことができた。 ○小集団特講：私のニーズに合わせて教材を用意して下さいだったので、自分の関心に一番そったものにして下さった。 ○学校教育臨床特講：教育学とはまた少し違った視点で授業をして下さり、教育以外の内容にふれることができた。 ○保育学特講：保育の基礎的なことをもう一度きちんと学ぶことができた。 ○社会調査演習：調査のことを何も学んだことがなかったので、一から丁寧に実践をまじえて教えて下さった。	特にありません。	もし部屋数に余裕があるのなら、心理学領域の学生と別室にしていきたい。	人間関係学専攻 教育学領域

	設問1	設問2	設問3	回答者所属
16	教育行政学概論…法律や制度についてその歴史的背景等についても非常に細かく教えて頂くことができ、とてもわかりやすく理解を深めることができました。 教育心理学概論…多くの事例を挙げて説明して頂き、興味深く覚えることができました。現場に戻ってもすぐに参考にできそうでした。 幼児教育学概論…毎回のディスカッションの時間は自分の考えを言葉にしてまとめるよい勉強になりました。また他の方の意見を聞くことも大変勉強になりました。 生涯発達心理学概論…授業の進め方がスピーディーでとても充実した時間を過ごせました。自分の能力が足りず難しい面もありましたがそれも含め、大変勉強になりました。 発達障害学特論…沢山図で示して頂き、苦手だった脳や体のしくみについても抵抗なく理解を深めることができました。(先生の優しいお人柄に甘え) 物怖じせず色々な質問をすることもでき楽しかったです。 造形表現演習…初めて真剣に絵を描きました。専門的な指導を受けることができ、色々チャレンジする面白さを感じることができました。 国語科指導法演習…物語を読むための視点を勉強することができ、今まで絵本をなにげなく読んでいたと反省しました。現場でもすぐ使い是非参考にしたいと思いました。 保育内容研究…自分から本を読むという機会がなかったので、とてもいいきっかけを頂けたと思います。引用を覚えるのではなくきちんと通して理解することの大切さを再認識しました。 異文化教育特論…現場で直面する外国人の保ゴ者や子どもとのトラブルについてその歴史的な背景まで考えたことがなくとても新鮮でした。 比較教育学特論…研究するとはどういうことなのかという姿勢や意識について考えることができました。	2については特にありません。どの授業からもそれぞれの先生らしさが伝わってきて、とても楽しく受けることができました。 あえて言わせて頂くなら、院生の人数が少なく仕方のないことですがもう少し人数がいるとよりディスカッションが盛り上がったかもしれません。小人数もよかったのですが…。	PCから印刷する時、初期設定がカラープリントになっています。主に論文を印刷することが多いので白黒でいいのですが、毎回設定しなおさなければいけません。この作業が短縮できると嬉しいです。	教育学専攻
17	○造形表現演習：自分の描きたい絵を描く事が出来たし、興味深い、保育園幼稚園に行き、実際の様子を見たり、実践を見せて頂けて、様々な保育の在り方を学べて良い経験となった。 ○国語科指導法演習：学部生の時、とっていなかった科目だったが、授業人数が少なかったこともあって、気になること、興味関心があることをその場で質問して、内容について深めていくことが出来たのでとても楽しく授業をうけることが出来た。 ○その他の科目も大学とくらべ、より深く学ぶことが出来る内容だったので、興味深くうけることが出来た。	○とくになし ○あえていうなら人数が少ない…(でもその分たくさん質問できたし、より濃い授業が出来たとも感じる…)	○大学生とは違い、人数も少ないこともあってなのか、先生方の研究室以外での授業の部屋が決められていない…ので、授業時間に先生が指定した教室に行くとか他の生徒に使われていることがよくあった(M1のころ) ○院生室のコピーが設定がカラーコピーのため枚数の制限がこえてしまう。ので、設定をモノクロに変えてほしい。(1回1回設定を変えなければモノクロにならない。)	教育学専攻

	設問1	設問2	設問3	回答者所属
18	自分の研究とは違った内容で、授業でもなければ触れることのない分野だったので、知識が広がって良かったと思います。	特に不満はありません。	ホワイトボード用のマーカーで、使えるものが赤色しかなかったのですが、無くなったときはどちらに行けば新しいものがいただけるのでしょうか？	？
19	臨床心理学特講Ⅱ…外部の先生の講義だったので、新しい視点から授業を聞けてよかった。	心理学研究法特講…授業内でももう少し心理学統計の手法や統計ソフトの使い方を教えてほしかった。十分な説明がないのに、経験者が未経験者に独学で教えるのは、負担が大きかった。	・2号棟3階女子トイレの洗面台の水量が非常に弱い。 ・土曜日の授業と夏期の集中講義は、星ヶ丘キャンパスでやってほしい。 ・スクールバスの本数を増やしてほしい。(朝の8:40~9:20の間など) ・日進キャンパスの図書館が閉鎖的で暗いので開放的にしてほしい。また、本の状態が悪いものが多いところも気になる。	人間関係学専攻 臨床心理学領域
20	会計学特論→自分自身の業務に役立つところが多くあるから。 労働経済学→修論分野だから。	特にないです。	院生研究室もそうじがしたいです。 一般教室と同様にそうじしてほしいです。 荷物などあるのであらかじめ毎週何曜日とか毎月〇日みたいながあるといいです。	現代マネジメント専攻
21	心理療法特講は、これからケースを担当するにあたり、実践的でとても役にたった。比較行動学は、心理学と隣接する領域でかなり視野を広められる教科で、興味深かった。精神医学特論は、実際の現場で臨床心理士として何が求められるか、実践に学べて外部の方の話も聞けて大変参考になった。	科目名は伏せておくが、臨床心理士として現場で必要とされる査定を学ぶ科目について、指導の仕方があまりにも学生任せではないか？	輪転機を置いてほしい。質問紙を配布するときなど非常に手間がかかる。	人間関係学専攻 臨床心理学領域
22	初めての事でしたので、知らない事も多く、すべてにおいて有益でした。その中でも、特に興味深かったものは、イノベーションマネジメントの経営戦略でした。	今のところ特に改善すべき点は思いあたりません。	学校では、授業を受けに行くだけで、ほとんど学校設備を利用する事がないので、もう少し利用していきたいと思っています。 教室によって、ホワイトボードのペンが全くつかない物ばかりおいてあるところがあります。	現代マネジメント専攻
23	より専門性が高くなり、社会で仕事をされている先生方から生の声がきけたこと。 興味関心にあわせて、講義内容を発展して頂いたこと。	特になし。 一部開講されていない科目について、修士の間に開講されるとうれしい。(建築系の科目)	特になし。	生活環境学専攻
24	・犯罪心理学の集中講義は、とても勉強になった。 司法関係の授業はあまりないので、来年もぜひお願いしたいです。	・臨床心理査定演習Ⅱはもう少し授業内で初学者向けに進めていただきたかった。 ・心理学研究法特講では、ほとんどがグループ活動で、経験者の負担が大ききように感じた。もう少し先生から具体的にご教示いただきたかった。	・院生自習室のスキャナーがもう少し使いやすいととても助かります。 ・2号棟3階から院生棟へ行くときのドアがもう少し静かに閉まるとありがたいです。 ・心理検査のWISC,WAISの自身、特にマニュアルが足りていないようです。	人間関係学専攻 臨床心理学領域

専攻別回収率（回収数／依頼数）

食品栄養科学専攻（3/5 60.0%）
生活環境学専攻（3/4 75.0 %）
人間関係学専攻臨床心理学領域（12/22 54.5 %）
人間関係学専攻社会学領域（-/ -）
人間関係学専攻教育学領域（1/2 50.0 %）
現代マネジメント専攻（2/3 66.6 %）
教育学専攻（2/2 100 %）
不明（1）
合計 24/38 63.2 %

⑤大学院授業評価アンケート検証

平成28年度前期授業科目 大学院授業評価アンケート結果について

(生活科学研究科 修士課程)

概要：

今回の授業評価アンケートは、科目ごとではなく、大学院生ごとに有益であった授業科目等を記入してもらった様式で実施した。食品栄養科学専攻の回収率は60%、生活環境学専攻の回収率は75%であった。

設問内容は、以下の3項目である。

設問1. 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など

設問2. 大学院の授業科目及び研究指導科目で改善すべき点

設問3. 教室設備、研究設備、授業環境などについてのお気づきの点

アンケート結果の確認・検証：

研究科長、専攻世話人および大学院FD委員でアンケート結果を確認するとともに、より質の高い教育および研究指導の実践・改善のための方法について論議した。同時に、大学院生の学習・研究がスムーズに遂行できる環境の整備についても具体的な改善策を考えた。以下に、その内容を記述する。

- 1) 食品栄養科学専攻で開講されている授業科目の中で、英語の教科書を使用して授業を行うものがあったが、受講生は“修士論文を作成する上で不可欠となる英語論文の読解力を養うとともに有益な知識を得る事ができた”とこの授業科目を評価している。
しかし、修士学生の中にも、英文の読解力が乏しい、特に科学英語を読みこなす能力に欠ける者も居ることを考えると、今後、大学院（生活科学研究科、或いは大学院共通）の授業科目の中にも、総合科目として、英語の読解力を会得する科目を置くことも必要である。
- 2) 生活環境学専攻で開講されているいくつかの授業においても、大学院の特論や演習が受け身的にならないように、多くの課題が与えられ、事前準備をするよう工夫されている。受講生にとっては苦勞することも多いが、結果として難しい論文や書物の内容が理解できることから、このような参加型授業が有益であると評価している。
- 3) 近年、大学院生が両専攻の特別研究（修士論文）の一環として、各種学会で研究成果を報告する機会が多くなっている。学会への参加は、大学院生活の充実に役立つとともに、学術論文の作成、さらには就職活動にも有益であると考えられる。今後、より多くの学生が積極的に学会へ参加するためには、宿泊代の補助などの経済的なフォローも必要である。
- 4) 最近、大学院の授業においても、パワーポイントを使用するケースが多くなっているが、受講生がその内容を十分に理解するためには、資料の配布も重要である。
- 5) 現在、生活科学研究科の両専攻において、一部の授業科目が数年開講されていない状況であるが、これらの科目については各専攻において早急に検討する必要がある。
- 6) 大学院生が研究課題の遂行のために日常的に使用する学習・研究設備（例えば、パソコン、プリンター、プロジェクターなど）が、あまりにも古く、改善すべき問題が生じている。この問題を解決するには経

費を伴うが、早急に具体的な改善策を考え、充実した学習環境の整備を行う必要がある。

以上

大学院授業評価アンケート結果の概要（人間関係学研究科）

研究科在籍者全員を対象にアンケートを実施し、13名から回答があった（臨床心理学領域在籍者22名中12名。教育学領域在籍者2名中1名）。

回答の概要は以下のとおりである。

質問1. 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点などを科目名と共に書いて下さい。

回答：演習や実習科目が、具体的で役に立ったとの指摘があった。講義科目で名前が挙げられたのは「精神医学特講」、「心理療法特講」・「臨床心理学特講」「学校臨床心理学」、「比較心理学」、「事例研究」、「心理学研究法特講」であった。

質問2. 大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点について科目名と共に建設的な意見を書いて下さい。

回答：「心理学研究法特講」について、統計ソフトの使い方における初心者の戸惑いが指摘された。認知行動療法の専門家がいるにもかかわらず、それを専門に学べる授業がないという不満、心理検査法の解釈などをもっと具体的に教えて欲しいという要望があった。

質問3. 教室設備、研究機器、授業環境などについて、お気づきの点があれば具体的（棟、教室、等）に書いて下さい。

回答：「院生室の利用時間延長」「バス最終便の時間延長」の要望があった。

平成28年度大学院前期授業評価アンケート 検証結果

現代マネジメント研究科 現代マネジメント専攻

【設問1】について

研究分野に関連した授業、および社会人院生にとっては業務に関連した授業が有益であることが示された。

【設問2】について

特に不満な点はなく、授業内容や研究指導が適切であることが示されている。

【設問3】について

大学院生研究室の清掃の希望があり、今後、学生の希望を聞きながら実施を検討することにした。

【総評】

授業評価アンケートを見た限り、全体として専門性を活かした授業が行われており満足度は高く、かつ社会人院生にとっては授業内容は実用性が高いことが示されていることがわかった。

以上

星野優太（研究科長）

水野英雄（大学院FD委員会委員）

平成28年度前期授業科目 大学院授業評価アンケート実施についての確認・検証報告（教育学研究科）

教育学研究科においては2名の大学院生から授業評価アンケートの回答があり、教務課によってその結果がまとめられた。この結果に基づき、本研究科においては、下記のように座談会形式の確認、検証、意見交換を行った。

記

日 時：8月29日（月）13：00～14：00
出席者：大学院担当教員2名、大学院生2名
場 所：教育学棟D134

話し合いの内容は以下のとおりである。

1. 大学院の授業について

大学院での授業について興味深かった点や有益であった点について、院生に確認した。基本的には、授業ではそれぞれの専門領域の理解を深めることができ、講義のほかに、指定された図書の輪読、質問や意見交換、ディスカッション、インターンシップなどの多様な学習方法が取り入れられ、有益であったとの報告があった。

- ・授業に関しては、理論的な学習と実践的な学習のバランスが取れていて、少人数のディスカッションでさらに理解が深まったことを確認した。
- ・教職インターンシップについても、一年間取り組むことによって、実践的研究の足がかりを得ることができたことが報告された。
- ・研究指導科目については、さまざまな授業を履修する中で、修士論文のテーマや内容を深めるために役立っていることが確認された。

2. 授業の改善すべき点について

院生からは、少人数教育の利点を生かして質問や意見交換ができたことで、基本的には授業が有意義であったことが指摘された。

改善すべき点については、

- ・少人数教育であるため自由に質問などができる利点があるが、もう少し人数が多いほうがディスカッションも盛り上がり理解も深まるため、院生の数が増えることが望ましい。
- ・大学院の授業では教員の専門性が反映されるため、やや高度すぎるのではないかと思われる内容の授業もあった。大学院でも、学部と同様に、院生が内容に興味を持ち、理解を深められるための工夫を考えてほしい。
- ・教職インターンシップは一年間にわたって実施され、授業担当者によっては他の授業と異なってレポートの作成等院生の負担が大きいのではないか。

3. 教室設備、研究機器、授業環境について

院生からは、研究教育環境についてはおおむね満足していることが伝えられたが、以下のような問題点や課題を指摘されたので、早急に対応したい。

- ・教室については、前期によく生じたことであるが、授業が予定されている部屋で学部生が集団で学習をしていることがあったので、大学院の授業で使用する予定表を入り口のドアに掲示してもらいたい。
- ・プリンターを使用する際、設定がカラーコピー用になっているため、初期設定をモノクロにしてください

たい。

- ・大学院生研究室で使用しているコンピュータやプリンターで不具合があるので、定期的に点検してほしい。

今後の対応について

今回の座談会では、今後時間をかけて検討していくべき課題とともに、早急に対応しなければならない課題も指摘されたので、研究科委員会で報告し、今後の対応策について検討していきたい。

また、今回の意見や要望を検討することにより、院生にとって望ましい教育研究環境を実現するためのアドバイザーボードを中心にした検討体制づくりにも取り組みたい。

以上

⑥【後期】H28大学院授業評価アンケート

平成28年度後期授業科目 大学院授業評価アンケートの実施について

1. スケジュール

日時	会議等	内容
7/12（火）	研究科委員会	大学院授業評価アンケートについて承認
10/18（火）	大学院FD委員会	後期大学院授業評価アンケート実施について報告・確認
1/18（水）～2/3（金）	—	大学院授業評価アンケートの実施（郵送）
2/14（火）	各研究科	大学院授業評価アンケート結果の確認・検証

2. 大学院授業評価アンケートの実施について

学部では、従来から全学FD委員会を中心として授業評価アンケートを実施しており、平成28年度は、前期授業科目のうち受講者10名以上の科目を対象に、専任教員は一人2科目以上、非常勤講師は一人1科目以上を選定し実施している。

大学院の授業については、各研究科の取り組みはあるものの大学院全体として授業の質の向上をめざすためのアンケート等の取り組みはなく、実施が求められている。

3. 大学院授業評価アンケート内容について

学部での授業評価アンケートは、授業科目ごとに回答者の匿名性を守るため、原則10名以上の科目を対象として実施している。しかし、大学院においては10名以上の科目は一部の専攻にしかなく、同様の方法での授業評価アンケートは匿名性が確保できないことから別の実施方法が必要である。

そのため、大学院での授業評価アンケートは科目ごとではなく、大学院生ごとに有益であった科目等を記入してもらう様式をもって実施し、結果を各研究科で検討する方式で実施する。

4. 授業評価アンケート項目及び実施方法について

アンケート項目は、九州産業大学大学院のアンケートを参考に、加えるべき項目等については大学院FD委員会で検討し、研究科委員会で決定する。

実施方法は大学院生全員に郵送により配布し、回収は返信用封筒による返送または教務課・日進キャンパス事務課窓口への提出とする。

平成29年1月18日

相山女学園大学大学院
院 生 各 位

相山女学園大学大学院FD委員会
委員長 後 藤 宗 理

平成28年度後期 相山女学園大学大学院 授業評価アンケートについて

拝啓 時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

相山女学園大学大学院FD委員会では、大学院各研究科の授業内容の質的向上を図るため、別紙の通りアンケートを実施させていただきます。

このアンケートは、各研究科の授業内容や方法の充実を図るうえでの参考資料とするために実施するものです。目的以外に使用されることはなく、不利益を被ることは一切ありませんので、院生のみなさまの率直なご意見をご記入ください。

ご記入後は、平成29年2月3日（金）までに、同封の返信用封筒でご返送いただくか、同封筒に封入し教務課または日進キャンパス事務課窓口にご提出をお願い致します。ワープロ等で質問項目についてご記入いただき、別紙として同封いただいても結構です。

なお、このアンケートは科目ごとではなく、大学院生1名につき1回のみ回答するものとなります。

後期末の試験準備等ご多忙な時期かと思いますが、何とぞご協力をお願い致します。

敬具

(本件お問い合わせ先)
相山女学園大学 学務部教務課 FD担当
TEL 052-781-6466
Email kyoumu@ml.sugiyama-u.ac.jp

平成28年度後期 大学院授業評価アンケート

このアンケートは、各研究科の授業内容や方法の充実を図る上での参考資料とするために実施するものです。目的以外に使用されることはなく、あなたが不利益を被ることは一切ありませんので、素直な気持ちでお答え下さい。

ご提出締切日 平成29年2月3日（金）

以下の質問に対して自由に書いて下さい。

1. 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点などを科目名と共に書いて下さい。

2. 大学院の授業科目及び研究指導科目の改善すべき点について科目名と共に建設的な意見を書いて下さい。

裏面に続く

3. 教室設備、研究機器、授業環境などについて、お気づきの点があれば具体的（棟、教室、等）に書いて下さい。

領域名 _____

ご協力ありがとうございました。ご意見を基に改善するよう努力します。

※記入済みアンケート用紙は、返信用封筒に封入し返送いただくか、同封筒に封入し、
教務課または日進キャンパス事務課窓口までご提出ください。

⑦平成28年度後期大学院授業評価アンケート実施状況

平成28年度大学院 後期授業評価アンケート 実施状況

1. 実施概要

- ・実施期間：平成29年1月18日（水）～ 2月3日（金）
- ・実施対象科目：大学院での受講科目すべてを対象として記述式で回答
- ・実施方法：1月18日（水）4研究科に在学している受験生全員に郵送で返信用封筒同封により送付。

2. 回答数（平成29年2月6日現在）

研究科	後期在学数	回答数	回答率
生 活 科 学 研 究 科	8	3	37.5 %
人 間 関 係 学 研 究 科 ※	24	7	29.2 %
現代マネジメント研究科	3	2	66.7 %
教 育 学 研 究 科	2	1	50.0 %
計	37	13	35.1 %

※臨床心理学領域6、教育学領域1

⑧ H28 大学院後期授業評価アンケート回答集計

平成28年度後期大学院授業評価アンケート回答集計

	設問1 興味深かった点、有益であった点を科目名と共に記入。	設問2 改善すべき点を科目名と共に記入	設問3 設備・機器・環境など	回答者所属
1	会計学特論 →簿記試験受験のきっかけになった。	論文の様式が分かりにくい。 (脚注のつけ方、参考文献のつけ方など細かいところまでわかりにくいので、詳細な説明があるといいです。)	院生研究室のそうじをしてください。(プリンターのインクがえとか。)自分たちではなかなか時間がないため。	現代マネジメント研究科
2	「臨床心理査定特講」の実際に事例を用いた授業が有益でした。	「産業・組織心理学特講」の授業では、毎回終了時間を超えていました。次の時間にも授業があるため、お手洗い等にも行けないことがほとんどで支障をきたしていたため、時間通りに終わっていただきたいです。	特にありません。快適に過ごさせていただけてます。	臨床心理学領域
3	産業組織心理学特講では、教科書の話だけでなく、実際に現場で働いていらっしゃる三宅先生をゲストスピーカーに迎えてお話をきくことができ、とても貴重なお話がきけました。		いつも207で授業をしていますが、ホワイトボードに資料をはりつけるための磁石が足りないことがありました。	臨床心理学領域
4	○食品機能学特論 自分で決めたテーマを1人ずつ発表をし、それについて議論を行う、という形式の講義だったが、院生が5名全員受講していたこともあり、充実した議論を行うことができ有益であった。	大学院の研究に必須であるにもかかわらず、大学1年生の時に軽く触れるのみである「統計解析」について今一度(そしてより深く)学ぶ機会がほしい。 (大学の卒業研究でも使われる大切な科目なので大学院だけでなく大学3、4年生でも学べたらより良いと思う。)	特になし。	生活科学研究科
5	会計学 イノベーション……知らない事、知識の少ない部分について、新たな知識が身についた。 租税法……研究税法のみではなく、他の税法についても深く知る事ができた。	すべての科目において少人数なので、発表する人が休んでしまうと、授業が進まなかったりする事があり、無駄に過ごしてしまっている気がする。	・税法に関する書籍が少ないので、もう少し増やしてほしいです。 ・教室で食事をとる学生さんがみえるみたいで、午後からの授業は、臭いが気になります。 ・コピー機が5Fから1Fに移動したのが不便です。	現代マネジメント研究科
6	アパレル材料システム演習において英語にふれられた点がよかった。初めはなかなか上手く訳せずに苦労したが、徐々に慣れてきて、意味を読み取れると楽しいと思えた。また、12月に行われた第30回東海支部若手繊維研究会への参加は非常に良い経験になった。			生活科学研究科
7	インテリアデザイン特別講義では外部で働くデザイナーの実践的なお話しが聞けて大変為になりました。デザインに対する考え方、行き詰ったときにどうすれば良いのか、など面白いお話しが聞けました。	インテリアデザイン特別講義について 1限分が1回の講義として換算されていたので3限あったときに1限休むと欠席とみなされます。授業数をもっと増やして3限あるときは1回の講義とみなしてほしいです。	特にありません。	生活科学研究科

	設問1 興味深かった点、有益であった点を科目名と共に記入。	設問2 改善すべき点を科目名と共に記入	設問3 設備・機器・環境など	回答者所属
8	前回のアンケート調査から特に新しいものはありません。	同上	院生室……壁に大きなひびわれができています。 コピー機の利用……院生室のコピー機を利用していますが、論文執筆が終盤に近づくとつれ、一度の印刷枚数が増え、規定枚数を突破してしまい手続きが必要でした。現時点で自分が何枚利用しているかわかるようどこかに表示して頂けると非常に助かります。また発表時に資料を配布するため大量に印刷することがあります。印刷室のコピー機を利用できると非常に便利なのですが院生用のカード等があると嬉しかったです。 2年間大変お世話になりました。ありがとうございました。	? (おそらく教育学研究科)
9	・発達心理学特講義 少人数の授業で教授と学生とのコミュニケーションがとりやすく、議論が発展して、充実した内容であった。		スクールバスの本数を増やしていただきたい。特に平日の朝(8:40以降)と休業中のダイヤ 日進キャンパス1階5号棟ロビーの証明書発行機横にある印刷機の印刷が不鮮明なので、新しいものにかえていただきたい。	臨床心理学領域
10	産業・組織心理学特講(加藤容子先生) 他の教官とちがい授業のすすめ方に工夫がみられた。生徒に事前学習を課した上で、生徒によるプレゼン、先生の実践的な授業、生徒同士のグループワークの流れがよかった。またゲストスピーカーの方にも、今の現場で何がおこっているかを話してもらえた事が有用だと感じた。 発達心理学特講(やまだようこ先生) 山田先生は生徒が出す疑問を何でも嬉しそうに受け入れてくれます。そのため授業での発言がしやすい雰囲気を出されます。これは先生の人間性だと思いますが、このような対応をされる先生は他にいないと思います。	臨床心理査定演習Ⅰ、Ⅱ 心理検査に関する授業数が少ないと感じた。 (授業のすすめ方に改善点があるのかがわからないが)	院生室のPCかえていただきありがとうございました。 Wifi環境がもっと整うとよいと思いました。	臨床心理学領域
11	・産業組織心理学特講(加藤容子先生) 卒業後に臨床心理士として働く上でも非常にためになる知識や心構えを学ぶことができました。先生ご自身の現場での体験もおりまぜてお話し下さり、「先生でも不安になることがあるんだ」と、私の不安を自分で受け入れられるようにもなりました。また、授業内での集団の力動についての解説をしていただいたことも印象に残っており、授業そのものが臨床だと感じました。	特にありません。	院生室の備品のことで困った時、事務員の方や清掃員の方が助けてくださるので、とても良い環境で研究ができています。ありがとうございます。	臨床心理学領域

	設問1 興味深かった点、有益であった点を科目名と共に記入。	設問2 改善すべき点を科目名と共に記入	設問3 設備・機器・環境など	回答者所属
12	・社会制度論特講 ……福祉の制度に関する細かな点まで学ぶことができた。また、先生ご自身のフィールドワークについてもお話しいただき、新たな視点をもつことができた。 ・福祉社会論特講 ……障害者を取りまくあらゆる物事についてとても詳しく学ぶことができ、私の興味関心のある点についても深く教えていただくことができた。 ・組織管理論特講 ……自分が今まで学んできた事とは全く異なった分野だったため、全てがとても興味深かった。自身の職場経験もかさねて考えることができた。		部屋数によろしくがあれば、心理学領域とは別室の院生室がほしい。	教育学領域
13	「産業・組織心理学特講」で外部の講師の方の話をきいたり、事例をよんだりして企業で働く臨床心理士というものがどういうものかをイメージすることができました。	「特別研究」が指導教員によって頻度がちがいきるところが気になりました。	相談室や2号棟の1階がカビの臭いがすることが気になります……。	臨床心理学領域
14	臨床栄養 ・病気についての知識が増えた。 ・パワボの作り方・発表の仕方の練習になった。		・院生室が寒い。 ・院生室の机の高さが合わない（もう少し高い方がいい） ・院生室が乾燥しているからnanoeほしい。	生活科学研究科

IV 学部 FD 活動報告

- 1 生活科学部
- 2 国際コミュニケーション学部
- 3 人間関係学部
- 4 文化情報学部
- 5 現代マネジメント学部
- 6 教育学部
- 7 看護学部

IV. 1 生活科学部

生活科学部FD委員会委員

- (管理栄養学科) 河合潤子、小多沙知
(生活環境デザイン学科) 梶本雅好、清水秀丸
(学部長・オブザーバー) 雨宮勇

【1】活動計画（目標）

- ① 全学で実施される授業アンケートの参加率を高めるよう努力すること。
- ② 学部のFD活動を推進するために、学部教職員からの提案を積極的に募ること。
- ③ 予定されている学科行事をつつがなく達成すること。

【2】実施報告

① 委員会の開催

平成28年4月～平成29年3月の期間中、委員会はメール会議によりタイムリーに実施した。協議事項については、FD委員間或いは各学科会議・教授会にてそれぞれ臨機応変な手段で協議・決定した。

〈協議事項〉

- 授業アンケートの実施は例年通り実施することを確認。
- 昨年度と同様に、卒業時アンケートを実施することを確認。
- 学部FD委員会のウェブサイトの運営について、来年度も継続するかについての意見交換。

② 学部FD委員会ウェブサイト

学部FD委員会ウェブサイトの更新について議論し、今年度は現状のままとした。

③ 購入した書籍

FD活動に予算が割り当てられなかったために該当する執行はなし

④ H28 年度に企画・実施されたFD活動

- H28年7月 授業アンケート実施（全学）
- H28年9月 新任教員に対し、各担当教員及び事務室からガイダンスを実施
- H28年9月 科研費取得のための研修会（全学）、組織人の責務に関する教職員研修会（全学）
- H27年11-12月 授業における学生FDスタッフの活用
- H28年11月 教員向け授業改善に関わるアンケートの実施（全学）
- H28年12月 授業アンケート実施（全学）
- H29年2-3月 「今年度の振り返り」と「来年度の目標」のアンケートの実施（全学）
- H29年3月卒業時アンケートの実施

【3】課題点

- 目標①については、本学部は後期の授業アンケートでは、実施率98.9%（全学96.7%）、「教員向け授業改善に関わるアンケート」では、ほぼ全員から回答が得られ全学的にみて高かった。H29 年度もさらにFD活動の意義をより丁寧に説明したうえでアナウンスを増やし、また、非回答者・非参加者を把握して個別に依頼するなど、前年度より参加率が上がるよう努めたい。
- 目標②については学外におけるFD研修などへの参加の呼びかけをおこない、学外FD研修への参加者が1名いたが、今後も参加を呼びかける必要がある。学内のFD活動が増えたことと、昨年度に引き続き学部自動的にFD活動のための予算がつかず、活動のしやすさが得られていないが、今後も検討を重ね、充実するように努める。

- 目標③については、予定通り実施することができた。昨年度より実施している卒業時アンケートにおいて、学生の4年間の学びに対する感想・意見を把握できたことは、教員にとって今後の教育の指針を確かめるために大変有益であった。また、本年度は授業における学生FDスタッフの活用の呼びかけ、1名の参加があり、授業の教授方法の質の向上につなげることができ有益であった。

【4】次年度へ向けた計画

H28年度に掲げた目標①②③の達成度をみると、FD活動を推進する積極的な力がまだまだ弱いことがわかる。FD活動の意義と重要性をFD委員がまず理解し、他の教職員の理解を助け、積極的な提案や活動が生まれるように、アナウンスの仕方を工夫する。また、FD委員自らも積極的に提案を考え、実施報告の内容が増えるように、学部の協力のもと様々な活動を実現していきたい。そのためには、既存の学部FD活動の現状をより詳細に把握していく必要もあるかもしれない。

「教員向け授業改善に関わるアンケート」の回答によると、両学科教員とも、個人レベルではそれぞれ授業で様々な改良を試みていることが推察できる。しかしながら、各自の試みが現状では十分相互に認識されているとはいえない。そのため、このアンケートの回答を有効に利用するなど、個々の努力と成果を共有してプラットフォームを作っていくことは、次年度検討していきたい項目のひとつである。

卒業時アンケートは昨年度に引き続いての実施となり、両学科で得られた結果をふまえ、さらなる授業改善の材料としていくこと、ならびに卒業時アンケートの実施内容についても引き続き検討することが必要だと考えられた。

(以上)

平成28年度 管理栄養学科 卒業時アンケート

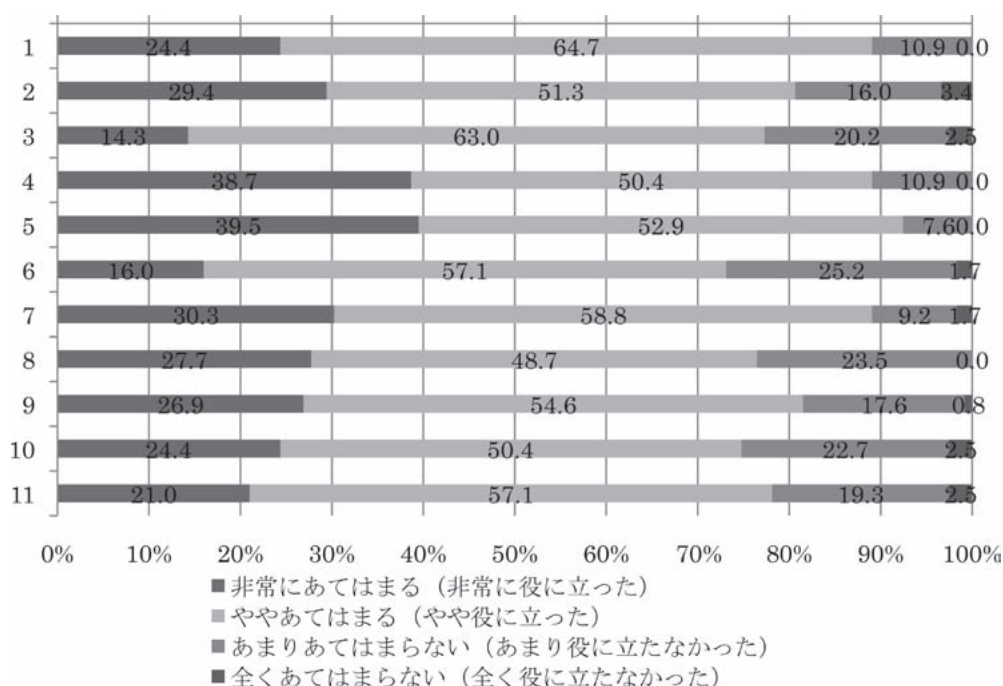
【概要】

管理栄養学科4年生119名（欠席者2名）を対象として、2017年3月1日（水）に実施した。

【設問】

1. 「講義」、「実習・実験」、「臨地実習」を組み合わせたカリキュラムによって、知識や技術の修得とともに、情報の収集とまとめ方、プレゼンテーション力及びコミュニケーション力、管理栄養士としての実践力を養うことができましたか？
2. 3年次の「専門演習」と4年次の「卒業研究」を通じて、研究テーマに関わる情報収集と知識の修得、研究手法と科学的考察を通じ、論文作成力などを養うことができましたか？
3. 4年次の「栄養総合演習」を通じて、管理栄養士に必要な知識と技術の総復習や横断的な知識及び応用力を強化することができましたか？
4. （知識・理解）4年間の学びを通じて、食と健康に関連する幅広い知識・技能を身につけ、それらの知識・技能を社会貢献のために発揮するための基盤を築くことができましたか？
5. 4の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？
6. （思考・判断）4年間の学びを通じて、健康で快適な暮らしを提案するために、食と健康に関連するさまざまな課題を的確に分析し、実践的かつ創造的に自らの見解を形成するための基盤を築くことができましたか？
7. 6の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？
8. （態度・志向性）4年間の学びを通じて、地域やコミュニティ、食品産業や医療・福祉現場などで、食と健康に関連するさまざまな問題に責任感を持って対処するための基盤を築くことができましたか？
9. 8の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？
10. （技能・表現）4年間の学びを通じて、さまざまなライフステージの人とのコミュニケーションを図ることができ、食と健康に関連した分野で高い専門性を発揮するための基盤を築くことができましたか？
11. 10の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？

【結果】



【まとめ】

「講義」、「実習・実験」「臨地実習」を組み合わせたカリキュラムでは、約9割弱が知識や技術をはじめ管理栄養士としての実践力を養うことができたと回答している。また、9割の学生が本学科4年間の学びを通じて、食と健康に関する知識で社会に貢献できる基盤を築けたと答えている。しかし、一方では3割の学生が、ここで得た知識や技術の専門性を色々な場で発揮するだけの基盤までにはなっていないと回答している。知識を得ても、それを如何に発揮するかは、学生自らが考え、行動し、経験することで得られる。今後は、卒業後の活動を視野に入れた幅広い取り組みが求められる。そのためにも、学内に留まらず、学外の方をも対象とした活動を通し、専門性を発揮する機会が必要と考えられる。

H28年度 生活環境デザイン学科 卒業時アンケート【%】

1. 専攻した分野のものづくりの実践を通して、快適な生活環境を創造することができる人材に、あなたはなれそうだと思いますか？

①なれそう	18.3	②ややなそう	66.2
③あまりなれそうにない	13.4	④全くなれそうにない	2.1
2. 生活環境について、生活者・消費者の視点をもとに、それを具体的なデザインとして提案・実践するための基本知識と技術を、身につけることができたと思いますか？

①できた	17.5	②ややできた	71.3
③あまりできなかった	11.2	④全くできなかった	0.0
3. 今後、豊かな教養と人間性を培いながら、生活環境の向上に貢献できそうですか？

①できそう	27.5	②ややできそう	64.1
③あまりできそうにない	8.5	④全くできそうにない	0.0
4. 生活環境を、生活者・消費者の視点から、科学的に探究することができるようになったと思いますか？

①なった	18.2	②ややなった	58.0
③あまりなっていない	23.1	④全くなっていない	0.7
5. 専攻分野について、その知識と技術を身につけ、具体的なデザインとして提案・実践することができるようになったと思いますか？

①なった	19.6	②ややなった	61.5
③あまりなっていない	18.2	④全くなっていない	0.7
6. 生活環境全般への幅広い視点を得たうえで、選択した分野において高度な専門知識を習得したと思いますか？

①修得した	18.2	②やや修得した	60.1
③あまり修得しなかった	21.7	④全く修得しなかった	0.0
7. 生活環境に関する諸問題に、修得した専門性を活かして創造的に取り組むことができると思いますか？

①できると思う	20.3	②ややできると思う	62.9
③あまりできない	16.1	④全くできない	0.7
8. ものづくりの喜びを感じながら、心地よい暮らしのデザインを、試行錯誤を重ねて提案できますか？

①できる	20.3	②ややできる	60.8
③あまりできない	17.5	④全くできない	1.4
9. 職業にとして必要な、生活環境に関する資格取得を可能にするような専門的技能を獲得し、豊かな表現力・企画力を身につけたと思いますか？

①身につけた	18.2	②やや身につけた	60.8
③あまり身につけなかった	18.9	④全く身につけなかった	2.1
10. 入学時に目指した資格や免許に必要な科目を、履修することができましたか？

①できた	44.1	②ややできた	39.9
③あまりできなかった	12.6	④全くできなかった	3.5
11. 本学科での4年間の学びは、あなたにとって充実したものでしたか？

①充実していた	50.0	②やや充実していた	43.0
③あまり充実していなかった	4.9	④全く充実していなかった	2.1
12. 本学科の4年間の学びに、あなたは満足していますか？

①満足している	42.7	②やや満足している	45.5
③あまり満足していない	11.2	④全く満足していない	0.7

13. 本学科の4年間の学びは、あなたの将来に役立ちそうですか？
- | | | | |
|------------|------|-----------|------|
| ①役に立つ | 38.0 | ②やや役に立つ | 52.1 |
| ③あまり役に立たない | 8.5 | ④全く役に立たない | 1.4 |
14. 大学生活全体は、楽しかったですか？
- | | | | |
|-------------|------|------------|------|
| ①非常に楽しかった | 60.8 | ②やや楽しかった | 33.6 |
| ③あまり楽しくなかった | 3.5 | ④全く楽しくなかった | 2.1 |
15. 本学科に愛着を感じますか？
- | | | | |
|----------|------|---------|------|
| ①非常に感じる | 37.8 | ②やや感じる | 51.0 |
| ③あまり感じない | 8.4 | ④全く感じない | 2.8 |
16. あなたは本学科で4年間、がんばって学んだと思いますか？
- | | | | |
|--------------|------|-------------|------|
| ①とてもがんばった | 42.3 | ②まあまあがんばった | 50.7 |
| ③あまりがんばらなかった | 6.3 | ④全くがんばらなかった | 0.7 |
17. 本学での学びは、あなたに自信をつけましたが？
- | | | | |
|---------------|------|--------------|------|
| ①とても自信がついた | 33.6 | ②まあまあ自信がついた | 54.5 |
| ③あまり自信がつかなかった | 11.9 | ④全く自信がつかなかった | 0.0 |
18. 本学科の4年間の学びについて、ご自由にご意見・ご感想をお書き下さい

Ⅳ. 2 国際コミュニケーション学部

堀田あけみ

はじめに

筆者は、過去4年間にわたり、学部FD委員会を務めた。そのうち、3年間を使って、卒業生を対象とした外国語科目の満足度調査を実施した。ここに、3年間のまとめを記す。

国際コミュニケーション学部では、英語教育の更なる充実を目的とし、カリキュラムの捩入れを行った。3年前のことである。そこで、卒業を機に、英語の習得がどの程度のレベルに達しているのか、それは期待通りなのか、主にどのような能力が身についたと感じられるか、といった点について尋ね、具体的に良いと思った授業、このような授業があると望ましいといった点についても尋ねた。

年を追うにつれて、能力の伸びの実感、満足度ともに、上昇して行く、という仮説が検証されることを願っての実施であったが、早々に結果を大きくまとめると、初年度からいきなりの高評価で、完全に天井を突き、その後、伸びようがなかった。それはそれで、ほとんどの学生が言語教育に満足して卒業していくという望ましい結果であると言える。

3年間の調査の結果から幾つかのトピックをピックアップして、考察する。

1. 二つの学科における外国語の位置付け

国際コミュニケーション学部には二つの学科がある。国際言語コミュニケーション学科（通称：言語）と表現文化学科（通称：表現）である。学部の特徴として、二つの学部が重なっている部分が多い、という点が挙げられる。ゼミも、他学科の教員を選択することが可能である。高校生向けの各種説明会も、2学科合同で行われている。

学生の立場で考えると、一番大きな違いは、必修となる外国語が言語では2種（英語と独語、もしくは英語と仏語）、表現では1種（英語、独語、仏語のうちいずれか）である点かもしれない。しかし、表現の学生も2種を選択することができる。実状として、言語を第一希望、表現を第二希望とした学生が多数表現に入学しているが、特にストレスを感じることなく、言語学科の学生とほぼ同様の学修が可能である。

言語を希望する学生は、ほとんどが英語の学修が一番の関心事としている。一方、表現を希望する学生は興味の対象の幅が広い。入学時には、外国語の習得にそれほど熱心ではない学生も多く存在する。

それらを考慮した上で、学科ごとに異なる調査用紙を作成した。

2. 国際言語コミュニケーション学科の調査項目

言語では、英語のみを調査の対象とした。まず、4年間でどのレベルまでの能力が身についたかを「研究に役立てる」「日常生活で苦労しない」「旅行のときに役に立つ」「あまり身につかなかった」で、自己評価した。更に、「読む」「書く」「話す」「聞く」のどの能力が伸びたかの自己評価、国コミで受けた英語教育が期待に対してどのようなものだったか、具体的に役に立ったと思われる授業は何か、こんな授業があったら良いという希望があれば挙げて欲しい、といった構成であった。

3. 表現文化学科の調査項目

表現においては英語は必修ではない。そこでまず、英語・仏語・独語に加えて、外国語A・Bの4単位で教えられるスペイン語・中国語も含めて、学修した外国語の種類を尋ねた。その中から、主に学んだのは言語を選択し、言語に準ずる項目、「どの程度身についたか」「具体的に役に立った授業は何か」「こんな授業があったら良い」を尋ねた。

4. 国際言語コミュニケーション学科における英語学修

前述の通り、言語においては英語は必修であるのと同時に、ほとんどの学生にとっての最優先事項である。そもそも、学生のニーズに合わせて、英語科目を再構成した効果を見るために調査を企画した。仮説としては、満足度も習得の度合いも、年を追うにつれて上昇していく、というものを設定した。

初年度から、それは検証されないであろうという結果になった。卒業式に実施というシチュエーションから、御祝儀相場ともいうべき、高い値が出てしまったからである。完全に天井についてしまって、今後、有意な差が見られるような上昇は望めない状況になった。実際に、年を追っての有意な差は出ていない。数値だけでいうと、2年目が最も低かったが、ほとんど差はないと言ってよい結果である。

しかし、3年ともほとんどの学生が「日常生活で苦労しない」以上を選択するという評価を選択したということは、英語教育の成果の大きさを表していると言えよう。

5. 表現文化学科における外国語学修

表現において、入学時における外国語への意欲は、当然のことながら、言語の学生のそれと比較して、高いものではない。表現を希望する理由が、英語が苦手だから、という学生もいる。さらに、一部で極端な二つの形を示す。言語が第一希望だった学生の、英語に特化された高い意欲と、表現が第一希望だった学生が独語や仏語の習得によって、それらの言語に対する意欲を高めたものである。

英語に関する習得の度合いは、言語ほど高くない。それでも、旅行に行って困らないレベルに達している学生がほとんどである。こちらでも、年を経るの有意な変化は見られなかった。

主に学んだ外国語を独語・仏語とした学生数は、各年度とも10名前後である。習得の度合いは、英語より更に低い。しかし、満足度に関しては、それほど低くない。

実際に、表現の学生がドイツやフランスに留学するケースも多いことを考えると、表現の学生は外国語を学ぶと同時にその国の文化を学び、それに興味を持つという、いわば表現文化学科らしい学修をしていると考えられる。

6. 評価の高い授業

「役に立った授業は何か」との質問に対する回答として、3年間を通じて圧倒的に多かったのは「Communicative English」である。これは、初年度の必修科目である。しかし、それ以上に意味を持つのは、毎日、続けられる授業だということであろう。本学部に入學した、言語の学生および英語を選択した表現の学生は、いきなり連日のall Englishの授業（しかも、毎日宿題付き）で、英語の嵐に晒されることになる。この経験は、新入生にとっては大きな衝撃であろう。しかし、これを経ることで、英語の力がどんどんついていくので、「役に立った」という実感が得られるのだらうと思われる。また、一番力を入れている科目でもあるので、この評価は教員と学生の、需要と供給が一致していると考えてよいであろう。全体の評価の高さも、ここに起因していると思われる。

また、「Newsweekを読む」の評価も高かった。「英語の力がつくと同時に、社会的な知識も身につく」「馴れると意外と速く読めた」「頑張っている実感があった」といった理由で、実用性が重視されているようである。

仏語においては、マルコ・ソッティーレ先生の授業が「丁寧でわかりやすい」「難しいことをうまく説明してくれる」と、複数の学生から評価されていた。独語においては、木村クリスタ先生の「総合ドイツ語」が、「名前の通りの幅広い内容」「本当に役に立つ」「ドイツのことがすごくよくわかる」と高評価であった。外国語を教えるにあたり、文化も共に教えること、また、日本語と日本文化にも造詣が深い教員に教えてもらうことが、これまで馴染みのなかった外国語を学ぶ際には、重要なものかもしれない。

「海外演習」つまり留学をあげる学生も毎年見られた。入学前の関心も、留学に対しては非常に高く、オープンキャンパスや説明会でも、質問のほとんどが留学に関するものである。それを思えば、少ないとも言えるが、そもそも留学を科目であると考えていない可能性も高いので、そのためであろう。

7. こんな授業があるといい

「こんな外国語の授業があるとよい」と望まれているのは、まず、それぞれの興味のある外国語で、現在、開講されていないものである。初年度は、韓国語が圧倒的に多かったが、これは後にカリキュラムに反映されたため、以降は、ポルトガル語・フィンランド語・イタリア語といった言語が散見されるが、いずれも多数派にはなっていない。

その他、「会話の力をつける時間がもっとあってよい。読み書きに重点がおかれている感じ」「英語を使って、何かするのがいい。映画を作るとか。英語プラス何か」「英語を勉強するのではなく、英語で何か勉強する時間がもっとあってよい」といった意見もあった。英語の会話力をもっと身につけたいとの思いと、英語を応用する力を身につけたいとの思いが伺われた。

これらの意見は今後のカリキュラムの構成の参考になり得るであろう。

まとめ

3年間にわたる調査に、大きな変動はなく、当初期待した結果とは言い難い。しかし、全体に非常に高い評価が得られたことは事実である。また、入学前の期待にも十分応えることができている点を確認できたことは、収穫と言ってよいだろう。

自由記述で書かれていた希望も、「こういう勉強をしたかったのに、できなくて残念だった」というよりは、「こういう科目があれば、後輩がより充実した学修をできると思う」といったニュアンスで書かれており、卒業を目前にしてなお、前向きな意欲を感じることができた。

学生たちの大学への思いは、設問に対する答えより、欄外に書かれていた幾つかのコメントにこそ、強く表れていたのかもしれない。

「ここで過ごした4年間は、私の人生の宝です」

「英語もそうですが、もっと大切なことを教えてもらいました」

「楢山最高！ 先生大好き！」

卒業を前にして、感情が昂っていたであろうことは推測できる。また、マイナスの評価を持つ学生は、わざわざ自発的にこういったことを書かないのかもしれない。それでも、自らこういった声を届けたいと思う学生がいるというのは教育の成果としては評価されてよいものであろう。

語学教育は、コミュニケーションの為だけのものではない。学問をより深める為の手段でもあることを、学生が十分に理解していることも伺える結果となった。

IV. 3 人間関係学部

1. 本年度のFD活動の特徴

平成28年度人間関係学部の日常的教育研究活動以外の組織活動は、平成29年度から実施するカリキュラム改革等の学部改革の準備が主要部分を占めており、FDに特化した活動は行っていない。しかし、カリキュラム改革等のひとつの狙いであった学生の学部での勉学により一貫性と体系性をもたらすカリキュラムの再編、さらにそうした学生の勉学を効果的に支援するシステムとしての教員配置や教育体制の再編、は学部組織としての教育能力のさらなる向上を企図したものであり、その意味でまさにこの再編作業そのものがFD能力の向上を目指した組織活動であると考ええる。

2. 学部FD活動の概要

本報告では上記の観点に立って、平成28年度のカリキュラム改革の活動の経緯を報告する。カリキュラム改革は、平成24年度から引き続き活動していた将来計画委員会を中心に企画実施された。本年度は11回の委員会が開催された。その概要を記す。

平成28年度第1回将来計画委員会

4月19日開催

議題等；3ポリシー、開講科目リストの確認と調整等

平成28年度第2回将来計画委員会

5月2日開催

議題等；3ポリシー確認、モジュールにおけるコア科目の選択等

平成28年度第3回将来計画委員会

5月17日開催

議題等；モジュール制度の設計にかかる検討

平成28年度第4回将来計画委員会

6月7日開催

議題等；モジュール名称、学則科目リスト、卒論指導体制等検討

平成28年度第5回将来計画委員会

6月21日開催

議題等；学科間教員移動、科目名変更、開講科目リスト新旧対照表検討等

平成28年度第6回将来計画委員会

7月5日開催

議題等；学部履修規準案、学則変更案、星ヶ丘との協議案検討等

平成28年度第7回将来計画委員会

7月19日開催

議題等；教員持ち駒数の調整等

平成28年度第8回将来計画委員会

9月6日開催

議題等；学則改正および履修規準改正最終案の検討等

平成28年度第9回将来計画委員会

9月20日開催

議題等；学部共通科目名称変更修正等

平成28年度第10回将来計画委員会

10月4日開催

議題等；履修の手引き、ガイダンス文書作成、オムニバス科目調整会議等

平成28年度第11回将来計画委員会

10月25日開催

議題等；学部運営体制について

3. 新カリキュラム等学部改革におけるFD改善点と課題

今回の学部改革においてFDに寄与すると期待されるポイントは3点に集約できる。

まず第1に、カリキュラムにモジュール制度を導入することによってカリキュラムの構造をより明確にしたことである。学生からみて各科目が学修テーマという観点からどのように位置づけられているかをより明確にすることによって、学生の学修テーマに沿った系統的学習を促進することが期待できるということである。

第2に、モジュール制度に対応した教員の指導責任体制を明確化したことである。教員を各モジュール単位でグループ分けし、モジュールの学修テーマに志向した集団指導体制を構築することによって、教員による学生に対する学修支援を制度的・集団的に強化することが期待できるということである。また卒業論文作成指導という最終的かつ総括的学修支援活動もこの制度的枠組みに位置づけることによって一貫した学部教育の体系的教育能力をさらに向上させることが期待される。

第3に、学部の運営について学部長を補佐する組織として学部運営会議を制度化したことが挙げられる。本来、学部のFD活動は学部教育活動の一貫として総合的かつ継続的に推進されるべきものであるが、これまでの学部運営体制ではそうしたFD活動は困難な状況であった。継続的に活動する学部運営組織ができることによってそうした状況が打破され、総合的配慮のもとで継続的にFD活動が行える組織体制が整ったと考えることができる。

今後の課題は、制度として整備したこれらの仕組みを、次年度以降の学部教育活動において、FD活動という観点からみても実効性のある形で、現実に効果的に運用していくことである。

4. モジュールの概要と科目リスト

(人間関係学部の履修の手引 p2-26 から p2-38 までは資料として掲載)

履修ガイド モジュールと履修証明	人間関係学科	学科	モジュール名	モジュールの概要
			文化の多様性	文化とは人びとが共有する生活様式や考え方を指しています。世界の人びとは、長い歴史をかけて接触変容を繰り返しながらそれぞれの文化を築いてきました。その結果として、多様な文化が形作られたのです。しかし、世界的なグローバル化の波は、文化の多様性を失わせて一様化へと進めようとしています。同時に文化間葛藤も見逃すことができません。ここでは、文化の多様性について学ぶと共に、世界で起きているさまざまな葛藤について学び、現代に生きる私たちのあり方について考えます。
			家族と暮らし	家族は身近な存在でありながら、ひとりひとりによって家族観はさまざまです。技術の進展や労働環境などの社会環境の変化や、人権意識の高まりなどにより、家族の結びつきやその機能、そして近隣関係も変化しています。現代社会において、家族は個人化、ネットワーク化が進行し、多様化しています。また、私たちは手軽で便利で取り替え可能なファストな暮らしに馴染んでいます。一方で、手間がかかり煩わしいけれども支え合う顔の見えるコミュニティにあたたかさを感じます。現代社会で「家族する」ことの意味を考えます。
			社会と福祉	今日の多様化、複雑化する現代社会において「生活上の生きづらさ」はもはや誰にでも起こり得ることです。人として生きる権利が貧困、孤立、非行、差別、虐待、暴力、搾取等によって簡単に脅かされてしまうのです。社会と福祉では、こうした社会生活を営む上で生じる問題の背景に加え、どのような制度やサービスを活用しながら、どう支援していくのかについて学びます。それは一方で、自分では気づかない、気づこうとしなければ見えてこない「しあわせとは何か」を知る手がかりを学ぶことにもなるでしょう。
			若者と居場所	近年、子ども・若者の居場所や地域の居場所といった言葉を耳にするようになりました。現代社会において居場所づくりや居場所探しが語られるのは、学校、労働、地域などさまざまな場面で人々の生き方やアイデンティティを支える人間関係や空間がゆらぎつつある現実を示しています。ここでは、教育、福祉、地域、家族、労働、情報社会といった複合的視点から、「居場所が求められる社会的背景とは何か?」「子ども・若者にとっての居場所の意味とは何か?」を考え、これからの社会にとっての居場所のあり方を構想することを目指します。
	人間関係学科及び心理学		子どもと子育て	夫婦共働きによる保育ニーズの増加や待機児童問題、シングル・ペアレントの増加、家庭における生活様式や子育ての多様化など、子どもを取り巻く環境はますます複雑化し、様々な課題に直面しています。現代社会において、親になるというライフスタイルを選ぶか否かにかかわらず、あるいは、保育者になるか否かにかかわらず、次の世代を担う子どもたちとの関係について考えることは避けて通ることはできません。子育てをめぐる課題と可能性について考えます。
			生 / 性の多様性	現代社会は、選択の連続です。社会や他者が期待する役割をどう受け止めて、どう実践するか、いかに自らの生（ライフスタイル）を築いていくか、さまざまな葛藤や快楽の形があります。性（ジェンダー・セクシュアリティ・セックス）についても多様です。どのような人を好きになり、どのような形のパートナーシップを築いていくか、それらのスタイルは多様化しています。自分の人生の主人公になるために、生 / 性の多様性について学び、納得できる自分の生き方を探求します。
			女性と職業キャリア	職業キャリアとは、単に職種や職位を示すものではなく、そこでの経験や意味づけを含めた主体的で、生涯にわたる営みを示します。女性の職業キャリアは、これまでの男性中心の労働社会では、その形成が難しい側面もありました。しかし、現在は女性も積極的に参画・活躍していく社会に変化しつつあります。学生時代に今後の女性の働き方について考えることは、自身のキャリア形成につながるのみならず、社会への新しい提言になります。このような考え方にに基づき、未来創造的な働き方について考えます。
			人間の多様性	「人間とは何か」という人類最大と言ってもよい謎に対して、さまざまな視点からアプローチを試みます。具体的には、人類の遠い親戚である類人猿との比較を試みたり、古代の文学や現代の外国文学を参照したり、あるいは「生とは何か?」「死とは何か?」といった問いを考えたり、身体と精神との関係性を捉え返してみたりしながら、それこそ多様なアプローチで検討します。私たちはみな同じ「人間」でありながら、誰一人として同じ「ひと」ではありえないのです。このような存在の奇跡についてともに考えます。

学科	モジュール名	モジュールの概要
心理学科	認知と行動	認知とは世界を認識するための情報処理プロセスで、外界に向けて開いた「心の窓」とも言えます。しかし「心の窓」は見えないので、観察可能な行動を通して科学的にアプローチします。人間の心の3つの側面、すなわち「知的行動」、「感情」、「意志」の意味とメカニズムの理解をめざして、日常的な行動の背後にある心のしくみ、心と身体との関係、コミュニケーションの機能と情報伝達、さらには社会や文化の中の行動について学び、実証的方法によるアプローチを考えます。
	発達臨床	発達臨床とは、乳幼児期から老年期までの生涯にわたる人間の発達という視点をもちながら、臨床的な実践や支援を検討することを示します。スクールカウンセラーなど教育領域での臨床は高い関心をもたれていますが、幼稚園や保育所のような福祉や、母子保健のような地域における臨床などさまざまな領域で人の発達を理解し、支援する視点が求められるようになっていきます。心理学のなかでも、認知・パーソナリティ・家族やその他の人々との対人関係など多面的に発達を概観し、ニーズのある人々を支援するための技法などについて学びます。
	心理臨床と医療	心理臨床とは、人が生きていく上で生じる悩みや不安、問題に対して、発達やパーソナリティなどの心理学、生理学や精神医学などをふまえて理解するとともに、こうした心の問題を抱える人に対して、対人的なかかわりを通して援助をすることを示します。現代は、さまざまな情報が氾濫し、子どもから大人までさまざまなストレスに直面し、不適応に陥る人が増えています。このような現代社会における「心の病」に対する心理学的な理解と、それをふまえてさまざまな検討されてきた臨床現場における援助の技法について学びます。

(1) 文化の多様性

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	青少年論A	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		現代社会論	2		
		現代文化論	2		
		文化人類学	2		
		比較文化論	2		
		生命倫理学	2		
	展 開 科 目	乳幼児心理学A	2	8単位以上 選択履修	
		人間形成の思想	2		
		子どもと遊び	2		
		高等教育論	2		
		非行問題	2		
		社会福祉論A	2		
		地域社会論	2		
		地域社会と人間	2		
		産業と労働	2		
		社会の理論	2		
		社会調査論	2		
		社会調査の技法	2		
		フィールドワーク論	2		
		地球環境と人間	2		
		生命科学と人間	2		
		エスニシティ論	2		
		情報倫理学	2		
		メルヘンと人間	2		
		現代フランスの社会と文化	2		
		英米児童文学の世界	2		
		映画のドイツ語	2		
		メディアに見るフランス	2		
		スポーツ文化論	2		
		生涯スポーツの方法と技術	2		
		臨床哲学	2		
		女性とライフステージ	2		
		女性と社会A	2		
ジェンダー・セクシュアリティ論A	2				
ジェンダー・セクシュアリティ論B	2				
産業心理学	2				
社会心理学	2				
比較行動学	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文	8	8単位必修		

(2) 家族と暮らし

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	家族社会学	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		学校と社会	2		
		地域社会論	2		
		地域社会と人間	2		
		社会の理論	2		
		現代社会論	2		
		ライフスタイル論	2		
		生活意識論	2		
		社会心理学	2		
	展 開 科 目	親子関係論	2	8単位以上 選択履修	
		現代日本の教育	2		
		生涯学習論	2		
		公的扶助論	2		
		高齢者福祉論	2		
		介護概論	2		
		医学知識	2		
		就労支援	2		
		保健医療	2		
		社会学概論	2		
		組織と人間	2		
		社会調査論	2		
		生命科学と人間	2		
		エスニシティ論	2		
		情報科学と人間A	2		
		情報倫理学	2		
		人間の歴史	2		
		生命倫理学	2		
		生涯スポーツの方法と技術	2		
女性とライフステージ	2				
余暇とスポーツ	2				
犯罪心理学	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文		8	8単位必修	

履修ガイド

モジュールと履修証明

(3) 社会と福祉

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	社会福祉論A	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		ソーシャルワーク論A	2		
		ソーシャルワーク論B	2		
		ソーシャルワークA	2		
		ソーシャルワークB	2		
		地域社会論	2		
	展 開 科 目	青少年論B	2	8単位以上 選択履修	
		子育ての心理学	2		
		非行問題	2		
		社会福祉論B	2		
		地域福祉の方法	2		
		社会保障論A	2		
		社会保障論B	2		
		公的扶助論	2		
		福祉行財政と福祉計画	2		
		福祉サービスの組織と経営	2		
		子ども・家庭福祉論	2		
		高齢者福祉論	2		
		障害者福祉論	2		
		ソーシャルワークC	2		
		ソーシャルワークD	2		
		介護概論	2		
		医学知識	2		
		就労支援	2		
		権利擁護と成年後見	2		
		更生保護	2		
		保健医療	2		
		社会学概論	2		
		家族社会学	2		
		社会の理論	2		
		社会調査論	2		
		社会調査の技法	2		
		生活意識論	2		
ジェンダー・セクシュアリティ論B	2				
心理学概論	2				
障害者心理学	2				
青年心理学	2				
産業心理学	2				
成人心理学	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文	8	8単位必修		

(4) 若者と居場所

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	青少年論A	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		青少年論B	2		
		現代教育論	2		
		教師の世界	2		
		非行問題	2		
		子ども・家庭福祉論	2		
		家族社会学	2		
		学校と社会	2		
		地域社会と人間	2		
		現代文化論	2		
	展 開 科 目	子ども論	2	8単位以上 選択履修	
		親子関係論	2		
		子育ての心理学	2		
		現代日本の教育	2		
		生涯学習論	2		
		高等教育論	2		
		社会福祉論A	2		
		公的扶助論	2		
		就労支援	2		
		更生保護	2		
		地域社会論	2		
		社会の理論	2		
		現代社会論	2		
		社会調査論	2		
		社会調査の技法	2		
		フィールドワーク論	2		
		情報科学と人間A	2		
		文化人類学	2		
		情報倫理学	2		
		臨床哲学	2		
		ライフスタイル論	2		
		女性とライフステージ	2		
		女性と社会A	2		
女性と職業生活A	2				
青年期の進路選択	2				
ジェンダー・セクシュアリティ論A	2				
学校臨床心理学	2				
青年心理学	2				
犯罪心理学	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文	8	8単位必修		

履修ガイド

モジュールと履修証明

(5) 子どもと子育て

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	乳幼児心理学A	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		乳幼児心理学B	2		
		子ども論	2		
		子どもと遊び	2		
		幼児教育論	2		
		親子関係論	2		
		子育ての心理学	2		
		子ども・家庭福祉論	2		
		発達心理学	2		
		発達臨床心理学	2		
	展 開 科 目	人間形成の歴史A	2	8単位以上 選択履修	
		人間形成の歴史B	2		
		保育論	2		
		青少年論A	2		
		青少年論B	2		
		現代教育論	2		
		現代日本の教育	2		
		非行問題	2		
		家族社会学	2		
		学校と社会	2		
		地域社会論	2		
		社会調査論	2		
		社会調査の技法	2		
		生命倫理学	2		
		ライフスタイル論	2		
		女性とライフステージ	2		
		生活意識論	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論A	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論B	2		
		女性史	2		
		心理学概論※	2		
		性格心理学	2		
学校臨床心理学	2				
青年心理学	2				
成人心理学	2				
比較行動学	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文	8	8単位必修		

※「心理学概論」は人間関係学科の学生のみモジュール展開科目の単位として認定されます。

(6) 生／性の多様性

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	生命倫理学	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		身体としての人間	2		
		ライフスタイル論	2		
		女性とライフステージ	2		
		女性と社会A	2		
		女性と社会B	2		
		女性と職業生活A	2		
		女性と職業生活B	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論A	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論B	2		
	展 開 科 目	乳幼児心理学A	2	8単位以上 選択履修	
		子ども論	2		
		青少年論A	2		
		親子関係論	2		
		現代教育論	2		
		生涯学習論	2		
		社会福祉論A	2		
		子ども・家庭福祉論	2		
		医学知識	2		
		家族社会学	2		
		地域社会論	2		
		現代社会論	2		
		文化人類学	2		
		比較文化論	2		
		スポーツ文化論	2		
		生涯スポーツの方法と技術	2		
		人間環境論	2		
		生活意識論	2		
		女性史	2		
		心理学概論※	2		
		メンタルヘルス	2		
		性格心理学	2		
		発達心理学	2		
		青年心理学	2		
		産業心理学	2		
		社会心理学	2		
		比較行動学	2		
		発達臨床心理学	2		
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文	8	8単位必修		

※「心理学概論」は人間関係学科の学生のみモジュール展開科目の単位として認定されます。

(7) 女性と職業キャリア

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	産業と労働	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		生涯スポーツの方法と技術	2		
		ライフスタイル論	2		
		女性と職業生活A	2		
		女性と職業生活B	2		
		青年期の進路選択	2		
		産業心理学	2		
	展 開 科 目	青少年論A	2	8単位以上 選択履修	
		青少年論B	2		
		社会福祉論A	2		
		社会福祉論B	2		
		社会保障論A	2		
		社会保障論B	2		
		就労支援	2		
		地域社会論	2		
		地域社会と人間	2		
		組織と人間	2		
		エスニシティ論	2		
		生命倫理学	2		
		現代フランスの社会と文化	2		
		女性とライフステージ	2		
		女性と社会A	2		
		女性と社会B	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論A	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論B	2		
		余暇とスポーツ	2		
		女性史	2		
		メンタルヘルス	2		
		性格心理学	2		
		障害者心理学	2		
		行動心理学	2		
青年心理学	2				
学習心理学	2				
社会心理学	2				
成人心理学	2				
認知心理学A	2				
心理検査法	2				
対人関係の心理学	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文	8	8単位必修		

(8) 人間の多様性

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	乳幼児心理学A	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		地域社会と人間	2		
		生命科学と人間	2		
		文化人類学	2		
		生命倫理学	2		
		英米児童文学の世界	2		
		身体としての人間	2		
	展 開 科 目	乳幼児心理学B	2	8単位以上 選択履修	
		人間形成の歴史A	2		
		人間形成の歴史B	2		
		人間形成の思想	2		
		教師の世界	2		
		非行問題	2		
		組織と人間	2		
		地球環境と人間	2		
		エスニシティ論	2		
		情報科学と人間A	2		
		情報科学と人間B	2		
		人間の歴史	2		
		メルヘンと人間	2		
		臨床哲学	2		
		ライフスタイル論	2		
		女性とライフステージ	2		
		女性と社会A	2		
		女性と社会B	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論A	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論B	2		
		性格心理学	2		
		障害者心理学	2		
		青年心理学	2		
		社会心理学	2		
		犯罪心理学	2		
成人心理学	2				
比較行動学	2				
認知心理学A	2				
対人関係の心理学	2				
表象文化の中の人間	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文	8	8単位必修		

履修ガイド

モジュールと履修証明

(9) 認知と行動

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	比較行動学	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		社会心理学	2		
		対人関係の心理学	2		
		認知心理学A	2		
		認知心理学B	2		
	展 開 科 目	青年心理学	2	8単位以上 選択履修	
		教育心理学	2		
		発達心理学	2		
		性格心理学	2		
		人間環境論	2		
		成人心理学	2		
		乳幼児心理学A	2		
		乳幼児心理学B	2		
		家族心理学A	2		
		臨床心理学A	2		
		臨床心理学B	2		
		産業心理学	2		
		犯罪心理学	2		
		学習心理学	2		
		生理心理学	2		
		行動心理学	2		
		身体としての人間	2		
		スポーツ文化論	2		
		生涯スポーツの方法と技術	2		
		精神医学	2		
		心理調査概論	2		
		社会福祉論A	2		
		社会福祉論B	2		
		文化人類学	2		
		社会調査論	2		
		フィールドワーク論	2		
		比較文化論	2		
マスメディア論	2				
コミュニケーション論	2				
現代教育論	2				
医学知識	2				
人間の歴史	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文		8	8単位必修	

(10) 発達臨床

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	教育心理学	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		発達心理学	2		
		障害者心理学	2		
		発達臨床心理学	2		
		臨床心理学A	2		
	展 開 科 目	性格心理学	2	8単位以上 選択履修	
		比較行動学	2		
		成人心理学	2		
		乳幼児心理学A	2		
		乳幼児心理学B	2		
		子ども論	2		
		親子関係論	2		
		子育ての心理学	2		
		青少年論A	2		
		青少年論B	2		
		子どもと遊び	2		
		臨床心理学B	2		
		メンタルヘルス	2		
		心理検査法	2		
		学校臨床心理学	2		
		心理療法A	2		
		心理療法B	2		
		精神分析	2		
		非行問題	2		
		行動心理学	2		
		対人関係の心理学	2		
		精神医学	2		
		心理調査概論	2		
		社会福祉論A	2		
		社会福祉論B	2		
		現代教育論	2		
		現代日本の教育	2		
		子ども・家庭福祉論	2		
医学知識	2				
学校と社会	2				
人間の歴史	2				
女性とライフステージ	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文	8	8単位必修		

履修ガイド

モジュールと履修証明

(11) 心理臨床と医療

学則 区分	モジュール 区分	授 業 科 目	単位数	備 考	
発 展 科 目	主 要 科 目	青年心理学	2	6単位以上 選択履修	20単位以上 選択履修
		臨床心理学B	2		
		メンタルヘルス	2		
		心理検査法	2		
		精神医学	2		
	展 開 科 目	教育心理学	2	8単位以上 選択履修	
		発達心理学	2		
		性格心理学	2		
		障害者心理学	2		
		成人心理学	2		
		乳幼児心理学A	2		
		乳幼児心理学B	2		
		親子関係論	2		
		子育ての心理学	2		
		青少年論A	2		
		家族心理学B	2		
		臨床心理学A	2		
		産業心理学	2		
		犯罪心理学	2		
		学校臨床心理学	2		
		心理療法A	2		
		心理療法B	2		
		精神分析	2		
		ライフスタイル論	2		
		家族社会学	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論A	2		
		ジェンダー・セクシュアリティ論B	2		
		非行問題	2		
		学習心理学	2		
		対人関係の心理学	2		
		生命倫理学	2		
心理調査概論	2				
社会福祉論A	2				
社会福祉論B	2				
医学知識	2				
青年期の進路選択	2				
演習 科目	ケースメソッド	1	2単位以上選択必修		
	演習	1			
卒業 論文	卒業論文	8	8単位必修		

IV. 4 文化情報学部

学部FD委員 谷口俊治・小田切和也

平成28年度における文化情報学部のFD活動は、下記の計画を実行した。

成果物は全100ページの冊子であり、名称:平成28年度文化情報学部FD活動卒業研究関連授業の振り返り、編集:谷口俊治・小田切和也、発行:椋山女学園大学文化情報学部として平成29年3月22日に刊行された。

平成28年度文化情報学部FD活動計画

1. 題目: 卒業研究ゼミの点検と評価
2. 目的: 卒業研究指導1、卒業研究指導2、および卒業研究について、担当教員とゼミ生が点検と評価を行い、学部教育の改善のための資料とする。
3. 方法: 以下の事項について、教員と学生それぞれが自身で点検をし、評価を行う。
 - (1) 教員の視点による点検と評価（数ページ以内 構成、図表、写真の掲載は自由）

卒業研究指導1から卒業研究にいたる教員の指導プロセスを点検する。点検内容は、ゼミの選択方法、ゼミの内容、教員から見た学生の取組姿勢、卒業研究のテーマ、達成度等とする。評価は、点検結果に基づいた学修成果の確認と改善すべき点の検討等とする。
 - (2) 学生の視点による点検と評価（一ゼミ数ページ以内 単名・連名、実名・匿名、構成、図表、写真の掲載は自由）

卒業研究指導1から卒業研究にいたる学生の取り組みを点検する。点検内容は、ゼミの選択方法、ゼミの内容、意欲、卒業研究完成までの経緯等とする。評価は、卒業研究完成後の達成度の確認と改善点等とする。
4. その他の資料

卒業研究関連科目の各学科の実施概要（卒業研究指導1の履修調整手続き、卒業研究発表会等）は、資料として別途収録する
5. 報告書の書式等

段組み、フォント種・サイズ、目次構成などは、原稿が揃ってから可能な範囲で調整する。
6. 記録と保存および公開:

学部FD活動の成果としては、冊子形式で100部印刷し、各教員に1部配布する。学生への呈示の有無、方法は各教員が決める。同冊子はPDFとしても配布する。

以上

IV. 5 現代マネジメント学部

第2節：現代マネジメント学部 主任 和久 豊

その他：現代マネジメント学部 教務委員会FD委員 石井雅治

1. 現代マネジメント学部におけるFD活動

現代マネジメント学部における独自のFD活動は、①「学生生活評価アンケート」の実施、②「教育研究報告」の発行から成る。

平成26年度まではこれらに加え、現代マネジメント研究会（FD講演会）が行われてきたが、平成27年度以後は予算が下りず実施できなかった。他は前年度と同様の内容が実施された。

本報告では、「教育研究報告書」に記載された、「平成28年度本学部教員の教育研究活動について」と「学生生活評価アンケート」の実施結果概要を報告する。

2. 平成28年度本学部教員の教育研究活動について

はじめに、今年度の本学部の教育活動をふりかえる。カリキュラムに関しては、平成25年度からスタートした経営関連科目の充実を図った新カリキュラムが4年次まで進行し完成年度を迎えた。また、本学部の上に設置された大学院現代マネジメント研究科も3年目を迎え、修了生を引き続き輩出しているが入学生が定員に満たないなど課題を残している。

一方、イベントとしては、学部開設10周年記念事業として着手したビジネスプラン・コンテストも第4回として引き続き実施することができた。特にビジネスプラン・コンテストについては、学内外から多数の応募があり、応募総数は高等学校の部、大学の部を合わせて46件に達した。応募数は昨年度に比べて減少したが、発表内容は昨年度に比べ一層レベルアップしており、本学部の特色ある取り組みとして、今後も継続できることを願いたい。また新たな取り組みとして学生ピアサポート「チーム・レナータ」が学生控室改修を機に発足し、就職壮行会やディベート体験、クリスマスイベントなどの取り組みを学生自ら進めており、アクティブ・ラーニングが浸透している様子が伺える。

次に、研究活動を総括する。上記のような教育活動と併せて、今年度、本学部教員（教授8名、准教授10名、講師2名の合計20名）による研究活動は、下表のように実施された。「著書・学術論文」が年々減少し、「特許・その他」「著書等」も昨年度に比べて減少している点が懸念される。外部資金の獲得を目指す全学的な動きを受け、本学部においても学外の研究助成金の獲得件数はほぼ昨年度並みの件数を維持している。研究活動を活性化させる必要があるとともに、専門分野による違いもあるであろうが、教員間の個人差が依然として大きい。

本学部では、学部の専門性を生かし、就職活動に強い学生を育成することを目指して、アクティブ・ラーニングをはじめ、企業や行政等と連携した教育研究を展開している。今後も学部の総力を挙げて、その取り組みを充実させ、学部の独自性を堅持していきたい。

「教育研究報告」にみる学部教員の研究活動の推移（過去3年間を基本とする実績）

項 目	第1回教育研究報告 (平成14年度)	第14回教育研究報告 (平成27年度)	第15回教育研究報告 (平成28年度)
著 書・学 術 論 文	7.6編	3.7編	2.9編
特 許・そ の 他	4.1編	5.3編	7.5編
著 書 等 小 計	11.7編	9.0編	10.0編
研究助成金（学内）	1.6件	0.4件	0.3件
研究助成金（学外）	0.4件	1.5件	1.1件
研究助成金 小 計	2.0件	2.2件	1.4件
所 属 学 会	4.4件	6.0件	4.0件
学 外 委 員	0.5件	2.7件	2.0件

〈注〉1. 表中の数字は教員1人当たりの数字である。

2. 「第1回教育研究報告（平成14年度）」は本学部の前身である生活社会科学科の最終年度のものである。

3. 学生生活評価アンケート（第15回）：概 要

調査期間：

平成28年12月2日（金）～12月22日（木）

調査対象：

相山女学園大学 現代マネジメント学部 在学生690名（休学除く）

（1年生180名、2年生188名、3年生148名、4年生174名）

回答数：546名、回答率79.1%

調査目的：

全学FD（ファカルティ・デベロップメント：教員の教育能力の向上）活動の一環として、現代マネジメント学部の学生が本学での生活をどのように受け止めているかを調査した。今回も過去の14回とほぼ同じ項目について回答を求めた。本学部における教育と学生生活の質的向上のための基礎資料を残すことを目的として、この結果を記載する。

調査項目：

1. カリキュラム

カリキュラムの満足について、肯定的回答（よく当てはまる、または少し当てはまる）は、「語学科目」では66.6%（62.2%）（以下、カッコ内の数字は前年度の結果）、「情報科目」では73.0%（74.2%）、「その他教養科目」では78.8%（77.8%）、「専門科目（経営）」では80.7%、「専門科目（経済）」では77.4%、「専門科目（法律）」では81.9%、「専門科目（政治）」では83.7%であった。なお、前年度以前は、専門科目についてこのように分離した設問はなされておらず、前年度の回答は専門科目全体として81.5%であった。語学科目で前年より増大が見られる。「情報科目」の到達度別クラスの導入について、肯定的回答は67.8%（69.2%）であり、数年以上減少が続いているところ、教養教育科目の全学共通化によって、本学部での導入は困難になった。

新年度初めのオリエンテーションの出席について、肯定的回答が86.3%（84.6%）であった。単位制度の仕組みの理解について、肯定的回答が78.1%（76.9%）であったのに対し、履修と成績評価に関する説明や手続きの分かりやすさについては、肯定的回答が57.9%（60.0%）と数年以上減少が続いている。説明は毎

年少しずつ改善されているので、要因としては学生側の質的変化が考えられる。この質的変化を折り込んだ対策が必要であろう。

自由記述回答では、履修手続きやその状況を分かりやすくするための手段を求める記述や、外国語教育の充実を求める記述が多かった。

2. 大学の環境

環境(主に施設)の満足では、ハラスメント相談室、図書館、チケットサービスコーナー、トイレについて、肯定的回答は65～90%程度であった。特に大学の中核施設のひとつである図書館については、肯定的回答が87.3%(88.0%)であり、前年度とほぼ同じであった。なお、改装された学生控え室については、92.4%(45.9%)と著しく評価が高まっている。一方、売店、書店などについては、例年同様、評価は低い。

自由記述回答では、昨年度は、情報演習室のパソコンの旧さを指摘する記述が著しく多くあったが、前年度の入れ替えによってなくなった。後はほぼ例年と同様であり、Wi-Fi環境の拡充、コンビニエンスストアやATMの設置、食堂の改善を求める記述が多かった。学生控え室でのWi-Fi環境の拡充は必須であろうが、各教室での拡充は教育環境の悪化を招く恐れが強い。

3. 事務職員の窓口対応

学内の各窓口での対応について、肯定的回答は、各部署72～82%程度であった。この数値を見ると比較的好印象を抱いている学生が多いが、自由記述回答では、そのほとんどが不満の記述であり、その数も多い。学生への対応に引き続き留意する必要がある。

4. 他学部開放科目について

他学部の開放科目の参加について、肯定的回答が72.4%であり、関心を持っている学生の割合は比較的高く、よく利用したとする肯定的回答も46.4%と少なくない。

5. 学部間・他大学間との単位互換、所定の資格等の単位認定

単位互換や資格等の単位認定の希望について、肯定的回答は73.0%(78.7%)であり、数年以上に渡って、毎年5ポイント程度の減少が続いている。自由記述回答では、資格の単位認定を求める記述は多いが、他大学との単位互換についての記述は少なく、学生が内向きになっていく傾向が見られる。

6. 就職指導

キャリア支援課による就職指導を受けた学生では、就職指導について、肯定的回答は74.6%(73.6%)でほぼ横ばいであるが、同課が主催する各種講座については、肯定的回答は82.0%(76.1%)であり、前年度より増大している。好印象を抱いている学生が多い。

7. インターンシップ

インターンシップの有効性について、肯定的回答は82.1%(85.7%)であり前年度よりやや減少しているが、実際に参加した学生の満足について、肯定的回答は82.8%(75.2%)で前年度より増大が見られる。

自由記述回答では、事前・事後指導についての不満が多く記載されている。

8. 奨学金制度

本学の奨学金制度に対する学生の認知について、肯定的回答は34.4%(37.5%)であり、毎年着実に減少している(26年度40.7%、25年度41.6%)。これだけ続くと、周知体制よりも学生側の情報収集能力の低下の方が懸念される。本学の奨学金受給者の満足について、肯定的回答は60.1%(73.1%)で、奨学金制度全体の充実について、肯定的回答は58.2%(71.1%)であり、いずれも前年度より著しく減少している。学生

を取り巻く経済的状況の悪化が懸念される。

自由記述回答では、給付型の奨学金を求める記述もある。

9. 学生生活等

例年同様、予習・復習は、合わせて週平均2時間程度しか行なわれていない。しかしながら、授業についていけることについて、肯定的回答は77.9%（75.0%、26年度は71.1%）と毎年着実に増加している。入学偏差値の低下を考慮すると、多くの教員が単位認定を毎年かなり緩めながら行っていることが分かる。昨年指摘したが、逆に、課題の多い教員や試験の難しい教員のクラスは学生が集まらず閉講となる傾向があり、本学部が今後、高等教育機関としての体を維持しようとするのであれば、少なくとも単位認定について抜本的な対策を講ずる必要がある。

他方、アルバイトは週平均3.3日（3.1日）、17.8時間（16.3時間）行なわれている。従って、講義を加えた学習時間の週二十数時間程度（大学設置基準第21条第2項は、週六十数時間程度の学修が必要と規定）と比較すると、本学部の学生は平均的に、学生4：非正規労働者3の存在であることがわかる。この比率はここ十年程度あまり変わっていないので、このことへの対応姿勢を含め、今後の学部のあり方を検討する必要があるだろう。

10. 学生生活全般

学生生活全般に対する学生の満足について、肯定的回答は84.8%（76.8%）であり、比較的好印象を抱いている学生が多い。前年度から見ると大幅に増大している。

以上

IV. 6 教育学部

●FD研修会1

2016年度は大学（キャリア育成センター）がベネッセiキャリアに大学生基礎力テストの依頼を行い、出された結果の報告会をFD研修会として実施した。大学生基礎力テストは2016年度新入生を対象に2016年4月に実施した。今年度は2回目の実施となるため、2015年度1年生と比べた2016年度1年生の特徴を比較することもできた。結果分析の報告会（FD研修会1）は2016年9月6日（火10：30～11：30）に開催した。27名の教育学部教員中16名（59%）が参加し、教育学部1年生の状況について議論を行った。新入生の入学後の展望にかかわる問題として取り上げられる「学び・経験への積極性」、「学びへの意欲」は他学部に比べて高かった。この点について多くの教員が関心をもち、意見交換をすることができた。本稿ではその一部を報告する。

対象者の内訳は、以下の通りである。入試区分は対象者の回答による。

（上段：人数、下段：比率）

学部・学科	年度	合計	入試区分＊						
			一般	推薦	指定校	付属・系列校	一般・公募	センター	その他
教育学部	2016年度	167	91	66	26	37	3	8	2
		100	54.5	39.5	15.6	22.2	1.8	4.8	1.2
保育初等教育	2016年度	81	41	35	15	20	0	4	1
		100	50.6	43.2	18.5	24.7	0	4.9	1.2
初等中等教育	2016年度	86	50	31	11	17	3	4	1
		100	58.1	36	12.8	19.8	3.5	4.7	1.2

1. 2016年度新入生はどんな思いで嵯山女学園大学教育学部を選んだか。

新入生の学びに対する意識は、教育学部全体としては2015年度と2016年度であまり違いは見られないが、保育初等教育専修の2016年度新入生の場合、「大学での学びを通じて、自分が成長できるイメージを持っている」学生の割合と「卒業までに何を学んでいくのかイメージできる」学生の割合がやや低くなっていた。保育者を目指して教育学部に入学しているものの、学びへの具体的な見通しがもてず戸惑っている学生が前年度より多くなった可能性が考えられる。

本学の教育学部を第一志望として選んだ学生は、全体の48.5%（保育初等教育専修59.3%、初等中等教育専修38.4%）であった。保育初等教育専修の2015年度新入生の場合は49%であった。

学部・専修志望度では、教育学部を第一志望として選んだ学生は全体の94%（保育初等教育専修95.1%、初等中等教育専修93%）であった。2015年度新入生と比較して4%近く高くなっている（教育学部90.8%、保育初等教育専修で90.8%）。

2. 大学で学ぶ目的として何を選んだか。

大学選択時の意識として大学で学ぶ目的を「将来なりたい職業に就くために必要な資格や免許を取る」とした学生は教育学部全体で64.1%（2015年度60.2%）、「将来なりたい職業に就くために役立つ専門知識や技術を身につける」とした学生は、教育学部全体で16.2%（2015年度25.2%）であった。資格や免許を取ること自体を目的としているものの、そのために必要な専門知識や技術を身につけることに関しては目的意識が前年度より低くなっている傾向が疑われた。

3. 大学の魅力として何を選んだか。

大学全体の魅力として「取りたい資格や免許が取得できる」を選択した学生の割合が全国平均25%であるところ、教育学部は73.1%であった。また、「資格や免許取得の支援が充実している」、「フィールドワークや実習が多いなど、教育内容や方法が実践的である」が学問内容・学び方における大学の魅力として挙げられた。「資格や免許取得の支援が充実している」を選んだ学生の割合は、全国平均（28.5%）を大幅に超え、教育学部は56.3%であった。「フィールドワークや実習が多いなど、教育内容や方法が実践的である」を選んだ学生の割合は、32.3%であった（全国平均は7.8%）。

●FD研修会2

退職者の最終講義をFD研修会として実施した。日時および講義のテーマは下記の通りである。

日時：2017年1月28日（土）15時30分～17時

大森隆子教授（2016年度退職）：育児の思想から伝承遊びへー折り紙の世界に魅せられてー

浪川幸彦教授（2015年度退職）：初めに数があった

大森教授は、昔からある遊びの中で今も消えず残っている伝承遊びの意義について育児の思想から取り上げ、折り紙の魅力と体験の重要性について解説した。伝承遊びの体験の重要性について多くの教員が意見交換をすることができた。

浪川教授は、理科や数学が嫌いな人が多い日本では、学校の数学と日常の数学が結びついていないということに原因があるとした。日常のものと関係がわからなければ、その教科の重要性もわからない。したがって教育者はなぜその教科を勉強しなければいけないのかを言語化する必要がある。この点について、多くの教職員が参加し活発な意見が出され、FD活動として十分な成果が見られた。

●平成28年度教育学部教員の「今年度の振り返り」と「来年度の目標」について

各教員の教育と研究において、実施した「今年度の振り返り」と「来年度の目標」のアンケートの一部を報告する。

	H28目標「教育」	H28目標「研究」
1	学術研究の最先端知識をわかりやすく伝える教材解説やプレゼンテーション方法をさらに工夫する。	生涯発達心理学の観点・方法から取り組み始めた松本椿年の生涯と作品について基礎資料の収集や精密な資料分析を重ねて、生涯発達心理学の事例研究方法の適用幅を広げる。
2	学生の資質、技能に見合った課題曲、練習方法の指導に細かく対応する。	シューベルトのソナタについて演奏および研究論文を発表する。
3	今以上に学生の自発的な発言や内容の理解が確かなものとなるような授業進行を考えたい。	欧文雑誌に投稿する予定のものが今のところ2編あり、28年度になったら早々に投稿したい。
4	授業の構成を再検討して、特に課題の量に工夫を加えてどの学生も無理なく対応できる内容と、より頑張りたいという学生にも対応した内容を用意して、学生の意向にも配慮しつつ授業を展開したい。	「学びの主体性」において明らかにされた結果を十分に検討し、この研究をより普遍性のあるものとして継続していきたい。
5	「卒業研究」の授業を充実させる。丁寧な個別指導とともに、受講生相互の学び合いを啓発する集団指導を行い、研究の質を高めたい。	研究代表者として行なっている科研費受給研究については研究の成果をまとめ、日本特別活動学会の紀要に投稿したい。
6	学生が保育現場を意識できるような授業展開を検討する。	学生の実習の成果などを整理し、まとめる。

	H28目標「教育」	H28目標「研究」
7	数名の教員で担当するふれあい実習Ⅰに関して担当者間の連絡を密にし、受講生のクラス間格差の生じないように留意する。	他大学研究者との共同研究を進め、平成29年度科学研究費補助金申請の準備とする。
8	学生の積極的な発言を引き出すような発問や課題を工夫する。	授業に資するような、伝統文化・文学理論・文化史などに関する知見を、さらに広め深化させる。
9	授業のテキストと問題集を作成・配布し、学生による事前学習と事後学習を充実させる。	新しい学びの授業技術の体系化と映像化を目指し、今年度も新たに授業ビデオを撮影・編集し、示範授業ビデオを完成させる。
10	学生に考えさせる授業を行うために、アクティブラーニングを取り入れた授業構成をする。	研究協力者として科学研究費補助金事業の研究を進める。
11	「卒業研究」に関しては、就職試験の取り組みと平行して、研究を進めるよう導きたい。	科研費助成事業の研究分担者としての3年目の活動に取り組み、教育学部紀要に成果の報告を掲載する。
12	日本とブルキナファソ、フランスの子どもたちによる大陸間ミュージカル広場の活動を通して水問題解決のための大陸間教育プロジェクト活動を実施する。	水問題解決のための大陸間教育プロジェクト活動を新たな地球時代の教育として展開する。

●平成28年度前期授業アンケート実施状況および総合的充実度

平成28年度7月18日から22日、教育学部は対象科目84の中で83科目を実施し、実施率98.8%を記録した。アンケート項目中「総合的にみてこの授業は充実していた」に対して‘その通りである’と答えた学生は1787名（52.1%）であり、全学部の中で一番高い充実度を表した。

授業アンケートに関する各教員のリフレクション・ペーパー提出率は90.4%（75科目／83科目）であり、他の学部に比べて高かった。

Ⅳ. 7 看護学部

杉浦美佐子、前田 節子、又吉 忍、森脇 佳美、犬飼 勢津子

I. 平成28年度看護学部FD研修会について

基礎看護学教育における講義、演習、臨地実習では、「臨床判断は、因果関係ですべて説明付けるような直線的・合理的な側面だけでなく、感性や直感に基づいた判断をも含んで、情緒的あるいは状況的側面を有する幅広い概念」¹⁾であることを前提として、教員は学生自身が看護上の課題の発見、解決法の決定、実施、評価、結果を経て新たな課題を発見していけるような教育方法を導入して実践している。特に多くの時間を費やして開講される臨地実習は、学生が患者と相互依存的に存在するなかで、現実に対峙しながら、その時々看護上・健康上の課題を発見し、必要とされる看護を実践する「アクティブ、かつ創造的に看護を展開する」学習形態である。臨地実習は、プロジェクト学習（PBL）²⁾でもある。これらに対する「評価」は、学生の看護実践力を評価の観点としたルーブリック、「評価資料」は、学生が自らの課題解決プロセスを蓄積し、自己評価することで自己成長力を培えるようなポートフォリオの活用が新たな試みとして重要になってくる。そこで、平成28年度の看護学部FD研修会は、「教育評価一般」を再確認し、新たな教育評価の方法に重点を置いて、以下のようなテーマを設定し開催した。

文献

- 1) 中西睦子、他：こころのケア場面における臨床判断の構造と特性、看護研究、31（2）、1998.
- 2) 塚本真也：想像力育成の方法、森北出版、8、2008.

1. 平成28年度看護学部FD研修会の概要

目 的：学生の評価に関する教員の視点を養成する

テ ー マ：教育評価

開催日時：平成28年9月21日（水）15：00～17：00

開催場所：相山女学園大学 看護学部棟内（102教室）

開催内容：1) 教育評価一般、2) パフォーマンス評価、3) ルーブリック評価

前半を講義、後半を8グループに分かれてのグループワークとする。

講 師：趙卿我先生（愛知教育大学 教育学部 学校教育講座）

2. 開催までの準備（学部FD委員会を4回開催）

- 1) グループワークのための教材作成
- 2) 講師との打ち合わせ（於、愛知教育大学内）
- 3) 資器材の準備
- 4) 会場設営

A パフォーマンス課題

対象学生：看護学部1年次後期

既習状況：看護学概論、コミュニケーション技術演習、日常生活援助技術、解剖生理学（器官系・適応系）履修済み

教育目標：対象に応じた援助の必要性の理解とともに、安全性、安楽性、自立性、倫理面を考慮したケアが選択でき、実施する為の方法を記述し、説明できる

事例：M・Tさん 78歳男性、入院時の身長170cm 体重60kg、75歳の妻と二人暮らし

既往歴 脳梗塞・高血圧

5年前に脳梗塞発症で左麻痺がある患者。今回、誤嚥性肺炎で入院となりました。

誤嚥性肺炎は軽快しましたが、ADL（日常生活動作）が低下している為、自宅退院に向けてリハビリ中です。現在入院10日目。今朝のバイタルサインは T = 36.7℃ P = 68回/分 R = 18回/分、BP = 136/88mmHgでした。

入院前は身の回りのことはすべて自分で出来ていました。

現在、日中は見守りで歩いてトイレまで行き、排泄動作は自立しています。

夜間はベッドサイドに尿器を置き自分で使用しています。

日中は尿器をベッドサイドに置かないため、

「トイレに行くのはごしてえ^注」から（辛いから）、シビン持ってきてくれや」と日ごろから訴えています。

午前9時に看護師が見守りでトイレに行き、排尿を済ませました。

午前10時半にナースコールがあり

「リハビリの前に、一応おしっこ済まそうかな。尿瓶貸してくれや」

とあなたに言いました。

その時、あなたはどうか考え、どう行動しますか？

順を追ってその根拠を示しながら記述してください。

注：ごしてえ（長野県の方言）

3. 研修会の結果・評価

アンケートの集計結果から、内容について満足との意見が多く、ニーズを得ていたと考えられ、好評であったが、グループワークの課題のボリュームが多く、時間が足りないとの意見があった。

また、今回の内容を研修として継続して欲しいという要望があった。そのため、継続的に評価をテーマとした研修を実施することとし、学部暦に組み込むことで、早期に日程を調整し、研修の時間を十分に確保できるよう検討していく。

来年度のFD研修会の開催日として2017年9月1日を希望日とし、運営委員会、教授会へ提案し、了承を得た。

4. 平成28年度 看護学部FD研修に関するアンケート集計結果

参加者39名にアンケートを配布し、回答27枚（回収率77.1%）を得た。

Q1. 研修内容の満足度

① とても満足 11名(40.7%)、 ② やや満足 7名(25.9%)、 ③ 普通 6名(22.2%)、

- ④ やや不満 3名(11.1%)、 ⑤ とても不満 0名(0.0%)

〈理由〉

- ① 実習評価含め自分の課題の1つであったため。
参加型であり、実践的に学ぶことができた。
他領域や教員間で話し合うことができ、同じ視点や新しい気づきができたため。
- ② 内容は仕事に直結したものでとても勉強になりましたが、時間内で終わらせるにはボリュームがあった。もう少し時間がほしい。パフォーマンス評価はどんなものであるか理解できた。ルーブリック評価について、具体的方法を学ぶことができた。
- ③ 時間がオーバーしていた。15枚のレポートを評価するには時間が足りなかった。講義内容は非常に必要なことであり、興味深かった。
- ④ 時間不足、内容の消化不良

Q2. 前半講義の満足度

- ① とても満足 9名(33.3%)、 ② やや満足 9名(33.3%)、 ③普通 3名(11.1%)、
④ やや不満 4名(14.8%)、 ⑤ とても不満 0名

〈理由〉

- ① わかりやすかった。多面的に学べた。具体的でわかりやすく教えていただけた。重要な内容であった。
- ② 実習などのパフォーマンス評価の方法は看護学部には必要な内容であると思う。今後生かしたい。もう少し時間が欲しい。あわただしかった。落ち着いて考えたり話し合ったりできたらよりよかった。評価方法について考える良い情報だった。
- ③ スピードについていけなかった。
- ④ もう少し講義をききたかった。

Q3. 後半演習の満足度

- ① とても満足 7名(25.9%)、 ②やや満足 9名(33.3%)、 ③普通 5名(18.5%)、
④ やや不満 4名(14.8%)、 ⑤とても不満 1名(3.7%)、 その他 1名(3.7%)

〈理由〉

- ① 他の先生方の意見が聞けたので楽しかった。充実した内容だった。
- ② 時間が足りなかった。(4名)。事前に資料(15枚)をいただいた上で臨みたかった。
グループメンバー内で評価の違いがみれてとてもおもしろかった。
- ③ 流れについていけなかった。ディスカッションの方向性がややわかりにくかった。
もう少し考える時間がほしい
- ④ 時間がなかった。レポートの評価の時間が短かった。レポートが多く読めず、十分な討論ができなかった。
- その他 内容は大満足ですが、ぜひ半日かけてじっくりGWをしたかった。

Q4. 日程の適切さ

- ① 適切 17名(63.0%)、②どちらでもない 6名(22.2%)、③適切でない 4名(14.8%)

〈希望時期〉

- ・授業スタート前に日程は組めるとよい。
- ・年間日程の中へくみこむことができればいつでもよい。

Q5. FD研修に対する要望

- ・もう一度研修したい。今回と同様の内容を希望する。
- ・他の先生方と関われるFDはとても楽しく勉強になる。
- ・今回のような実際に自分たちの授業や評価につながる具体的な内容を希望する。
- ・今回のようなテーマでの研修は刺激になる。

Q6. その他、意見

- ・時間通りに終わる内容でお願いしたい。(レポートの内容が多かったと思う。)
- ・今後も続けて頂きたい。他領域の交流もかねておりとても良い。

5. 次年度の課題

実施後のアンケートでは、研修の内容は満足であったとの回答が多かったが、研修の時間が限られており、後半のグループワークでボリュームのある課題を読み、グループ討議を深める時間が足りなかったとの意見が多かった。来年度のFD研修は、今回の内容を継続して欲しいという意見も多いため、教育評価を継続的なテーマとして実施することが望ましい。また、参加しやすい日程と研修に十分な時間を確保するために、学部行事として早期にスケジュールに組み込むことを検討していく。

II 看護学部 実習アンケートの作成・試用について

1. 活動実績

現在、全学FD委員会で行われている授業評価では、実習と実験が含まれていないため今後は看護学部として実習と実験を授業評価に加えていく旨を提案していく。他の教育機関が実習等をどのような項目で評価しているかについて情報収集するとともに素案を作成し、来年度の全学FD委員会に案を提出できるよう検討していく。

2. 方針

本学の授業評価と参考資料とした実習評価項目を比較して作成した実習評価表(案)について委員内で検討を行った。基本線である本学の授業評価に対して、以下の方針とした。

1) 「実習における目的・目標が達成できたか」の質問項目を加える。

2) 実習の形態に合った質問項目に変更する

ex 「実践」を「思考」と「態度」の2つの項目に分ける。

「見方や考え方」を「看護観」に変更する。

「目的・目標・評価」を「目的・目標」と「評価の視点」の2項目に分ける。

「シラバス」を「実習要項と手引き」に変更する。

「必要時、相談に応じてくれましたか」に変更する。

「教員の指導・アドバイスは適切であったか」に近い内容に変更する。

3) シラバスとの整合性を意識し、育成する能力の4項目に沿う内容とする。

⇒ 〈実習内容〉には育成する能力4つを基本とした内容に変更し、

〈自主性への働き〉の中に「態度・倫理面」の項目を含める。

4) グループダイナミクスが発揮できたかを問う内容を追加する

3. 試行

看護学部の実習を評価することを重点に項目を作成し、完成した案を教授会で提案し、学部長の容認の下、在宅看護学実習と、基礎看護学実習において学生に試験的な実施を行い、検討した。

1) 項目の精選

- ① ディプロマポリシーとの整合性を意識し、知識・理解、思考・判断、態度・志向性、技能・表現の4つのカテゴリーに分類する。
- ② 「手引きを読んだ」を「手引きを読んで実習に臨んだ」に変更する。
- ③ 「目的・目標の基準」の「基準」を削除する。
- ④ 「理解できましたか」を「理解できた」へ変更する。
- ⑤ 「シラバス・オリの評価」から「事前準備」とカテゴリー名を変更する。

- ⑥「実習指導者は必要時相談に応じてくれた」、「実習指導者の指導・アドバイスはわかりやすく適切であった」の2項目を追加する。

作成した実習アンケート表を以下に示す。

実習アンケート表（案）

1	実習前に、実習要項と実習の手引きを読んで実習に臨んだ	実習事前準備	
2	オリエンテーションでは、実習の目的・目標が理解できた		
3	オリエンテーションでは、実習の内容が適切に示されていた		
4	オリエンテーションでは、実習の評価の視点が理解できた		
5	この実習の目的・目標は達成できた	知識・理解	実習内容
6	これまでの授業・演習の学習を実習に活かすことができた	知識・理解	
7	人間、環境、健康、看護に関する専門的知識を身につけることができた	知識・理解	
8	論理的・批判的・科学的に思考し、対象を全人的に理解できた	思考・判断	
9	この実習にあたって、個人情報の保護など倫理的側面に配慮できた	態度・志向性	
10	対象の生命と人権を尊重し、看護職者としての倫理観や責任感を身につけることができた	態度・志向性	
11	この実習にあたって、自らの態度を考え、誠実に行動することができた	態度・志向性	
12	この実習にあたって、学生同士でお互いに助け合うことができた	態度・志向性	
13	チーム医療の一員として協働できる能力を身につけることができた	態度・志向性	
15	援助的人間関係の上に、基本的な看護を実践する能力を身につけることができた	技能・表現	
16	社会の動向を踏まえた看護職者としての自己研鑽力を身につけることができた	技能・表現	
	この実習の予習や復習など、自主的な学習を行った	態度・志向性	
17	教員は必要時相談に応じてくれた	学生指導	
18	教員の指導・アドバイスはわかりやすく適切であった		
19	実習指導者は必要時相談に応じてくれた		
20	実習指導者の指導・アドバイスはわかりやすく適切であった		
21	この実習を受けてあなたの看護観が広がった	実習後への活用	
22	総合的にみて、この実習は充実していた		

1.その通りである 2.どちらかといえばその通りである 3.どちらかといえばそうではない 4.そうではない

4. 実習アンケート試行後の因子分析結果

試行として基礎看護学実習（2年生）および、在宅看護学実習（4年生）に実習アンケートを実施し、得られたアンケートへの回答（総数）は153件であった。

そのうち、欠損値を抜いた147件を対象に因子分析を行った。

表 1. 基礎統計

		M	SD	M-SD	M+SD
設問1	実習要項と実習の手引きを読んで実習に臨んだ	1.56	0.65	0.91	2.22
設問2	オリエンテーションでは、実習の目的・目標が理解できた	1.52	0.61	0.91	2.14
設問3	オリエンテーションでは、実習の内容が適切に示されていた	1.48	0.59	0.89	2.07
設問4	オリエンテーションでは、実習の評価の視点が理解できた	1.82	0.67	1.14	2.49
設問5	この実習の目的・目標は達成できた	1.90	0.57	1.33	2.47
設問6	これまでの授業・演習の学習を実習に活かすことができた	1.84	0.60	1.24	2.43
設問7	人間、環境、健康、看護に関する専門的知識を身につけることができた	1.79	0.59	1.20	2.38
設問8	論理的・批判的・科学的に思考し、対象を全人的に理解できた	2.00	0.66	1.34	2.66
設問9	この実習にあたって、個人情報の保護など倫理的側面に配慮できた	1.37	0.68	0.68	2.05
設問10	対象の生命と人権を尊重し、看護職者としての倫理観や責任感を身につけることができた	1.49	0.64	0.84	2.13
設問11	この実習にあたって、自らの態度を考え、誠実に行動することができた	1.52	0.69	0.83	2.20
設問12	この実習にあたって、学生同士でお互いに助け合うことができた	1.32	0.61	0.71	1.93
設問13	チーム医療の一員として協働できる能力を身につけることができた	1.80	0.67	1.13	2.47
設問14	援助的人間関係の上に、基本的な看護を実践する能力を身につけることができた	1.76	0.61	1.14	2.37
設問15	社会の動向を踏まえた看護職者としての自己研鑽力を身につけることができた	2.07	0.65	1.42	2.72
設問16	この実習の予習や復習など、自主的な学習を行った	1.63	0.68	0.94	2.31
設問17	教員は必要時相談に応じてくれた	1.46	0.72	0.73	2.18
設問18	教員の指導・アドバイスはわかりやすく適切であった	1.60	0.84	0.76	2.44
設問19	実習指導者は必要時相談に応じてくれた	1.51	0.76	0.75	2.27
設問20	実習指導者の指導・アドバイスはわかりやすく適切であった	1.38	0.64	0.74	2.03
設問21	この実習を受けてあなたの看護観が広がった	1.29	0.62	0.67	1.91
設問22	総合的にみて、この実習は充実していた	1.33	0.63	0.70	1.97
					n=147

M-SDが1.0を下回るフロア効果はみられるが、M+SDが4.0を上回るシーリング効果はみられない(表1)。

設問1～22の相関係数を求め（SPSS：相関関係結果参照）、項目間の相関係数が0.7以上あるものについて、平均値より回答選択肢の中心値（2.5）に近い項目を残し、因子分析を行った。設問17と設問18間の相関係数 $r = 0.708$ であり設問17を除外した。設問21と設問22間の相関係数 $r = 0.768$ であり設問21を除外した。

削除した2項目を除く20項目で因子分析を行い、プロマックス法により斜交回転を行った。その結果、3因子が導出された（表2）。因子数は固有値1.2以上で打ち切った。

表2. 因子分析結果（固有値1.2 斜交回転）

			平均	SD	第1因子	第2因子	第3因子	クロンバッ ク α 係数
設問6	実習内容	これまでの授業・演習の学習を実習に活かす ことができた	1.84	0.60	0.84	-0.13	-0.10	0.89
設問8		論理的・批判的・科学的に思考し、対象を全人的に理解できた	2.00	0.66	0.81	-0.11	0.07	
設問7		人間、環境、健康、看護に関する専門的知識を身につけることができた	1.79	0.59	0.76	0.00	-0.07	
設問14		援助の人間関係の上に、基本的な看護を実践する能力を身につけることができた	1.76	0.61	0.72	0.08	-0.06	
設問5		この実習の目的・目標は達成できた	1.90	0.57	0.69	0.06	-0.04	
設問13		チーム医療の一員として協働できる能力を身につけることができた	1.80	0.67	0.68	0.01	-0.01	
設問15		社会の動向を踏まえた看護職者としての自己研鑽力を身につけることができた	2.07	0.65	0.52	0.04	-0.02	
設問11		この実習にあたって、自らの態度を考え、誠実に行動することができた	1.52	0.69	0.40	0.21	0.22	
設問10		対象の生命と人権を尊重し、看護職者としての倫理観や責任感を身につけることができた	1.49	0.64	0.39	0.22	0.23	
設問20		指導、グループダイ ナミックスと その効果	実習指導者の指導・アドバイスはわかりやすく適切であった	1.38	0.64	-0.15	0.78	
設問19	実習指導者は必要時相臨に応じてくれた		1.51	0.76	-0.07	0.92	-0.14	
設問22	総合的にみて、この実習は充実していた		1.33	0.63	0.17	0.66	-0.07	
設問18	教員の指導・アドバイスはわかりやすく適切であった		1.60	0.84	0.04	0.62	0.01	
設問12	この実習にあたって、学生同士でお互いに助け合うことができた		1.32	0.61	0.22	0.46	0.11	
設問16	この実習の予習や復習など、自主的な学習を行った		1.63	0.68	0.33	0.33	0.11	
設問9	この実習にあたって、個人情報の保護など倫理的側面に配慮できた		1.37	0.68	0.22	0.26	0.18	
設問2	事前準備	オリエンテーションでは、実習の目的・目標が理解できた	1.52	0.61	0.05	-0.18	1.01	0.8
設問3		オリエンテーションでは、実習の内容が適切に示されていた	1.48	0.59	-0.13	0.13	0.73	
設問4		オリエンテーションでは、実習の評価の視点が理解できた	1.82	0.67	0.04	0.05	0.65	
設問1		実習要項と実習の手引きを読んで実習に臨んだ	1.56	0.65	-0.10	-0.03	0.62	
因子間相関					第1因子	-	0.74	0.67
					第2因子	-	0.63	
					第3因子		-	

5. 次年度の課題

3因子については、「実習内容」、「指導、グループダイナミックスとその効果」、「事前準備」とした。今後、平成29年度の向けにはサンプル数を増やし確認的因子分析を重ねていく計画としている。

Ⅲ 平成28年度 看護学教育ワークショップ講演会への参加と学部教員への伝達

1. 日時：平成28年10月27日（木）、28日（金）

2. 場所：千葉大学けやき会館

3. ワークショップ講演会参加者：前田節子

4. 内容：

ワークショップテーマ：卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすか

－大学改革時代における看護学教育の継続的質改善への挑戦－

1日目：

ワーク“知る”1 看護系大学を取り巻く大学改革の動向

（講師：文科省看護教育専門官） 少子化に伴い全国の大学数は減少傾向にある中、看護系大学だけは、平成20年166校→平成28年248校に増加しているといった異質な状況が起きている。そのため、教育の質の担保、向上が期待されている。一方で看護系大学教員は、引く手あまたからか完成年度を待たずに、他大学に異動するケースも多くあり倫理的にも、他の分野から批判の対象であり、いずれにしても良くも悪くも注目されている。大学自体の質の保証のための取組みが急務であることを再認識した。

ワーク“知る”2 全国の看護系大学における看護実践能力育成の現状調査報告

看護系大学学士課程における臨地実習の現状並びに課題に関する調査研究：実習1科目あたりの単位数（全体の55%）実習の配当年次3年後期が、一番の多く、1グループあたりの学生数 基礎以外は7-8人、教員の指導体制は基礎と統合が8-10人で、その他の領域は、1-4弱であった。一部抜粋。本学は全体平均からすると、学生たちの学習環境としてある程度の質の確保ができていたと感じた。実習の時期・日程調整、実習施設の確保困難、実習施設が遠い、多数の実習施設を使用しなければならない、実習指導非常勤教員・TAの確保、実習に適した対象者が少ないなどを多くの大学が抱えている問題であり、課題であるといった現状報告であった。これは、本学の課題でもある。これらの課題を打開するには、これまでの看護教育の枠組みを抜本的に見直す時期にきており、そのためには、教員自身のカリキュラム開発能力を上げる必要性を、報告者の私見として述べられた。

看護系大学における卒業時到達目標評価に関する調査報告：2011年「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」は、8割以上がカリキュラム検討や内容の網羅性の確認に活用し、各大学のディプロマポリシーやカリキュラムポリシーに反映されている現状が報告された。しかし、具体的な教育方法、レベル解釈や基準に関する課題等が挙げられた。

ワーク“知る”3 岐阜県立看護大学の卒業時到達目標 評価の取組み

当該大学は、FD研修会、教務委員会主催で、4年間ほどかけて到達目標を検討し、その評価を「看護学統合演習」で達成度を評価し、その後学生が主体的に学修を深め、卒業時到達目標を達成できるように支援しているといった報告であった。

ワーク“創る”1 自大学の卒業時到達目標 評価の取組

ここからは、グループワークであった。臨地実習と卒業時到達目標について参加メンバーの大学での取組をもとに意見交換した。参加メンバーのほとんどが組織的に取り組んでいるのは、看護技術到達度表のチェックであった。しかし、学生の自己評価であるため、どこまでが到達できているのか不明である。領域間の連携不足、特に看護過程の考え方等の違いなど、どこも同じ悩みを抱えていることがわかった。また、それぞれ様々な試みをしているが継続性がなく、体制化してこないといった問題があげられた。

ワーク“創る”2 ディプロマポリシーと卒業時到達目標を踏まえた臨地実習について、検討した。

1) 現状の問題

- ・カリキュラムマップを作成して図示化しているが、臨地実習としてディプロマポリシーを評価に活用できていない
- ・教員の意識が低く、教員間でディプロマポリシーを共通理解できていない
- ・学生にも到達目標などディプロマポリシーとリンクさせて意識づけがされていない
- ・実習施設への説明も不足している

2) 問題を解決するためのアクションプラン

(1) 教員間での取組み

- ・教員間でディプロマポリシーをふまえて卒業時到達目標をどのように設定するのか検討する場を設ける
- ・各領域の実習目標は、ディプロマポリシーをふまえて設定する

(2) 学生への働きかけ

- ・実習オリエンテーションで、ディプロマポリシーとの関連について説明を徹底する
- ・1年生から教養・専門基礎・専門科目が実習にリンクしていることを実感できるように、授業手法の工夫をするなど

(3) 実習施設との連携

- ・ディプロマポリシーディプロマポリシー、卒業時到達目標の共通理解が得られるための場の設定
- ・実習指導者とともに実習評価を行うなど

ワーク“推進する”「アクションプラン実現を推進するアイデア共有」

卒業時到達目標の評価をどう行い、どう活かすかについて、組織運営、臨地実習、学生支援、地域連携の立場からそれぞれの課題を検討し、アクションプランのアイデアを発表した。学生支援では、学生自身が卒業時到達目標を獲得できたと自覚できるための支援が必要など、地域連携では、在宅でのハイケア化などから、各科目の中に地域の視点を入れた授業を展開する。組織運営では、臨地実習、学生支援、地域連携すべてを機能させていくには、それを組織でどう運営していくにかかっており、その中で全体に共通した問題は、教員間で合意ができていないこと、問題はそれぞれ認識できているが、解決する時間と方法がないという現状であった。まずは、カリキュラムマップの作成や、CP、DP等の教員間での共通理解からはじめていく必要性を改めて感じたワークショップであった。

Ⅳ 平成28年度 新任教員研修に関するアンケート（看護学部）結果

以下について、自由記載を求めたが、1. 日程について 2. 内容（不足な点など）
日程、内容ともに 課題となる意見はなかった。

V 研究科 FD 活動報告

- 1 生活科学研究科
- 2 人間関係学研究科
- 3 現代マネジメント研究科
- 4 教育学研究科

V. 1 生活科学研究科

江崎 秀男

生活科学研究科は、食品栄養科学専攻と生活環境学専攻の2専攻で構成されている。平成24年に、大学院の授業内容や教育方法の改善を組織的に図るためにFD委員会を立ち上げ、活動を続けてきた。

FD委員会の構成員は、研究科長、両専攻世話人各1名、両専攻より選出された委員各1名であるが、平成28年度は下記に示すように、内藤研究科長は食品栄養科学専攻世話人を兼務した。

内藤通孝（研究科長）・（食品栄養科学専攻世話人）

橋本令子（生活環境学専攻世話人）

江崎秀男（食品栄養科学専攻選出委員）

滝本成人（生活環境学専攻選出委員）

1. 今年度の活動

① 大学院生の学会発表等のサポート

平成28年度の食品栄養科学専攻（修士課程）の学生数は1学年が2名、2学年が3名であった。指導教員等のサポート・奨励もあり、本年度は日本栄養改善学会、日本臨床栄養学会、日本動脈硬化学会で3件の学会発表を行った。

また、生活環境学専攻においては、1学年が3名、2学年が1名在籍するが、同様に、繊維学会、日本デザイン学会第3支部研究発表会、自助具フォーラムで6件の学会発表等を行った。

② 研究者養成のための研究倫理の指導

研究者養成のための研究倫理の指導に関して、CITI Japan eラーニングコースプログラム（01 責任ある研究行為：基盤編（RCR）、Stage1）が3月末まで無料で受講できることから、28年度末に、修士課程1学年の院生に受講を呼びかけた。3月31日時点においては、2名の院生が修了証を獲得している。

③ 大学院授業評価アンケートの実施および検証

大学院各研究科の授業内容の質的向上を図るため、授業評価アンケートを前期および後期に実施した。今回のアンケートは、各科目の受講者数が少ないため、大学院生ごとに受講した科目の評価を依頼した。

回収されたアンケート結果については、生活科学研究科FD委員において検証を行うとともに、すぐに対応できる要望については、改善を施した。

参考までに、次ページに、アンケート結果およびその検証（前期）の資料を記載した。

2. 今後の課題

平成29年度においても、28年度と同様に、大学院生の学会発表等のサポート、eラーニングを利用した基礎的な研究倫理の啓発、授業評価アンケートの実施・検証を推進させるとともに、以下の課題についても取り組むことが望まれる。

- ① 学部FDと大学院FDの連携により、大学院への入学生を増加させる。
- ② 大学院においても、教員による授業参観を実施する。
- ③ 授業方法を巡る教員間の意見交換を実施する。
- ④ 座談会形式での大学院生と教員との意見交換を実施する。
- ⑤ 入学時ガイダンスにおいて、各研究分野の特性を紹介するとともに周知させる。

平成28年度前期授業科目 大学院授業評価アンケート結果について (生活科学研究科 修士課程)

概要：

今回の授業評価アンケートは、科目ごとではなく、大学院生ごとに有益であった授業科目等を記入してもらう様式で実施した。食品栄養科学専攻の回収率は60%、生活環境学専攻の回収率は75%であった。

設問内容は、以下の3項目である。

設問1. 大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益であった点など

設問2. 大学院の授業科目及び研究指導科目で改善すべき点

設問3. 教室設備、研究設備、授業環境などについてのお気づきの点

アンケート結果の確認・検証：

研究科長、専攻世話人および大学院FD委員でアンケート結果を確認するとともに、より質の高い教育および研究指導の実践・改善のための方法について論議した。同時に、大学院生の学習・研究がスムーズに遂行できる環境の整備についても具体的な改善策を考えた。以下に、その内容を記述する。

- 1) 食品栄養科学専攻で開講されている授業科目の中で、英語の教科書を使用して授業を行うものがあったが、受講生は“修士論文を作成する上で不可欠となる英語論文の読解力を養うとともに有益な知識を得る事ができた”とこの授業科目を評価している。
しかし、修士学生の中にも、英文の読解力が乏しい、特に科学英語を読みこなす能力に欠ける者も居ることを考えると、今後、大学院（生活科学研究科、或いは大学院共通）の授業科目の中にも、総合科目として、英語の読解力を会得する科目を置くことも必要である。
- 2) 生活環境学専攻で開講されているいくつかの授業においても、大学院の特論や演習が受け身的にならないように、多くの課題が与えられ、事前準備をするよう工夫されている。受講生にとっては苦勞すること多いが、結果として難しい論文や書物の内容が理解できることから、このような参加型授業が有益であると評価している。
- 3) 近年、大学院生が両専攻の特別研究（修士論文）の一環として、各種学会で研究成果を報告する機会が多くなっている。学会への参加は、大学院生活の充実に役立つとともに、学術論文の作成、さらには就職活動にも有益であると考えられる。今後、より多くの学生が積極的に学会へ参加できるためには、宿泊代の補助などの経済的なフォローも必要である。
- 4) 最近、大学院の授業においても、パワーポイントを使用するケースが多くなっているが、受講生がその内容を十分に理解するためには、資料の配布も重要である。
- 5) 現在、生活科学研究科の両専攻において、一部の授業科目が数年開講されていない状況であるが、これらの科目については各専攻において早急に検討する必要がある。
- 6) 大学院生が研究課題の遂行のために日常的に使用する学習・研究設備（例えば、パソコン、プリンター、プロジェクターなど）が、あまりにも古く、改善すべき問題が生じている。この問題を解決するには経費を伴うが、早急に具体的な改善策を考え、充実した学習環境の整備を行う必要がある。

以上

V. 2 人間関係学研究科

今年度の研究科全体としてのFD活動は、領域別に、所属教員による意見交換という形で実施した。臨床心理学領域は11月25日に約1時間、教育学領域は2月14日に約1時間半、社会学領域は2月9日に約1時間、それぞれ、担当教員全員参加で授業改善について意見交換を行った。

○臨床心理学領域

臨床心理学領域における意見交換会は担当教員全員出席のもとで11月25日に開催された。授業方法を巡って話し合いをするにあたって、具体的な問題点に焦点をあてるため、今年7月に実施された授業アンケートの回答（報告書作成済）を、授業別にまとめ直した資料を全員に配布し、それを材料にした。

とくに、改善希望が複数名からあがっていた授業「臨床心理査定演習Ⅱ」「心理学研究法特講」の2科目について、担当教員からのコメントを求め、その後他の教員から発言を求め、話し合いをした。

その結果、「臨床心理査定演習Ⅱ」については、他の査定講義・演習との役割分担を明確にし、それらの授業を通して複数の査定法をくまなく学べるようにした。

また、「心理学研究法特講」への要望として挙げられていた統計ソフトの習得については、本来の授業目的から離れた要望であり、それらを補う学内の授業などを聴講するよう指導しているが、それが行なわれていないということであったため、履修前のガイダンスで、授業外にも積極的・主体的に勉強する姿勢をもつことを指導することとした。

次に、領域独自のFD活動の概要を以下に記す。

〈研究教育活動〉

- ・心理学実験のTA（前後期）：学部2年生を対象とした心理学実験のTAとして、大学院生11名（M1）が1年間にわたり実験実習をサポートし、心理学研究法の実践的支持、統計解析、レポート作成の相談にあたった。
- ・修士論文中間発表会（7月22日・2月24日）：7月22日には、1月に修士論文を提出する予定であった10名の大学院生（M2）が2グループに分かれて、2月24日には7月に修士論文を提出する予定であった1名の大学院生（M2）がそれぞれ発表した。これは毎年実施し、原則として全教員、大学院生（M1,2）が参加している。大学院生は指導教員による指導を超えて、他の教員や大学院生からさまざまな助言指導を得ることにより、より広い観点から研究にアプローチする力が涵養される。
- ・臨床心理相談室紀要『梶山臨床心理研究』の発行：教員3名が研究論文を執筆し、大学院生（M2）11名が事例研究を執筆した（3月6日発行）。大学院生の事例研究については、原則として外部の臨床心理士や精神科医からコメントをいただき、事例の理解や自身の臨床実践上の課題などを振り返ることにより、その後の臨床実践や研究に示唆を得る好機となっている。
- ・卒論発表会（2月1日）：学部4年生全員が卒業論文の成果を発表する卒論発表会において、大学院生（M1）5名が会場の司会（座長）として運営に携わった。
- ・オープンキャンパスで行われた4回の学科展示企画で、院生8名が分担して、心理検査、芸術療法、実験デモを実施した際の担当者あるいはサポート役になった。
- ・平成28年5月22日に本学星ヶ丘キャンパス教育学部棟で開催された2016年度臨床発達心理士会東海支部総会および研修会（講師：教育学部客員教授中島正夫先生、テーマは「発達障害の最前線～小児神経科学の立場から」）に教員1名が役員として、M2が2名、受付担当のアルバイトとして参加した。
- ・平成28年5月28日、29日に本学星ヶ丘キャンパス現代マネジメント学部棟で開催された臨床発達心理士認定運営機構主催の2016年度第1回指定科目取得講習会にて教員1名とM1が6名、M2が4名、修了生1名が運営スタッフとして関わった。

- ・東海アセスメント研究会（平成28年4月17日・7月31日・11月6日）：人間関係学部棟にて教員2名、他大学教員、修了生（延べ7名）、大学院生（延べ13名）を含む臨床心理士、学校教諭、臨床発達心理士などが参加した。知能検査や発達検査中心としたアセスメントにより、幼児、児童生徒をどのように理解し支援するかについて検討を行った。
- ・日進市立小学校との連携研究：教員2名が関与する小学校との連携研究において、大学院生（M2が4名、M1が3名）がデータ入力・分析を担当した。

〈臨床実践〉

- ・相山女学園中学校・高等学校におけるスクールボランティア（生徒に対する相談援助活動）：大学院生（M1,2）が自発的に参加し、スクールカウンセリングを体得する機会となっている。
- ・臨床心理相談室特別講演会（11月26日）：臨床心理相談室の主催で一般の方々を対象に無料で開催しており、今年度は東北大学大学院教授の本郷一夫先生を講師にお迎えし、「日本大震災後の心理・社会的支援」についてご講演いただき約60名の方にご参加いただいた。臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員（非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生）が一同に会し運営のサポートにあたった。
- ・臨床心理士資格試験の面接への心構えについてのオリエンテーション（11月8日）：教員2名により、臨床心理士資格試験の一次試験に合格した大学院修了生9名に対して全体オリエンテーションを行った。また、一次試験に合格した全員に対して全教員が分担して、面接に対する個別指導を行った。
- ・臨床心理相談室ケース報告会（3月4日）：臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員（非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生）が一同に会し、年1回スタッフ会議を行っている。大学院生・修了生には、組織における臨床相談上の実践的な課題などを検討する好機となり、非常勤相談員には相談室運営上の課題などの共有の場となっている。
- ・日進市教育委員会との連携事業
 - 発達障害保護者相談会：日進市内の小中学生の保護者を対象として子どもの発達障害に関する相談会を開催した（9月8・12日の2日間）。教員7名が保護者22名の相談を受けた。
 - 小中学校への巡回指導：教員7名が市内の13小中学校に前後期の2回出向いて、巡回指導を行った（平成27年7月～平成28年3月）。
- ・日進市学校教育支援学生サポーター
 - M2が2名、日進市立小学校に行き、個別支援を必要とする児童のサポートを行った。
- ・日進市立小学校でのボランティア活動
 - M1が1名、日進市立小学校に行き、個別支援を必要とする児童のサポートをボランティアで行った。
- ・名古屋市子ども適応相談センター（なごやフレンドリーナウ）に、M1が1名ボランティアとして心理的な理由によって登校できない小中学生へのサポートを行った。
- ・併設校である相山女学園大学附属幼稚園において、M2が1名（10月5日）教員の巡回相談に同行し、参加観察および事後のカンファレンスを行った。

○社会学領域

社会学領域においてはこれまで、大学院生の自主的研究活動および指導教員の集団的研究指導のための組織として、社会学研究会を設立し組織的活動を続けてきている。組織の運営は基本的に院生が担うものとし、領域代表や他の参加教員の助言等のサポートによって運営されている。メンバーシップについては領域所属の学生・教員のみならず他領域・研究科の学生・教員や研究科を終了したOGにも開いており、オープンな研究および指導活動の場として運営している。活動の意義としては、研究能力の向上を目指す院生たちの相互啓発と研鑽の場となること、院生が多様な視点から教員による指導を受けられること、さらに教員間で指導の方法等について学び合う場となることが挙げられる。

また、これも毎年のフォーマルな活動として、領域全体で学生の修論作成の進捗状況を確認し集団的に修論指導するための場として領域教員全員が参加する修士論文中間発表会を行っている。

さらにFD活動の新たな試みとして一昨年度から大学院の授業等についての学生への意見聴取および教員も含めての話し合いをおこなっている。

しかし、本年度は在籍学生がいないという事態になったため、これらの活動はおこなうことができなかった。

なお、研究科全体のFD活動として本年度に行われた領域の教員による授業改善についての意見交換については、2月9日16時半より1時間程の時間を取って実施した。現在、具体的に対応すべき学生がいないということで、最近の傾向として大学院レベルの教育目標と入学学生の学習動機や学力レベルにあまりにも大きなギャップがあるという最も困難で基本的な問題を出発点として意見を交換した。総論的結論としては、カリキュラムの整備や広報活動の活性化によってより質の高い学生を獲得すべくさらに努力するというところで合意した。

○教育学領域

2月14日（火）に教育学領域担当教員による授業改善のための懇談会を行った。10時から約90分にわたって自由な雰囲気の中で話し合いを進め、以下のような点について話し合った。

(1) 学生の入学までの専攻分野と授業の専門的内容とに乖離がある場合の対応について

「学生の専攻分野が異なっており学部で基礎を学んでいない場合、論文講読形式の授業で内容の要約・発表・討論はできるが、専門的な内容の理解が十分ではないことがある。その場合、どこまで内容理解の指導に踏み込むべきか悩んでいる。文献の読み直しをさせることも可能だが、その指導にこだわってしまうと授業が進まない」という問題提起がなされ、それに対して以下のような議論が交わされた。

①教育学領域は学生の専攻分野が多様で、学生の専門としていない分野の授業であれば、内容が十分に理解されにくいのもしかたがないことかもしれない。どう対処すればいいか難しい。

②専攻してきた分野が合致している学生は授業内で行う議論において正しくコメントできるが、そうではない学生（専攻分野が異なる学生や社会人入学の学生）との間では議論そのものを共有することができず、学生のコメントも表面的なものになりがち。

③専攻分野が異なっても、論文をていねいに読んできたり、しっかり考えていたり、学修への意欲が高い学生も多い。その場合にも、今一步議論を深めたいときに、教員としてどのような指導が適切なのか悩み、歯がゆい思いをすることもある。

(2) 学生の入学までの専攻分野が異なった場合の対応事例について

学生の専攻してきた分野と授業の専門的内容とが異なる場合、どのような授業方法が望ましいかという点に関して、いくつかの事例が紹介された。

①特に他大学や他学部からの学生に対しては、本来なら学部3～4年次に読むべきテキストを最初の数回を使って読ませたり、学部の授業に参加させたりして、当該分野の専門基礎を習得させたことがある。これには一定の効果が認められたが、専門教育の時間が少なくなるというデメリットもある。

②専門性の積み上げは無理があり、ある程度現状に即した方法を考える必要があるのではないかと。例えば、当該専門分野への導入として、論文ではなく専門的なエッセイをテキストとして使用している。専門的になりすぎずかつ内容的にも深められるテキストを見つけ、授業に使用することが1つの解決策かもしれない。

(3) 受講学生数が少ない場合の授業対応について

受講人数が少ない場合の課題として学生による発表の負担をどうすべきかという問題提起がなされ、以下

のような事例が紹介された。

- ①学生による授業準備等の負担を考えると毎回発表というのは難しい(特に受講生が1名の場合)。その際、他の授業科目の課題状況を聞き取りつつ適切な発表回数となるよう工夫している。
- ②文献講読で12回分の発表を行わせている。ただし、読んだ内容を整理してまとめさせる発表ではなく、文献を読んだ上での意見や感想等についてまとめて発表させ、それをもとに議論を深めるといった進め方をしている。

以上

V. 3 現代マネジメント研究科

1. 大学院現代マネジメント研究科の概要

平成26年4月に大学院現代マネジメント研究科(修士課程、定員5名)が開設され、本年度が3年目となり、修士課程1年生、2年生合わせて3名が在籍している。本研究科では複雑化する経済社会において既存のモノや仕組みに“イノベーションマネジメント能力”を活かすことでより高度な付加価値を創造するための人材の育成を目指して教育・研究を行っている。

2. FD活動

本研究科では個別の指導教員による指導だけでなく、下記のような修士論文の作成に向けた各段階での発表会を開催して各大学院生の研究の進捗状況を教員全員が把握し、様々な専門分野の視点からの複合的な指導を行っている。

1) 修士論文中間合同発表会 平成28年10月18日(火)

箕浦由里子「女性労働と企業の労務管理－ワーク・ライフ・バランスを視点として－」

子育てしながら働く女性のワーク・ライフ・バランスを知るためにアンケート調査や企業へのヒアリング調査を実施する。

2) 修士論文構想合同発表会 平成28年12月20日(火)

赤堀晃代「交際費の課税要件に係る一考察～「萬有製薬事件」、「オリエンタルランド事件」をふまえて～」
法人の交際費に関して認められる要件を著名な裁判事例を踏まえて考察している。

内山千布「所得税法56条の現代的意義～宮岡(妻税理士)事件～」

自営業者の配偶者に対する課税について時代による解釈の変化を踏まえて考察している。

3) 修士論文発表会 平成29年2月1日(水)

箕浦由里子「女性労働と企業の労務管理－ワーク・ライフ・バランスを視点として－」

保育園に子どもを預けて働く女性へのアンケート調査や企業へのヒアリング調査に基づいて、女性のワーク・ライフ・バランスについて考察している。

3. 院生の学会報告

本研究科における指導の成果として大学院生は学会において研究発表を行い、高く評価されている。

平成29年2月18日(土) 日本家政学会中部支部

第17回(平成28年度)家政学関連院生・学生研究発表会 於：相山女学園大学

箕浦由里子「女性労働と企業の労務管理～ワーク・ライフ・バランスを視点として～」

修士論文での研究成果に基づいて女性が働く上での課題を分析し、働きやすい環境や支援策について考察している。

4. 今後の課題

- ・学内他3研究科との連携による教育・研究の質的な向上。
- ・大学院生指導における主研究指導教員・副研究指導教員を中心とした指導体制の強化と研究支援の仕組み作り。
- ・大学院生による学会発表・論文発表の促進。

V. 4 教育学研究科

1. 授業アンケートと懇談会の実施

2016年度大学院全体で、初めて授業院の授業アンケートを試みた。これは、6月21日開催の大学院委員会、7月1日開催の大学院FD委員会の決定に基づき、郵送による前期授業アンケートを実施した。大学院では定員が少数でしかも定員充足されていない事情があるので、一般的な計量的手法ではなく、3項目の質問項目について、質的な自由記述で回答を求めることとなった。①大学院の授業科目及び研究指導科目で興味深かった点、有益だった点、②大学院の授業科目及び研究指導科目で改善すべき点、③教育設備・研究機器・授業関係なので、気づいた点の3項目である。前期アンケートは2016年7月13日（水）～7月30日（土）の期間で、回答を求めた。同様に、後期は2017年1月18日（水）～2月3日（金）の期間が実施であった。

2016年度の教育学研究科の場合、修士1年の入学者がなかったために、修士2年2名の在学生のみが調査対象となった。前期アンケートの場合2名が回答、後期アンケートは1名が回答した。①について1名の院生は、（この年度に初めての授業アンケートの実施ということもあり）前年度の履修した科目を含めて10科目を取りあげ、それぞれの科目の「興味深かった点、有益だった点」について詳細なコメントを記述していた。もう1名の院生は、2科目を取りあげ、同様のポジティブな点を記述していた。②については、2名とも「受講者が少ないので、もう少し院生を増やす努力をして欲しかった」という指摘をしていた。③については、院生用のコピー機の設定が、カラーコピー優先の設定になっているので、モノクロ優先の設定に変更して欲しいという記述があった。前期アンケートに加えて、前期アンケートの結果データがまとめられたのを受けて、8月29日（月）13：00～14：00早川教育学研究科長の研究室で、大学院FD委員の宮川委員同席で、2名の院生と座談会形式で、意見調書をした。前期アンケートより、更に詳細な内容について意見を得ることができた。大学院のカリキュラムは、理論的な科目・実践的な科目、教職インターンシップ（1年間に亘り学校や幼稚園の現場でインターンシップの体験を積む）といった多様な内容・授業方法の科目が用意されていることで、教師の実践的研究や修士論文に向けての足がかりとしても有益であったという意見などが出された。これらの内容は、9月の教育学研究科委員会で授業アンケートとともに報告され、構成員に周知し、意見を共有した。

後期授業アンケートについては、（所属についての記載がないので推定で）1名の回答があった。アンケート①・②については、前期実施と同じと記載があり特記事項はないが、③については「院生研究室の壁にひびが入っていること、また院生用に専用のコピー機があるのはありがたかった。修士論文の終盤で大量のコピーが必要となったが、規定の枚数を超えてしまうために、コピーの使用量が簡単に分かる表示が欲しい」といった要望が出されていた。前期のものと同様に、事務サイドに連絡し、技術的に対応可能なもののみなので、即時対応をした。なお、後期は大学院の教育の改善のための意見聴取の機会として、座談会に代わり2017年3月15日大学院修了式の当日17時から、数名の大学院責任者と研究指導教員とともに、修了者2名と会食会談を行った。会食という状況を差し引いても、少人数・個別指導という大学院の教育に十分満足したものであるような評価意見が窺えた。

2. 修士論文の中間発表・最終発表会

修士論文の中間発表は、2016年9月28日（水）15：00～16：00教育学部B308教室、最終発表会は2017年1月31日（火）13：30～14：40教育学部B307教室で実施され、いずれの会も多数の教員が参加し、有益な指導上の助言や意見、活発な質疑応答がなされた。これらの機会は、大学院担当の教員にとっても研究指導上のFD活動としても有益であった。

VI FD 委員会名簿

VI. FD委員会名簿

平成28年度全学FD委員会委員

所 属	職 位	氏 名	選出区分
学 長 補 佐	教 授	後 藤 宗 理	学 長 補 佐
生 活 科 学 部	准教授	槁 本 雅 好	学 部 FD 委 員
国際コミュニケーション学部	教 授	堀 田 あけみ	学 部 FD 委 員
人 間 関 係 学 部	教 授	田 村 雅 夫	学 部 FD 委 員
文 化 情 報 学 部	教 授	谷 口 俊 治	学 部 FD 委 員
現代マネジメント学部	教 授	石 井 雅 治	学 部 FD 委 員
現代マネジメント学部	准教授	石 井 圭 介	学 長 指 名
教 育 学 部	准教授	朴 信 永	学 部 FD 委 員
看 護 学 部	教 授	杉 浦 美佐子	学 部 FD 委 員

平成28年度大学院FD委員会委員

所 属	職 位	氏名	選出区分
学 長 補 佐	教 授	後 藤 宗 理	学 長 補 佐
生 活 科 学 研 究 科	教 授	江 崎 秀 男	研究科FD委員
人 間 関 係 学 研 究 科	教 授	田 村 雅 夫	研究科FD委員
現代マネジメント研究科	准教授	水 野 英 雄	研究科FD委員
教 育 学 研 究 科	教 授	宮 川 充 司	研究科FD委員

梶山女学園大学・大学院FD委員会活動報告書（平成28年度）

梶山女学園大学・大学院ファカルティ・ディベロップメント 第4号（通巻 第17号）

平成29年10月発行

編 集 梶山女学園大学大学院FD委員会・全学FD委員会
（平成28年度・29年度委員長 後 藤 宗 理）
発 行 梶山女学園大学
〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17-3
TEL 〈052〉781-1186（代）

印刷 株式会社荒川印刷

